



江戸名所図會

十

西垣文庫  
文庫10  
6556  
10





武藏國總社六所明神社 府中驛路の左側あり延喜式内大

麻止乃豆乃天神社是なり後世亦至るべく同く式内小野神社と

合せ祭る故小今両社一社の称あり神主ハ猿渡氏其餘社司

社僧等奉祀す

本社祭神 大己貴命 相殿 素盞鳴尊 伊弉册尊

瓊々杵尊 大宮女大神 布留太神 以上六神これと俗に

天下春命 瀬織津比咩命 稻倉魂大神 以上三神これと客来

と九神合せて共六所宮と称す此三神のハ一宮と小野神社との条下ニ詳なり

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡八座

大蔵國風土記曰 多磨郡 六十七

所祭大己貴命也 安閑天皇乙卯始 莫宮社花時以

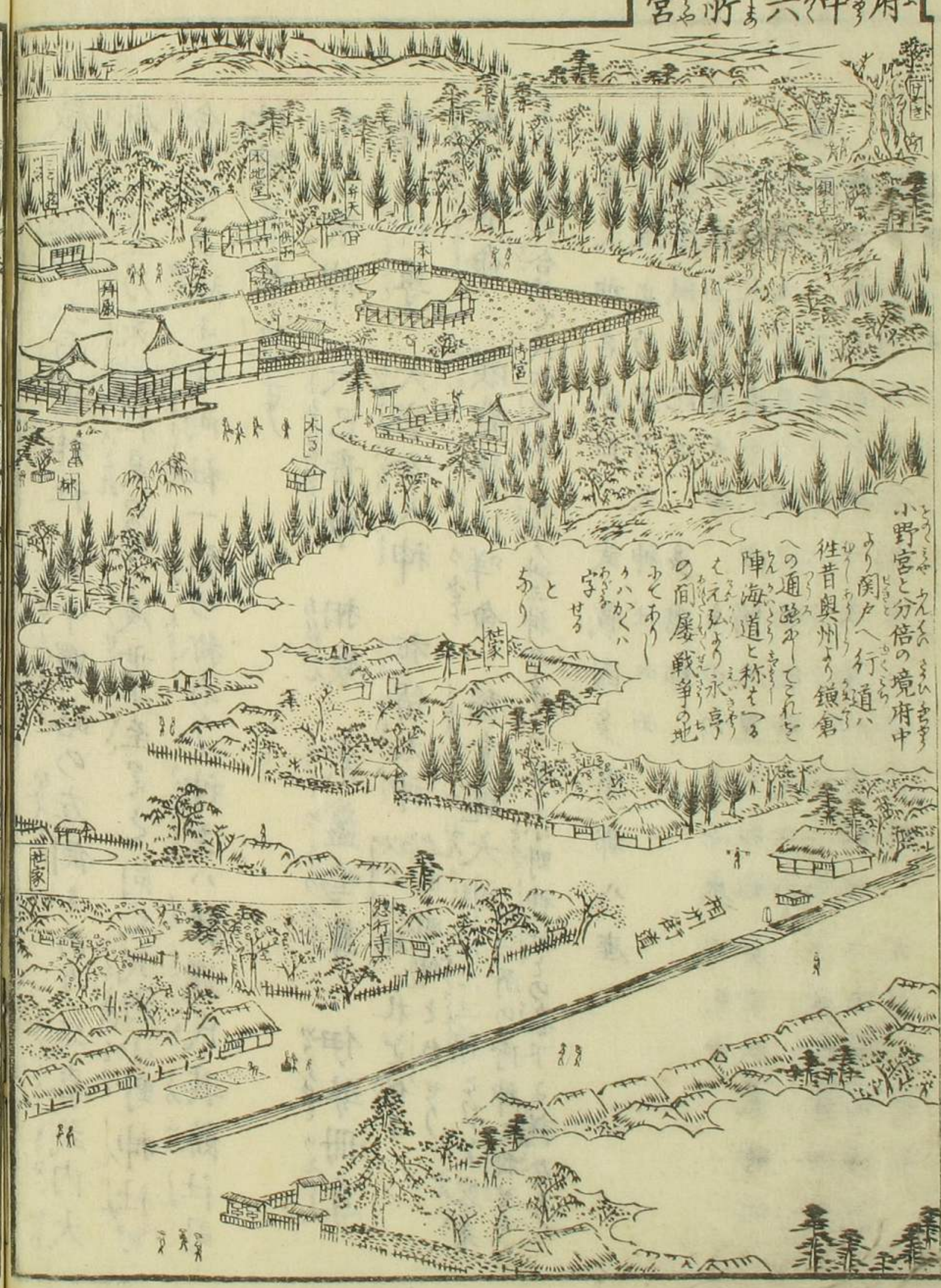
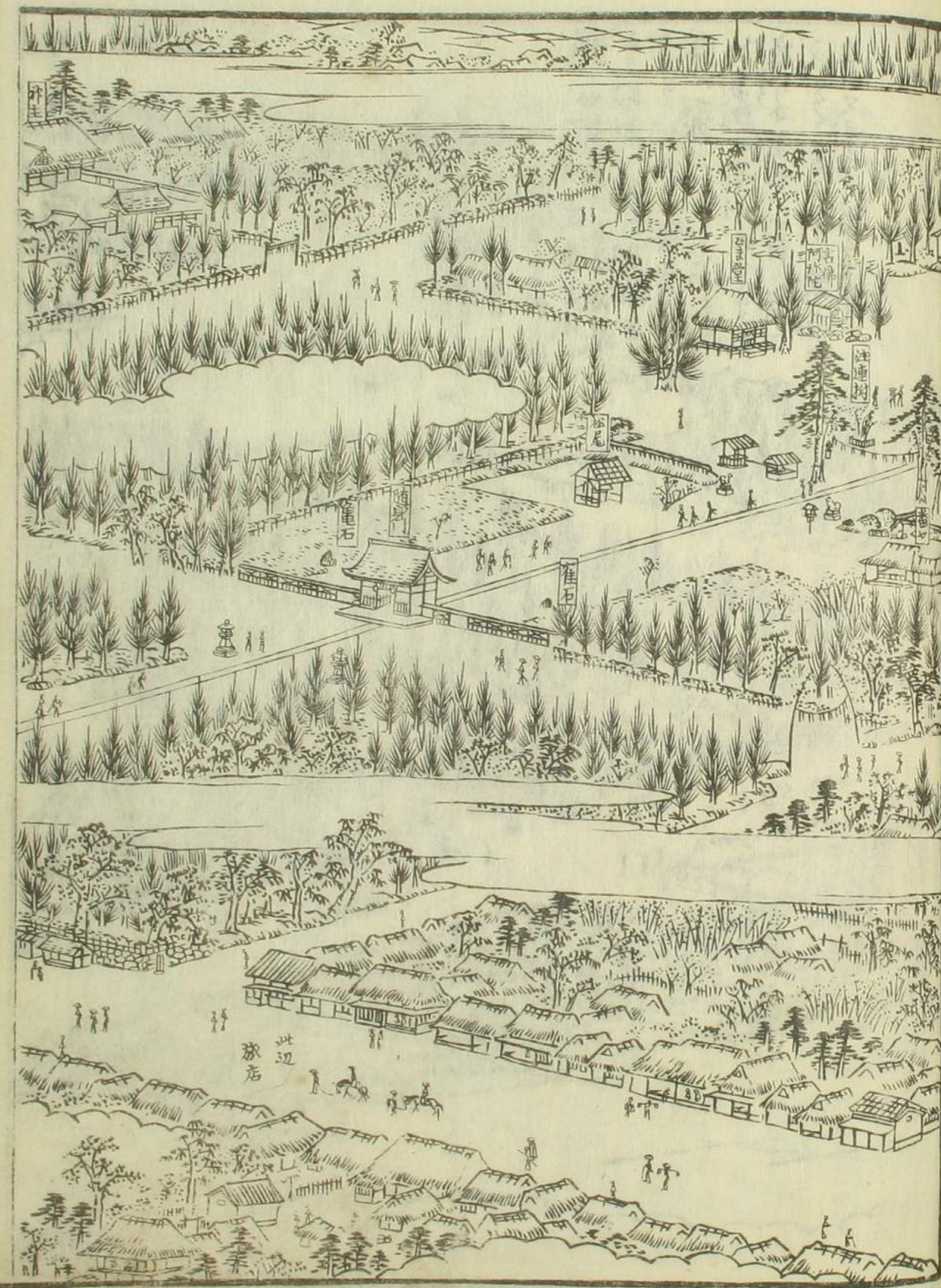
鑑曰新巳貴命也 以新稲祭之云云 及晚御臺所

伊豆氣武衛六所御中畧為御祈禱被立奉幣御使於

葛西三郎云所推現并近國宮社 武藏六所宮



府中六所宮



小野宮と分倍の境府中  
あり関戸一行道ハ  
往昔奥州の鎌倉  
の通路中これハ  
陣海道と稱する  
と云ふあり永享  
の同慶戦争の地  
あり

旅店  
此辺

陣海道



上古國造此より社奉あり一頃門戸のあり一社隨身門  
 あり注連と云ふことあり一頃門戸のあり一社隨身門  
 の木像を宮之姫社隨身門の前方の林間にあり  
 本社の后妃の神あり例年七月十三日此の神職來り  
 あり頼朝卿の妻と云ふことあり例年七月十三日此の神職來り  
 馬場一帯の馬場あり又大門甲州街道と隔る北の方の華表の内の左右  
 あり二條の馬場あり慶長年間大坂市勝利の邊にあり  
 伯馬野馬の馬場の地あり古司の社あり  
 馬市 毎歳五月三日始り九月晦日終るを定む社前大路の傍に制  
 札を懸く以て警す此地の馬市あり國造の在せし頃毎歳牧の馬を取  
 り長二十五匹を懸く此の馬市あり國造の在せし頃毎歳牧の馬を取  
 り馬を懸く人氏市となり此馬市事保報間止るなり  
 浅草の藪の内と麻布十番との二所へ引れり然るに本傳左馬門  
 詣此所の馬場あり今江戸馬口頭より本傳左馬門  
 東照大権現宮へ系泊す

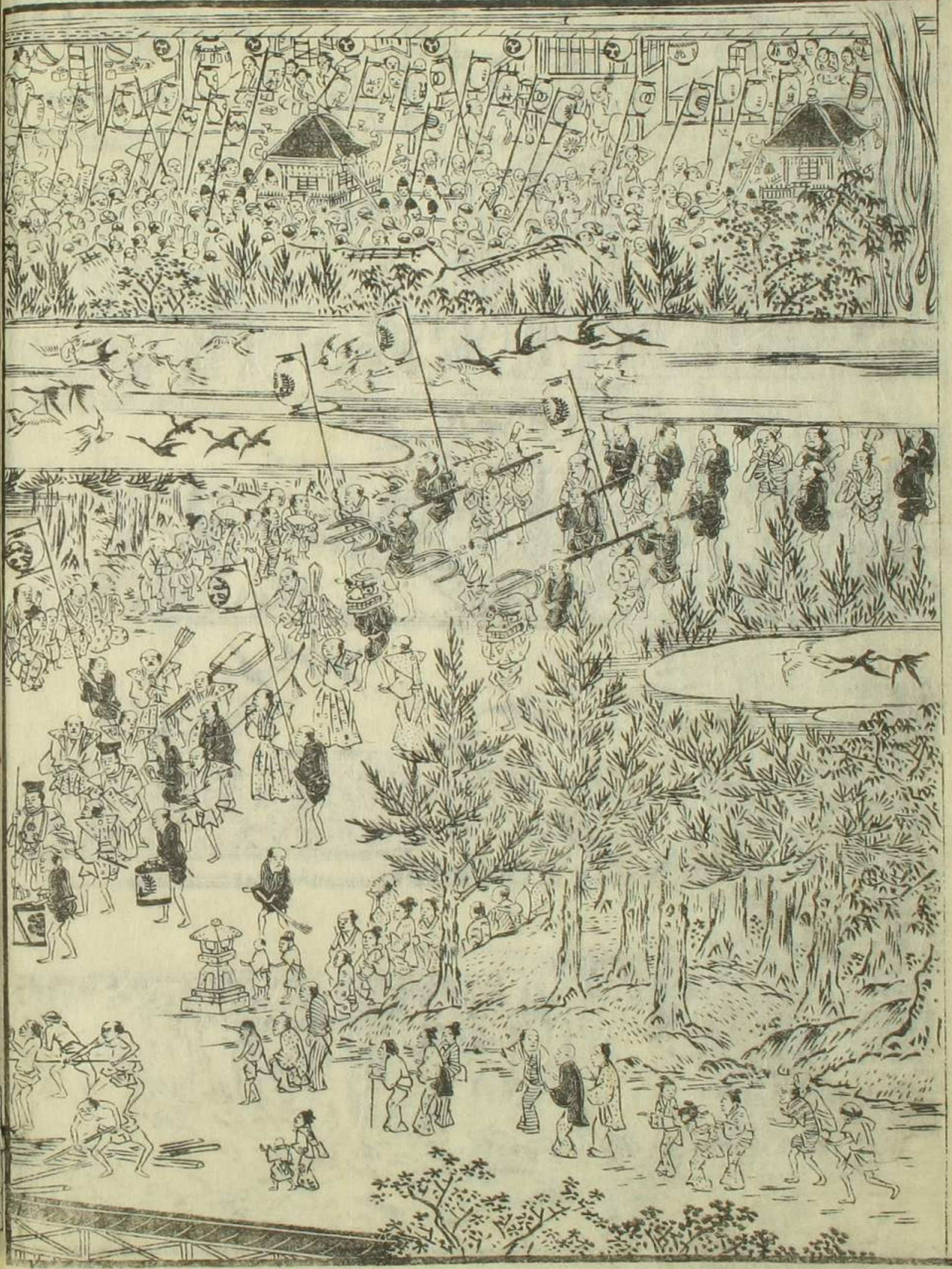
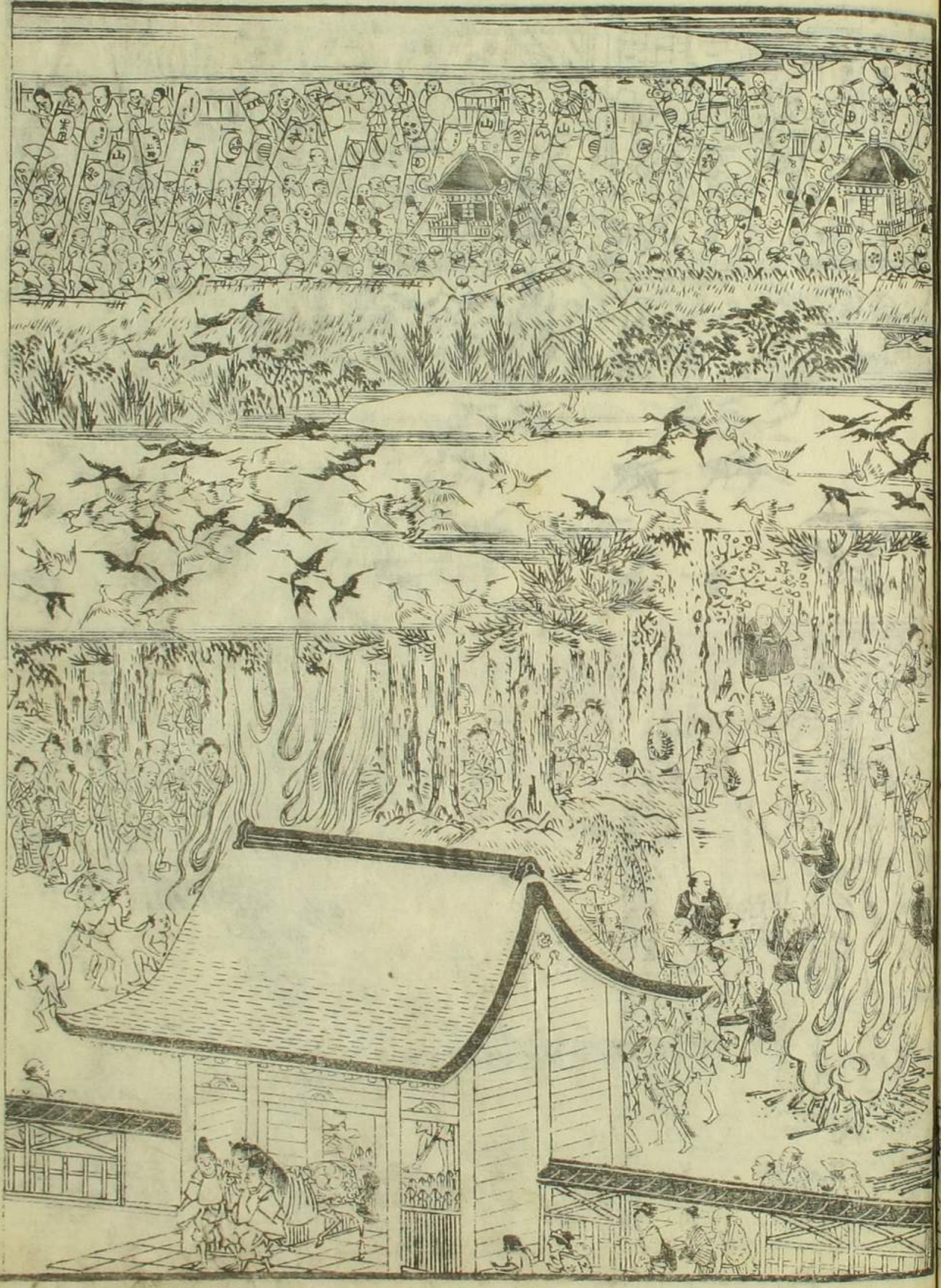
制札 社前大路の入りあり  
 慶長年間小建らんと云

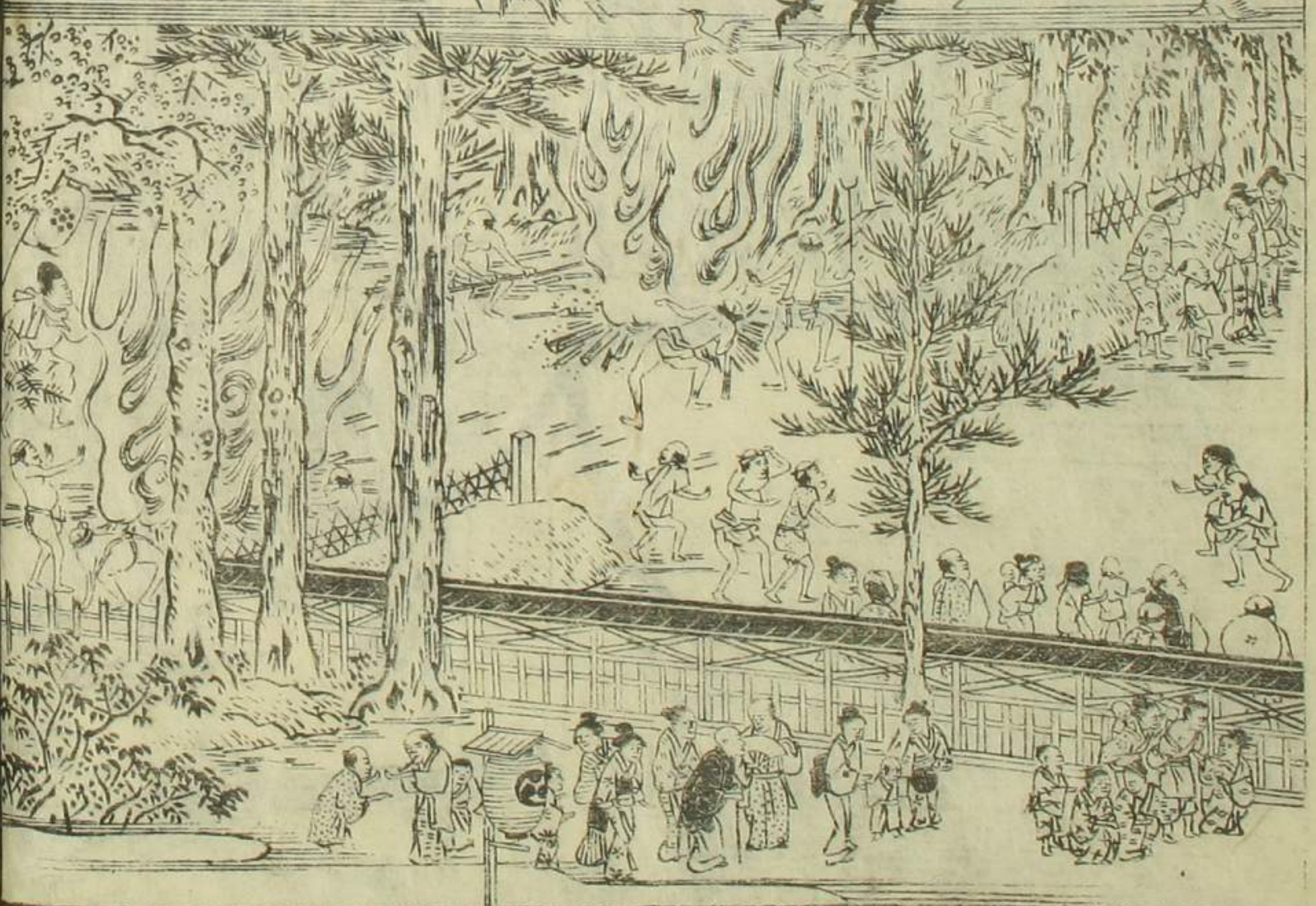
一以所より馬町まで事  
 五月三日約々より初め  
 九月毎日を限らんと  
 此の馬市あり  
 者也仍下知也

月日 奉行

競馬 毎歳五月三日の夜六所宮の神旅の前甲州街道中番場宿の大馬路の  
 車檢使とて御旅の神樂 同月四日拜殿 大神事 神出陣鎮座の辰あり  
 傍あり假家小伺候す 殊に恐れかき神宮各四月二十五日品川の海濱に至りて  
 一基ハ隨身門の前より左へ甲州街道の大路を西へ渡り  
 深秘の神あり大幣を掛けぬ家小假家を徹し奉幣の式あり  
 神主儀渡氏農夫野口とて家小假家を徹し奉幣の式あり  
 此野口と林あり又同一農家岡野とて夜門戸を閉て深く慎み居り











出現神託ありあり祠を經營して里人崇敬し大麻止乃豆乃天神是なり  
延喜式大麻止乃豆風土記大麻止乃知とす又大豆ハ通韻又大豆ハ  
麻止を以て於保麻止と一或ハ布止麻止多麻止又大豆ハ  
成務天皇五年乙亥兄多毛比命とて此地小國造武藏國の國造の推興  
天徳日命の孫出雲臣祖谷二井因る茲小府を削る  
宇迦諸忍之神狹余十世の孫中々府中の發りあり  
又大巳貴命ハ此地出現の靈神あれハ是を崇とて祖神なるを以武藏國の國造の推興  
素盞鳴尊を合祭兄弟多毛比命ハ出雲の臣の孫なるを以の故ハ  
相殿小伊弉册尊瓊々杵大宮女命布留大神等の四神を配神祕ありと云  
祀新小此地小宮祠を經營ありて圭田を附して以て國社一宮の祭神あり  
此を稱して六所宮大麻止乃知天神と云又天下春命一宮の祭神あり  
瀬織津比咩小野神社の祭神なり倉稻魂大神小野神社の祭神なり以上の三  
神を六所宮の相殿小遷座なる客來三所と稱し是を  
祭る小國社の禮を以す爾來大麻止乃知天神小野神社二社合  
祀の社とをありしあり安閑天皇乙卯年小至りてハ春冬

二時の祭祀を行つて由旧史小至り然小星霜を歴て康平  
五年小至り源賴義義家兩公奥州安倍貞任宗任一族征伐  
發向の時當社小詣り軍の勝利を祈願ありて夷賊平治  
凱歌の時報賽とて一華表の内左右兩辺小槻教株を種  
めて以て成功を謝し其列樹今治兼四年右大將賴朝公當社小  
詣り請禱し大ニ戰勝の功ありて文治年間宮社を再興し又  
壽永年間繼嗣を求め頼家公を傲く葛西三郎清重哉  
して神器を獻せしむ寛喜四年中武藏左衛門尉資賴を命  
所の祭祀今小連綿として廢せず其後足利家小至り迄世に  
將軍家相繼て崇敬衰へず就中河入國小速む御當家より  
尊信ありて社領五百石を附し御祈禱の命を命せし関原  
大坂の兩役中當社の神主猿渡左衛門佐盛道とて御勝  
利の御祈禱を修せしあり御感狀所直書を給ふ其後二代

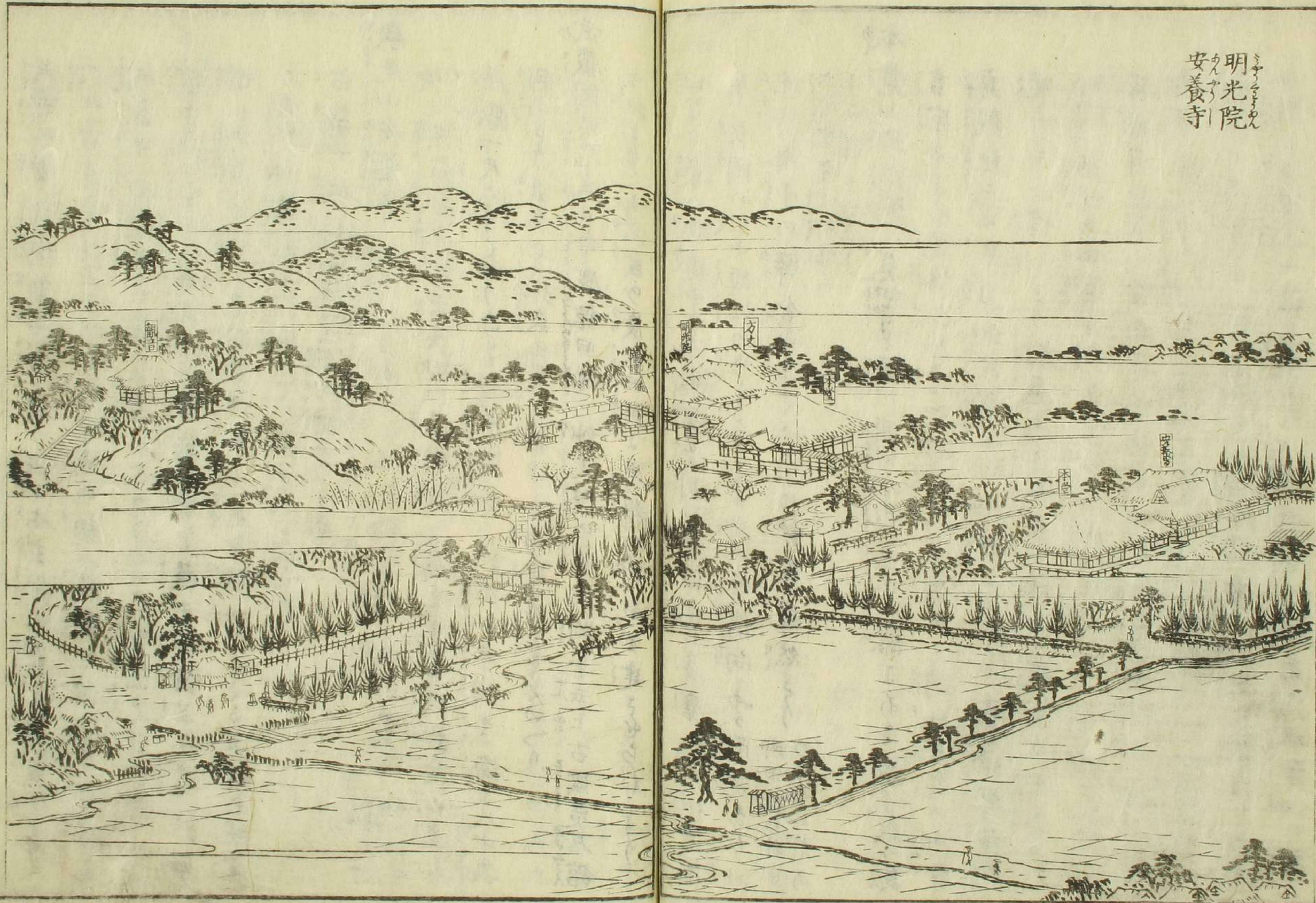
將軍家よりと又御書判の御直書を給ふ殊小御在國の  
總社々々を以て慶長年間石見守大久保氏某をして神  
殿を新中一國家の紀典に列せしむ且命を下し馬市此  
法則を定給ふ其後正保三年府中本町より火出當社神  
領の地に至る迄皆悉く焼亡を依て寛文七年丁未大和守世  
廣之侯を以て造營使とせしむ以宮社御再建ありしあり  
寛永元年注す所の社記云神主藤原盛正天正年間北条陸奥守  
氏照の爲に八王子の城に籠る此城没落の時盛道又此無火の災不  
かり當社悉く灰燼せり故に頃世々將軍家の澄状或は秘藏の神宝等  
六所宮御旅所 六所明神より一丁半をうり西の方府中番場宿の  
中程相模街道への岐道札の辻の傍より毎歲五月五日大祭此  
辰子夜六所宮の神輿をあふお辻すまろ其式八前の条下小  
詳なり

御田 六所の宮の後の小径を過る百歩をうり小あり豁然とる楢

田なり東ハ悠遠中々眺望分明なる南ハ多磨川の流を隔  
て長岡の上ハ短松の立ちまをえる世ハ所謂向ハ岡是あり此  
地北ハ府中の驛舎中々六所の林叢鬱然とる 御田植の神良  
六所宮年中行事の 次第ハ前の  
下ハ詳なり

本覚山如光院 真如寺と号し府中本町の南の小路にあり新義の真  
言宗中々花浴仁和寺の御門跡に属せ 清和天皇の御宇  
貞觀紀元の年真如法親王の御願ふより慈夜僧正創  
建あり佛刹より行基大士彫造の地藏菩薩埜をかきと  
長五寸 若干の田園を附せ然ハ當寺度々の兵燹に罹り大  
五分 荒廢なりとありと永亨十一年己未法印宥源 長祿三年己卯  
再建し當寺中興の閑山とあり 天正十九年辛卯御當家本堂  
家帯の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同一向拜  
ハ掲る本覚山の額ハ南山の以門兼鎮の書裏門本覚山の額ハ

明光院  
安養寺



天倚の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書かりて觀音堂ハ  
門の入口左の山比上よあり大悲殿の額ハ僧禪大僧正覺眼筆と云  
本尊十一面觀音の像ハ長二尺五寸ありて聖德太子の作といふ  
當寺什宝ハ北条氏照の書簡二通を藏を其餘若小鷲の画  
幅ハ御筆の物なりて牡丹唐草ハ扇を縫物ハ五條の袈裟  
と共に御當家より拾ふと云ふなりといふ

古磬一枚 華物中して銅色變ま一臺ハ  
左甚五郎り作らなりと云

畷光山安養寺 妙光院の南の小路を隔て同い並びあり 此地の  
名と矢の

崎と天台宗上州世良田の長樂寺ハ属を本寺阿弥陀 ゆ来を

座像一尺六寸ありあり作者詳あり永仁年間海土人中興

関山より近き年地魚の災ハ罹りて日記を亡むといふ

武蔵國造兄武日命殿館跡 妙光院の前比岡を云上古國造居館  
の地なり 所入國の後此旧跡ハ省耕の御殿を建させられり

大樹屢こふ入らせられり云保三年丙戌十月十二日府中

本町あり出火して此御殿焼亡せり其後ハ御再興もあり享保

年間里民の乞ふ任せ陸田となし下ささあり故ふ土人ハ御殿地

と称せり此所の眺望を勝とせり

按て國造ハ神武天皇都を大倭國橿原に定めて天皇の位小即あり時葛城  
國の造を定めて其餘功あり者小國造を賜ひ又縣主と定めてありこの  
代々仕せられり和銅の比を總仕の國造百四十四貫あり皇朝上世百四十  
四箇國より國造一人ありて神祇祭祀を掌りて民事を治  
仁德帝の御宇ハ遠江國司又崇徳帝の御宇ハ河内國司とありあり聖德太子の  
憲法中も國司國造の事ありて天武紀も諸の國司國造郡司并ひ百姓等とあれハ後又國  
司を置りて國司ハ國造より位高く權重き職ハ國司國造と次第して稱せられり  
これより後世の國史中往々國司國造の事を載られりといふ世ハ國造を罷り  
しとのみありて國史中往々國司國造の事を載られりといふ世ハ國造を罷り

是政村 府中の南多磨川の北の岸頭あり此地の里正小井田氏の人あり

其家系を按ふ祖先ハ畠山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉あり

小田原北条家の臣井田振津守是政の子孫なりと云天正十八年小田原

没落の頃八王子の城敗れり後此地ハ住を依て是政村の名あり



分倍河原

陣街道

洞塚

悲願山善明寺 圓養院と号し府中本町より開戸へ行道の右側小

あり相模御道中へ天台律院あり常明院は属を本寺より阿弥

陀如来の像を安す坐像一丈六尺あり胎中慈覺大士彫造の潤創年

久く中古寺院荒廢しく記録と失を然も近來編無為解脱居士

俗稱依田伊蔵 眞鎮とあり 當寺と再興あり證海上人と申奥潤山と一田園

等を寄附せり故小居士の肖像あり東帯の像なり側は内陣の額小

毗尼藏とあり准后公遵法親王の志等なり解脱居士の墓を

堂後小あり彼岸山文庫は本堂の右小あり庫中収蔵を此

書籍ハ解脱居士の菴書中してまゝ百二十二箱あり此文庫は収蔵するの書

津保宮 同所四丁をかり西南の方下河原農民の地小あり當社ハ國造

の靈社なりといふ今後小茅祠を存するのといふと毎歳五月五日六所

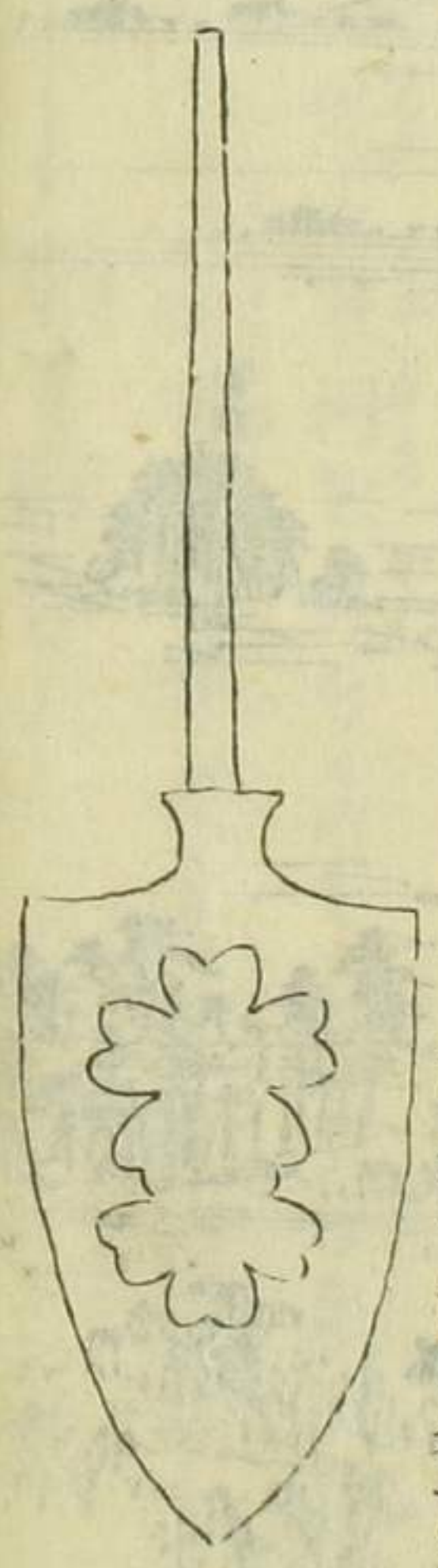
宮大祭の爲ハ當社より六所宮へ奉幣使を立ち旧式中一則六所

宮の神官馬小衆一々是と勤む

按津保八壺の淵... 源氏物語桐壺巻... 元年の壺前... 分倍河原 同所の南代小川を隔る耕田を以て

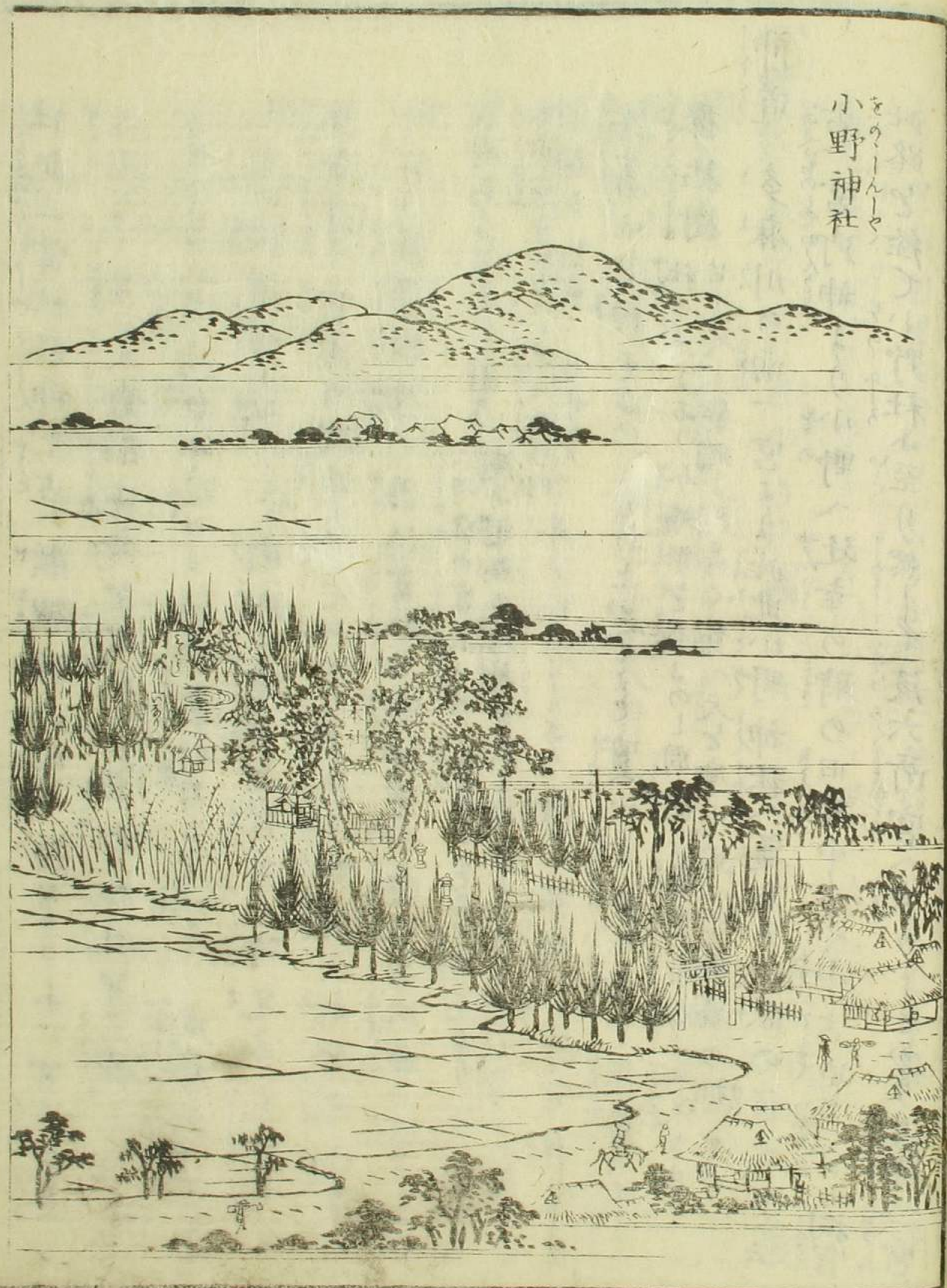
戦ありし地... 亨徳四年の春... 争戦し大上杉勢敗北... 大上杉朝興ハ多磨川を前ふあて陣とる

大上杉朝興の如く... 透しや... たり



三千人塚... 代小川 府中の南を流る西の方二里ありを隔る青柳村より多麻川の水を分る此辺耕田の用水とあせり

陣街道 小野宮と分倍との間の耕田の地中... 行道の名とて昔奥羽等の國より鎌倉或ハ大磯杯への往還此道中へ鎌倉より北國東國へ軍勢を向らし頃の通路なり



小野神社

あふかく称せり

小野宮村陣街道を隔て分倍より良小當り地をあらふ

僅二家敷三十軒と云ふ小野ハ上古郡村定らるる時よりの号

小野縣と稱せしをの是なり今ハ府中の舊名と云ふ

抄不多磨郡小野字乃とあり

岡發の始ハ瀬田敷五反程あり

北田間の塚ハ中古の甲州街道府中より日野へ往還の一里塚なり

古街道と唱ふ

武藏國風上記曰多磨郡小川郷

延喜式天神皇三年甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

三代實録光孝天皇紀癸酉授武藏國從五位上小

野元慶八年七月十五日日

野正五位上云云

野神

野宮村陣街道の右あり今廢小叢祠を存するの

六所宮の条下詳合せり

武藏國風上記曰多磨郡小川郷

延喜式天神皇三年甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

三代實録光孝天皇紀癸酉授武藏國從五位上小

野元慶八年七月十五日日

野正五位上云云

野神

野宮村陣街道の右あり今廢小叢祠を存するの

六所宮の条下詳合せり

武藏國風上記曰多磨郡小川郷

延喜式天神皇三年甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

三代實録光孝天皇紀癸酉授武藏國從五位上小

野元慶八年七月十五日日

野正五位上云云



社記云當社祭神上古ハ瀬織津比咩一座なり一宮下春命と  
遷座なり又倉稻魂命を配祀して小野神社と三神となり  
らせし其時世あつて最舊社なるを以て 成務天皇五年  
乙亥の秋諸國令一國郡小造長を置り時兄多毛比命も  
詔をまり當國の國造として此地に至り小野縣小府を闢ら  
しより後崇敬厚く再び當社の御神を六所宮の相殿に遷し  
らせらるるなり  
六所宮は客來三所と稱するものハ即是なり下春命は  
六所宮はもと客來三所の内 ありてより 僅に茅祠一字を存し  
其舊址を標するのこなりと之を實小千載の古を想像し  
檜枯樹社の後ハ今蟠根を存するの周圍計其根上百人と座  
神道 多麻川の南一宮より此地小野神社へ通る田畝の徑路を云  
古一宮神より小野へ遷幸の時の旧路ゆゑ中古迄二宮の祠官  
此路を経て小野社に至り然して後六所宮へ来りしとあり其頃二宮

あり空輿を昇来れり小野宮邑の里民舉て多麻川の岸頭  
まで送る迎せし一宮祠官の口碑小傳  
小野牧 今ハ府中の北國分寺の邊より小川砂川の間の農  
田となり地其牧の舊跡なりと云傳ハ小野ハ昔ハ府中の惣稱は  
名の茶下 往古當國の國造年々八月に至り此地ゆく駒を撰て  
鳳湖は齋くるとなり公事根元ハ八月廿日武藏國小野御馬  
四十足をひくるとなり 六所宮馬市及馬場の  
拾芥抄曰 年中行事部 小野御馬云云  
又 同書 比名 立野 秩父 己上武藏  
又 延喜式 武藏國 小野 秩父 己上武藏  
石川 武藏國 小野 秩父 己上武藏  
御式 武藏國 小野 秩父 己上武藏  
右諸牧 駒由比 小川 牧立野 秩父 己上武藏  
等諸牧 駒由比 小川 牧立野 秩父 己上武藏  
齒四牧 駒由比 小川 牧立野 秩父 己上武藏  
又 同書 比名 立野 秩父 己上武藏

凡年貢御馬者中畧武藏國五十足諸野牧三十足立  
 凡諸國所貢繫飼馬牛者二察均分檢領訖移兵部  
 省其數中畧武藏國馬十足下畧  
 此余北山抄西宮記中右記猶其外中畧小野の牧の名往々として悉く筆跡は  
 年中行事奇合

むと... 野の幾く... 頃阿

按延喜式小川郡とある所の則小野の牧の記に... 小野の府中の  
 惣称中... 府中古小川郡... 武藏國風土記... 小川の  
 諸源山稱名寺府中番場宿北の横小路の右側もあり時宗あり

相州藤澤の清浄光寺小屬を本号八惠心僧都彫造の阿弥  
 陀如来立像三尺八寸あり... 靈佛を安せ此地ハ往古六孫王経基  
 居館の舊跡なりと云... 其後

一光道和上人當寺を草創... 應永元年三月七日寂後復遊行上人當寺を  
 再興あり... 當寺は古き大鼓の胴を収む尤古物に...

龍門山高安護國禪寺 等持院と号六所宮御旅所より九丁を...  
 を隔て西の方甲州街道の左側もあり洞家の禪宗あり多  
 麻郡二股の海禪寺は屬を本号釋迦如来 五丈一尺服士文殊普  
 賢の像賢俊法眼の作なりと云當寺は俵藤太秀郷の関基  
 やと秀郷の宅地の旧跡なりと云... 其後足利將軍尊氏公  
 中興あり故小畧氏公の法号を採て等持院と稱を則尊氏  
 將軍の肖像あり

當寺其先ハ市川山見性寺と号せ... 當寺を秀衡  
 居住の旧跡のあり云東西南の三方今も堀成  
 構へ... 関山大徹心悟禪師と号は本堂ハ武野禪林の額あり

筆者詳なり...  
 藤原秀郷靈祠... 境内坤の方あり今猶荷明神と勸請を  
 辨慶硯水井... 堂後の竹藪あり古井をいふ弁慶此井水を汲んで硯の  
 水とて大般若經を書写せしむるなり然るに此經ハ燒失しき

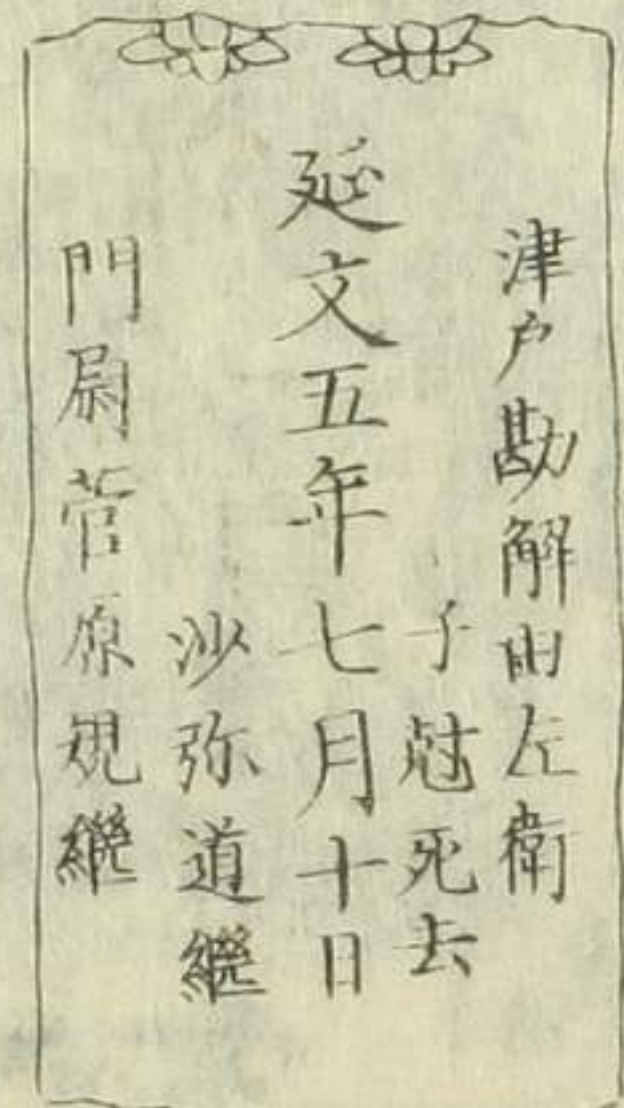
畫き掛幅あり... 舟慶の画なり... 舟慶の古井なり... 舟慶此井水を汲んで硯の  
 架より而巴多々れとも舟慶の号け東の坂に舟慶と号す... 舟慶の古井なり... 舟慶此井水を汲んで硯の  
 架より而巴多々れとも舟慶の号け東の坂に舟慶と号す... 舟慶の古井なり... 舟慶此井水を汲んで硯の

架より而巴多々れとも舟慶の号け東の坂に舟慶と号す... 舟慶の古井なり... 舟慶此井水を汲んで硯の  
 架より而巴多々れとも舟慶の号け東の坂に舟慶と号す... 舟慶の古井なり... 舟慶此井水を汲んで硯の  
 架より而巴多々れとも舟慶の号け東の坂に舟慶と号す... 舟慶の古井なり... 舟慶此井水を汲んで硯の

史ありと際さむひしと名ありしと実なく澄とせしとみなりけしと  
 観音堂 表門をへて正面あり 観音ハ木佛立像七尺あり 左右  
 六観音の像ハ何れも四尺五六寸あり 作者詳ならず  
 當寺ハ足利家の再興より 永徳元年 鎌倉左兵衛督氏満小山  
 義政退治としく發向ありし頃も 當寺ハ陣座を儲けらる又應永  
 六年ハ左兵衛督滿兼周防の大内助義弘ヲ京都ハ於て逆心を  
 起せし時同十月廿一日京都の合としく 當寺ハ動座なりぬ  
 同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平滿重ヲ謀及ハ  
 あり 鎌倉より持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日  
 當寺ハ歸座同三十一年十月廿三日 當寺炎上ありしハ同十月  
 十四日持氏公鎌倉へ還御ありし頃の 鎌倉大草紙に見え  
 たり 當寺什堂の中ハ往古當氏公陣中ハ用ひられしと云古き洞羅一口あり  
 石上山弥勒寺 般若院と号し 高安寺より六町あり 西の方同一  
 街道の右側あり 真言宗ハ府中の妙光院ハ属を開創此

始久し今あるとふあり 永正二年乙丑 推大僧都法印良  
 中興也 本尊大日如来ハ一尺半の座像なり 作者未詳 當寺ハ  
 津戸勘解由左衛門尉菅原規継墓あり

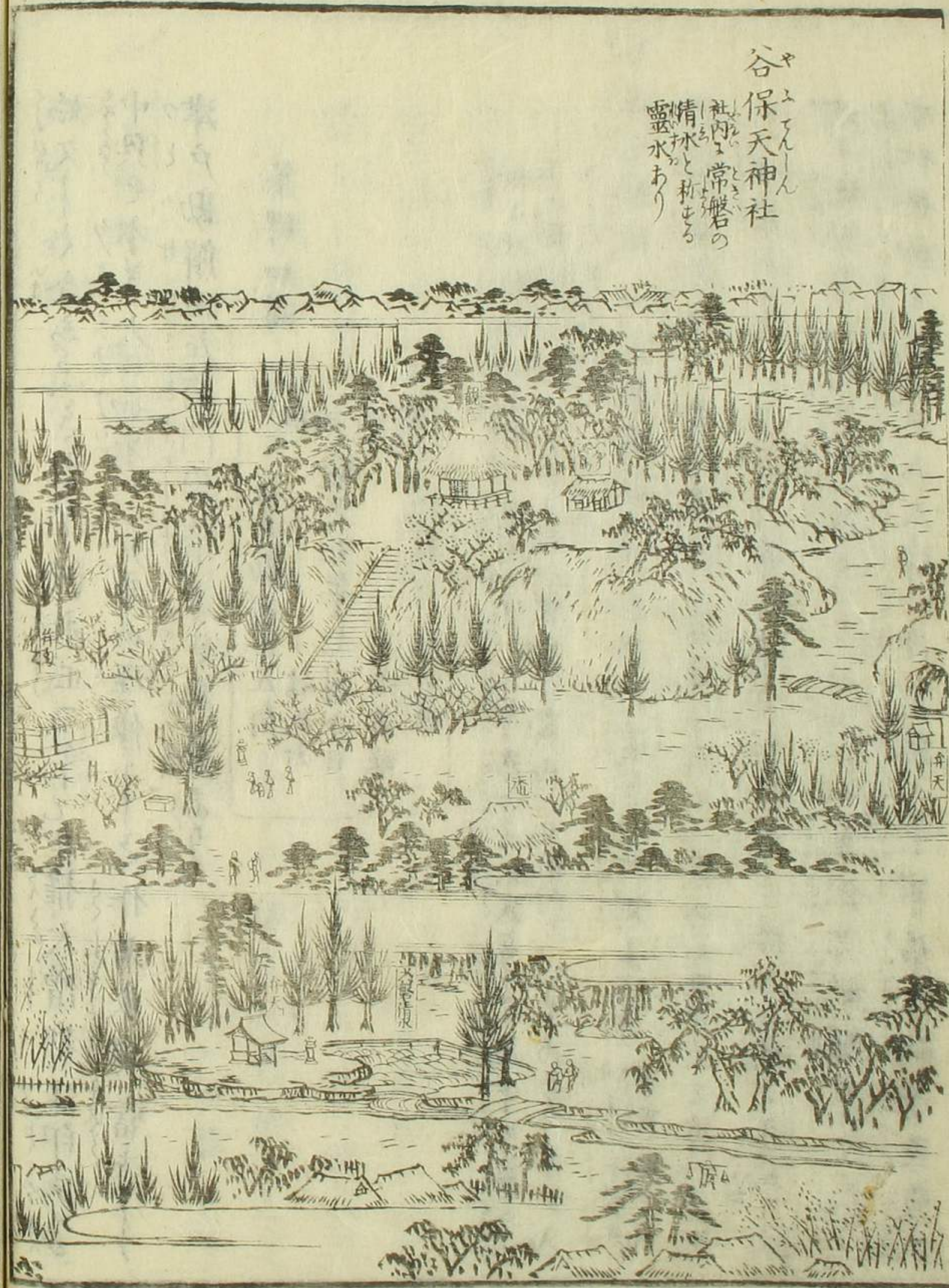
墓碑如圖



按此勘解由左衛門規継ハ津戸三郎為守の氏族なり 為守の墓ハ王  
 子の觀池山大叢寺あり 今ハ幡宿の農氏ハ右衛門とつるものあり 津戸氏  
 其遠裔なりとす  
 谷保天神社 同一街道西の方 谷保村道より左側あり 栗原郷と云  
 別當ハ安樂寺と号し 祭礼ハ毎歲二月と八月の廿五日又三月十五日  
 ハ岡扉あり十一月三日ハ當社往古天神島と稱する地より 今此  
 地ハ遷座なり 縁あり 此日ハ小菜供を献備せしり  
 本社祭神天満大自在天神一座 神躰ハ菅家第三嗣菅原道武

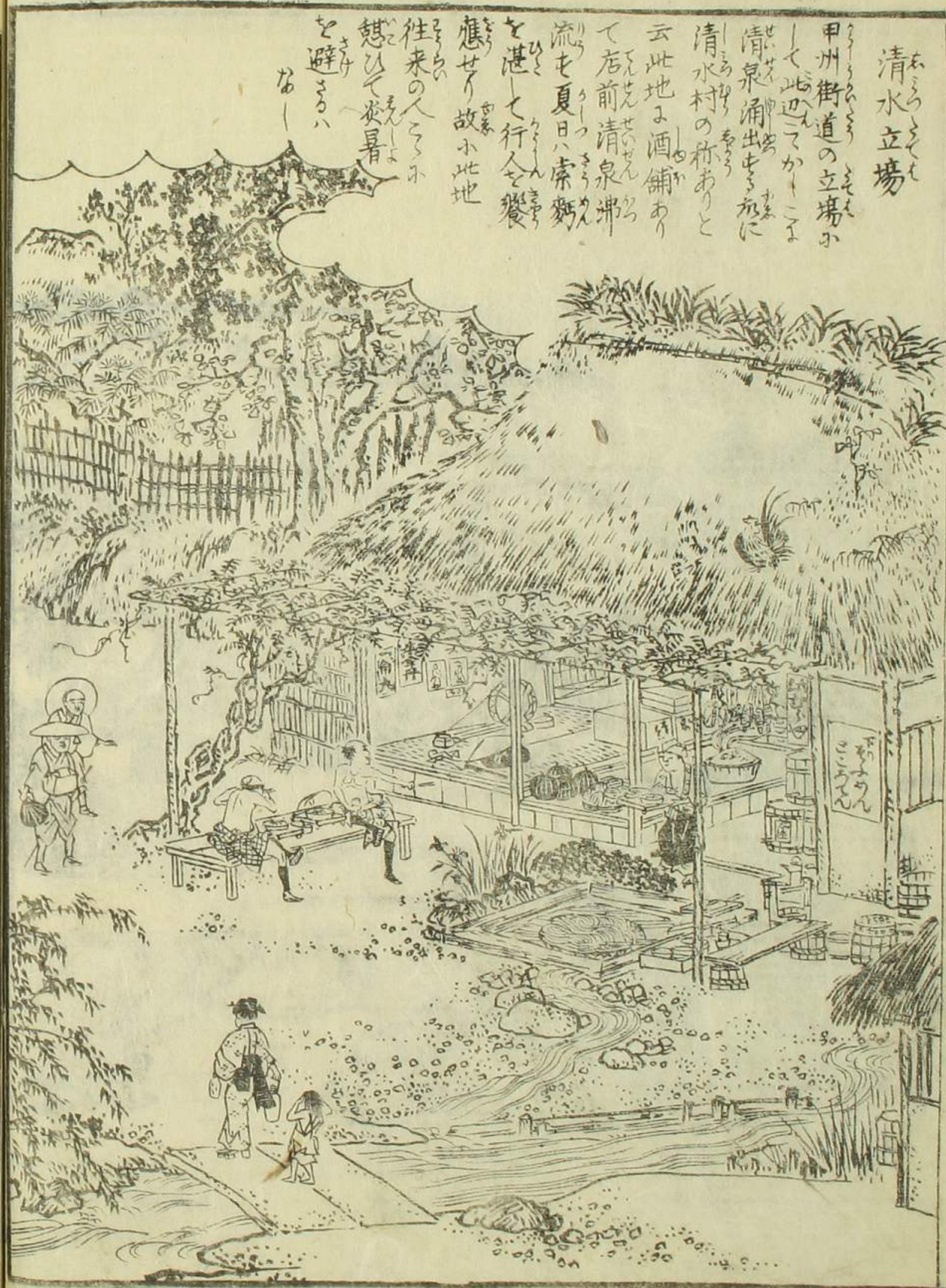


谷保天神社  
社内常磐の  
清水と秋の  
霊水あり



清水立場

甲州街道の立場  
此の地は酒舗あり  
清泉涌出せり  
清水村の村ありと  
云此地は酒舗あり  
て店前清泉湧  
流も夏は涼  
を避て行令を饗  
應せり故此地  
往来の人々小  
憩ひて炎暑  
を避るハ  
なる



朝臣の手刺なり

額 天満宮 後宇多天皇勅世尊寺經朝卿筆

額の裏に左の如きの二十四字を刻せり又外は同額の写し一枚あり水戸黄門  
光國卿の筆とすを納めしなり裏書に元禄三年庚午眉毛軒河草門  
入敬影あり  
經朝卿の筆せり額の背面に曰

建治元年己亥六月廿六日乙丑書之

正三位藤原朝臣經朝

常盤清水

裏門出口道の端に池あり中島に弁財天を安置せ清泉湧出  
紫の僧某當社に詣り頃和哥を詠せり常盤の清水と稱せり

本地堂

觀音の像ハ慈覺大師の作と云 道武朝臣靈社 本社あり社人三郎

社傳云昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左遷の時脚三男菅原

道武朝臣も又此地に流さるせり三年の星霜を経あひし

延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫あゝ亡あひぬとて悲歎の

あり配所の徒然小父君の御像を手親摸刻しあひ旦暮在る

如く事へ孝道の誠を尽さざりしを後一社を奉し奉る  
と云なり 昔ハ大社也 僧房も多かりしなり 櫻本坊邑盛坊尊住坊梅本  
今ハ滝の隈と号する宇 天曆小至りてハ 村上帝狛犬一雙を寄附  
のと存せり是古の滝の坊也 又大般若経四巻を収む源義経朝臣此  
奉納なりと云 伊勢三郎龜井六郎及ひ弁慶等の  
四人書寫せり其の経巻なりと云

菅原道武朝臣舊館地 同所二丁許南あり空堀城門の跡と覚

一子を得たり其子を菅原道英と号夫より六世の孫を津戸三郎  
為守と号する 津戸為守の御子也 或云此地ハ貞盛舊館の地なり  
道武主貞盛の御子也 娘りて其の御孫ハ未詳

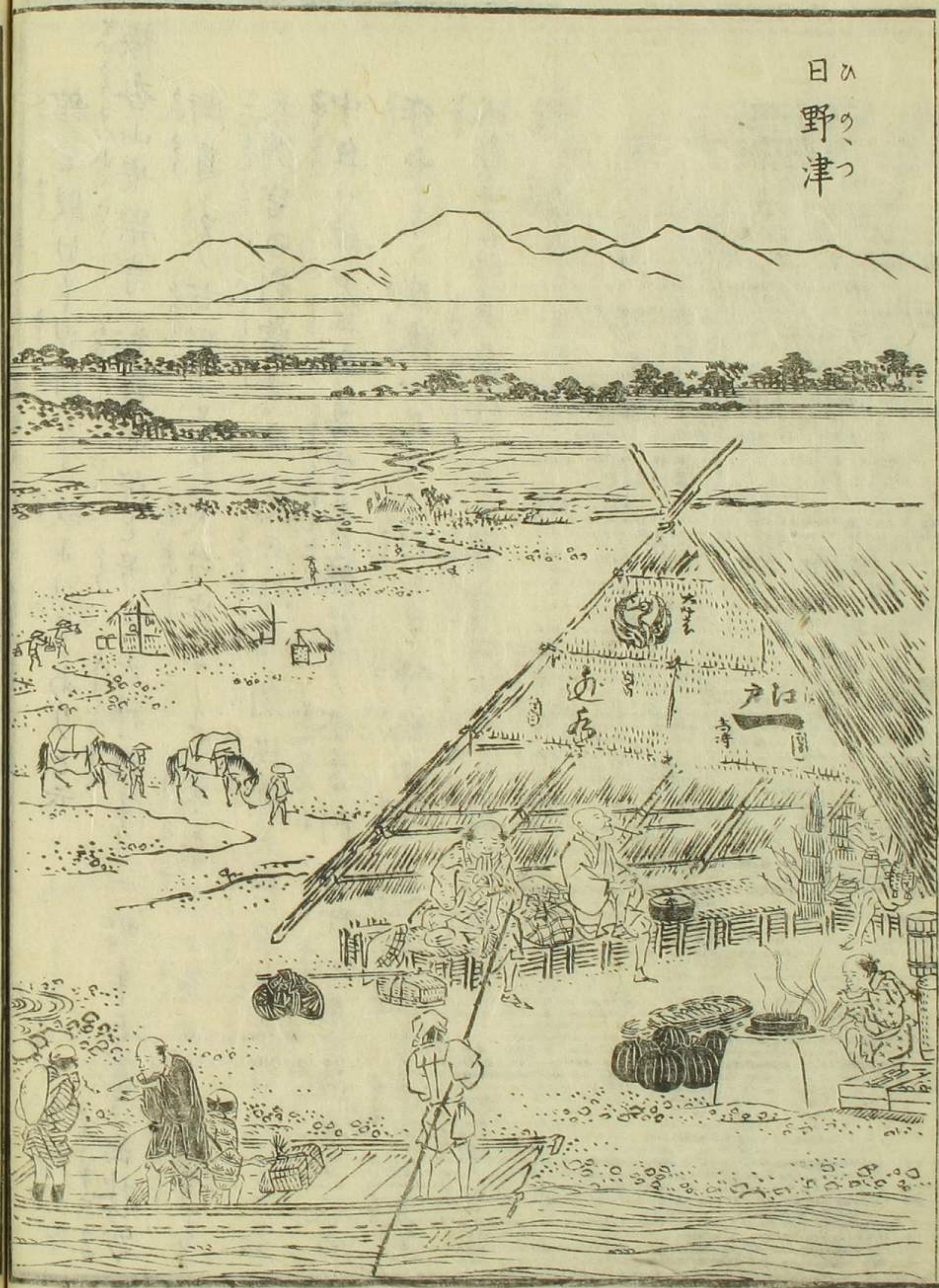
假家坂 同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひく上坂を  
云建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向し一頃假小旅

館を設け旧跡なる故に此号ありと云

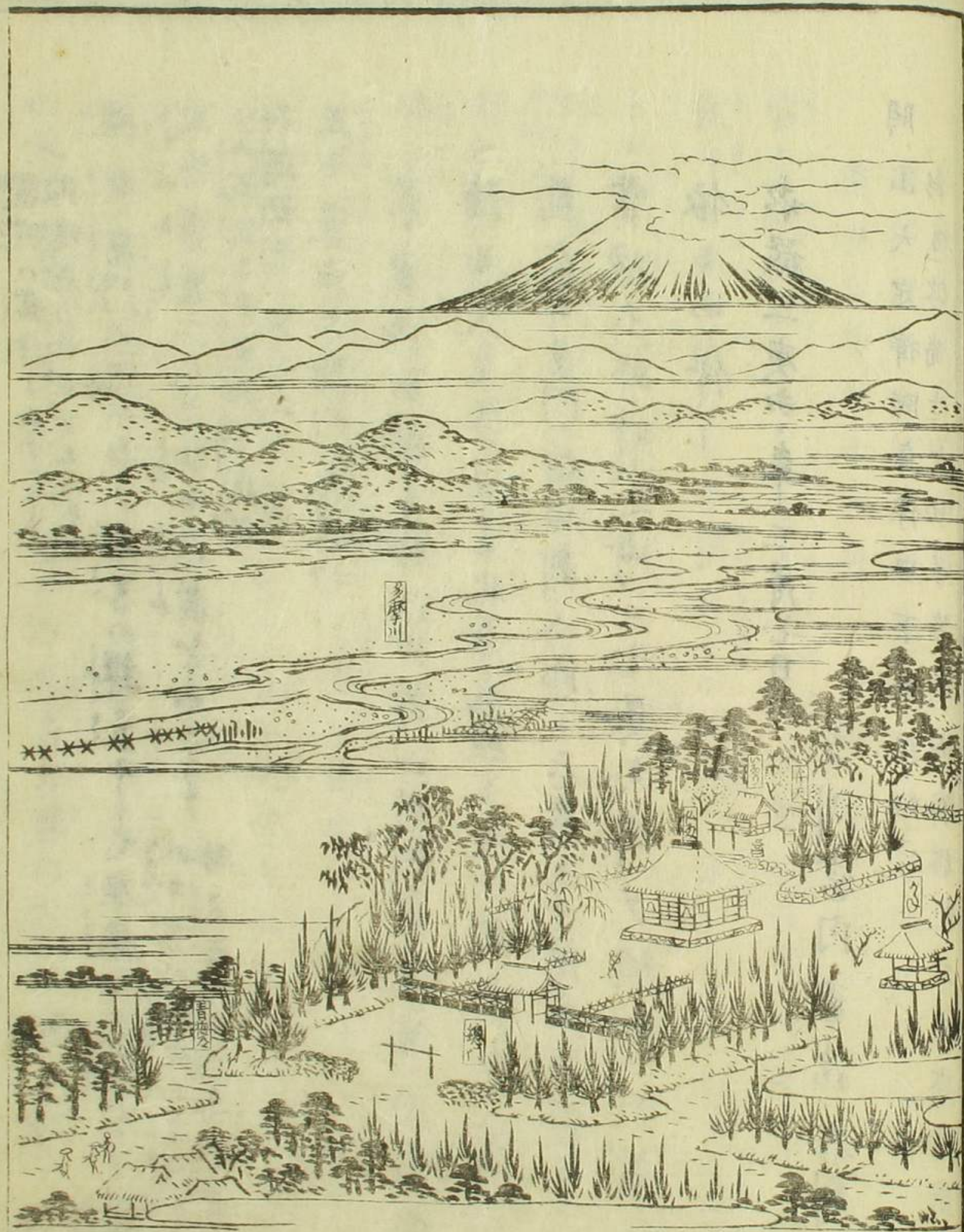
梅香山安樂寺 松壽西院と号す天神社より一町半あり西北の方

街道より右側小あり天台宗也 東巖山に属せり當寺を  
天満宮の別當寺也 天曆年間法圓大僧正開創せりと云  
中興ハ津戸三郎為守也 願なり 本尊阿弥陀如来ハ法然上人の  
作也 座像一尺五寸計あり佛体の中は為守注する所の血文を  
収むると云 其余什宝は為守の太刀一振 同画像一幅 同甲冑の  
中ハ篋ありと云 藥師佛あり 傳教大師の作と云 像材ハ沈香ハ  
十二神將の像迄悉く高サ一寸斗比厨子の内ニ造り 篋られ  
津戸三郎為守の墓ハ八王子の市中觀池山大善寺とのみ 十八檀林  
順譽と云者造立せり 又為守の御孫ハ 後裔津戸六郎右衛門法名  
為守ハ法名を以て 爲守ハ法名を以て 爲守ハ法名を以て 爲守ハ法名を以て  
國の徳追補使執權守平重隆ハ 爲守ハ法名を以て 爲守ハ法名を以て 爲守ハ法名を以て  
馳奏し 賴朝公の旗下ニ属し 度々軍小忠を顯し 名をあげしと云

日野津



建久六年二月南都東大寺供養の爲將軍上洛の途に爲守  
 供奉して同三月洛小入同一日法然上人の庵に参り念佛往生の道を承りて  
 法名を三つと願ひて建保七年竟に出家とて先上人より贈らるる  
 同十一月十八日結願の夜攝土の住居無益なりと高聲念佛し如法念佛と修を  
 切五臟六腑を取り出し律大口を包忍ひく後の河へ捨せしむるに夜半の心地か  
 ちも人更不知りてかたしと苦痛もなかり十九日に至りても終極の心地か  
 りりこれ息男民部大夫守朝の告ぐる小あり始り人もありて翌四年の  
 正月十三日の夜夢よ来ると十五日午刻に迎ふこと由上人告めんと覺て後件の  
 日に至り上人より多の袈裟をうけ念珠とてありて面を向ひ端座合掌し  
 高聲念佛し午の正中に息絶ぬ紫雲空は黠隸一異香室より眼を後水  
 衆を擲く五十七日氣が常のめくく往生とてけり甚奇なりて始信とて  
 此の世に於ては彼子孫上人の報の消息なきに念珠袈裟を相傳へて披露  
 玄武山普濟禪寺 日野渡口あり此方の岸頭を右へ十丁入る芝崎  
 村と云ふあり 此の西に立川と云昔の郷の 濟家の禪林ゆく相州鎌倉の  
 建長寺に屬せり 開山ハ真照大定禪師物外可什和尚と号す 頃  
 二年癸卯十二月八日寂す 本寺ハ正觀世音座像二尺斗あり 左右に  
 十六阿羅漢十大弟子等の木像を安んじ共ニ作者詳ならず 中  
 與大檀那ハ立川宮内大輔と稱す 法名ハ宝山道貴大禪定門と



芝崎  
 普濟寺  
 境内  
 延文  
 六年  
 所  
 石塔  
 存  
 乃





靈牌の當寺はありとも  
其墳墓の所在をあるも  
佛殿惣門の内小あり本堂ハ釋尊の中座像三尺計あり殿七  
文殊普賢二尺斗共小作者をあるす  
其記は平重能平義親  
平高親等の名を記せりと  
五十嵐市左衛門感状曰

景虎涉出陣之砌三田彈正忠政定先陣而大幡  
陣所八王子陣至北条氏照と及一戦没落之所五十  
嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討死ニ番着到  
賞功不跡時芝崎三十貫文切ヲ被仰下者也  
依るゆ体

永禄三庚申年三月七日

立川宮内重能在判

開山大定禪師真像座下之記曰  
彩色啓端造立助縁芳衛辨翁啓範宗來啓一宗華

宗義啓端宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗快翁  
塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹縁比丘啓達  
應安三年戊十二月三日敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たり一とあり  
數年合戦の地中今猶林中ハ首塚と稱するものあるハ是謂り  
と云今も隍の跡と覺れ地中折とて矢の根の類の武器を  
ありといふ又慶長の頃立川兼賀なりといふ人あり云宮内大輔  
一族なり豊太閤の朱章あるを以て當寺天叟宗祐和尚  
御開國の砌寺領を乞奉り朱璽をよみ又宮内大輔為討伐  
佛閣を放火なり多静謐の後ハ修理まことある證状を  
其後住持覺榮宗理天叟の事愁訴せしめ御加増あること  
旨被仰下とのとも遅くまゝ先栄和尚改衣の爲上京あり  
途中迂化せり其後久しく無住の寺となり朱章を欠と云然るハ  
寛永の末住持大年といふ僧當寺に住せし故あり廣福寺  
といふ退去せしと什宝の古文書古器の類を悉く持去れり

と云く今ハ寺の朱章を傳へ存せしもの

日本年代配合鈔曰  
永正元年甲子九月廿五日立河原於山内頭定扇  
谷上杉朝義合戦朝義軍敗太田下野守為始多兵

南朝紀傳康正元年己亥正月廿日鎌倉成氏と房頭ハ定政上杉長尾景中と  
武州立川原合戦云

小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門頼重を  
加り多れハ此勢を合せ角谷の五郎頼良大將軍と武州立河原陣營を  
布山内の管領上杉民部大補可淳入道并當屋形憲房東八洲の軍兵を  
催し押寄たりつり夜ハ山内の加勢と越後の軍勢をせりつりハ  
朝良ありあふかけそらさく河越の城は落延梅酸の湯をやせむ

六面塔 卯塔の中あり高さ六尺をかり一片の幅一尺五寸ありり  
前面の二枚ゆを金剛密迹の二王を彫刻し後面左右の四枚ハ天王の像を刻  
せり上の方ハ何れも宝珠の形とを鑄てあり常の石工の造り  
のありす極めく妙作なり 增長天の一片ハ報号等を刻せり文左の  
延文六年辛丑七月六日 施財性了立

道圓判

按前小奉の洞山大定禪師肖像座下の記文ハ性了の名あり六面  
塔の財主性了一なる一延文六年ハ康安と改元の年ハ應安三年ハ至  
るの十一年なり然レハ此人なる一

普濟寺境内六角古碑

高廿五尺寸 巾一尺四寸計

那羅延堅固



密迹金剛



增長天王



多聞天王



持國天王



廣目天王

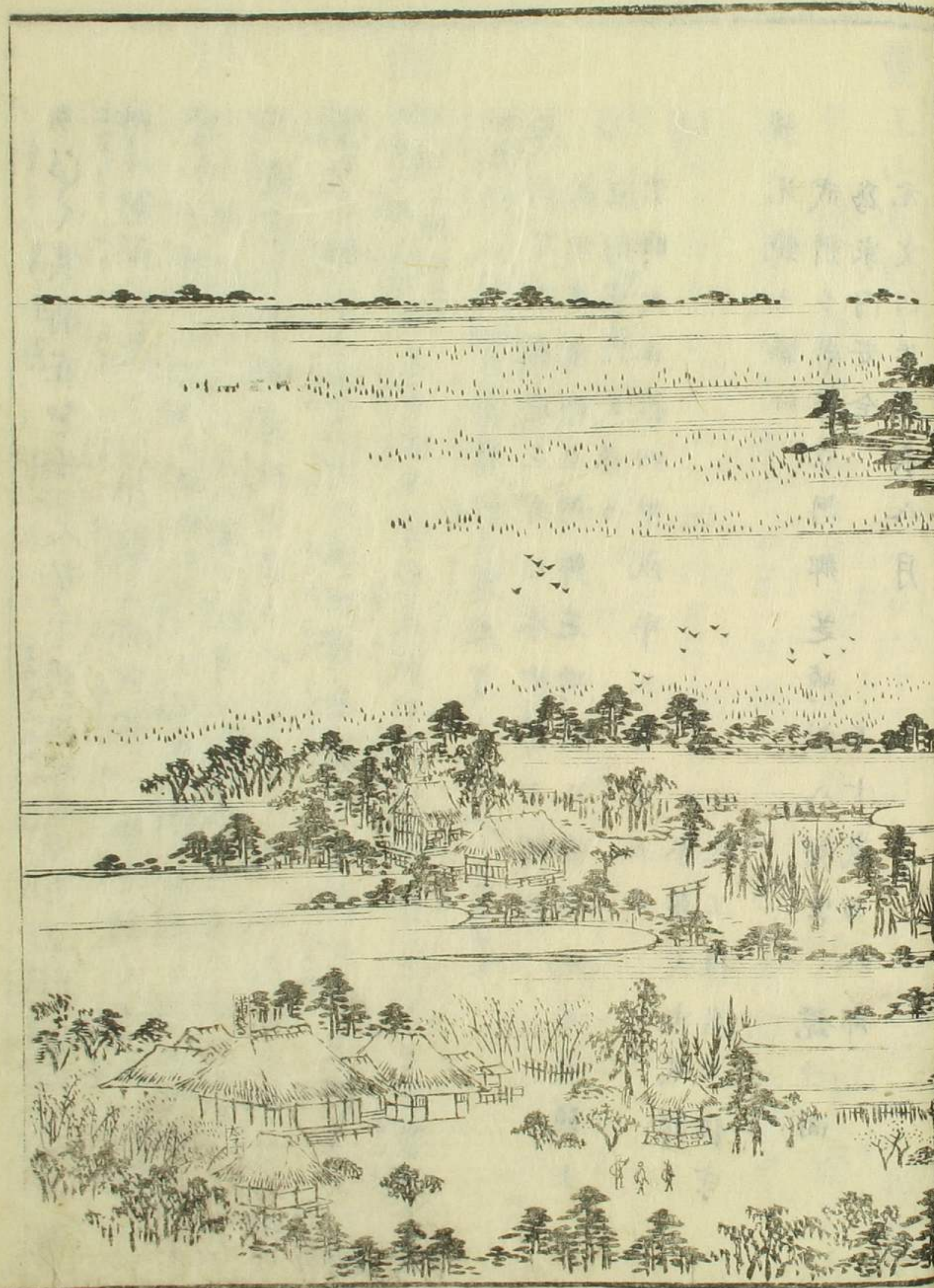


當寺境内の地ハ多磨川の流小臨之勝景の地ナリ富士箱根秩父郡の遠嶂第一望小遠り尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大輔某々城営の旧址ナリ其形勢を存し懐旧の情を催さむ又小田原の北条幕下ナリ五十嵐小文治と云ふ人も此地小あり由土人云傳へり前小頭せし永祿三年の感状も五十嵐市左衛門と云ふ名を注し何れも其氏族の徒なるべし此故小今も此地に五十嵐氏の人尤多し

按五十嵐小文治ハ和田合戦朝比奈義秀に討れし人なり是を混し土人ありたり傳へる状

八幡宮 同所二町を北の方あり神主宮崎氏奉祀を祭神本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勸請せりと云本地佛ハ阿弥陀如来也黄金仏法丈四寸八分あり弘法大師の作なりと云

背面假面の如く四つ々其古色なり然る小天正年間野火の爲小神殿烏有とあり此時に至り平なる失



立川  
八幡宮  
諏訪社  
満願寺

立川村

あひく其所在を知らずなり 仍此地の領主立川宮内某の室  
此を深く歎き思ひ新に弥陀像一軀を鑄く當社小叔の  
寺佛跡の背面は鑄所の文次は記せり按て新像の膝は梅鉢の紋あり  
其後宝永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯株の根を  
穿ちて鋤下小失人所の本地佛金像の弥陀如来を得たり  
の刃の跡も像の又安永五年の夏賊の爲に奪つることも靈威あるを  
以同年八月四日再當社小還座なりあつたりなり

天正年間新造立所之本  
地佛之銘曰  
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡本地并與願主  
立河宮内お孫  
于時天正拾四甲戌年三月十五日  
本願大夫式部  
大工推名土佐守

後光鏡之銘曰  
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮  
鏡一面  
爲家内安全  
元文四年己未八月

醫王山萬願寺 同所南の方四十歩計を隔り黄檗派の禪窟

中へ鏡牛禪師居住の草庵の旧跡なりと後小一宇の蘭若と  
なせしといふ本は藥師如来八座像三尺計惠心僧都の作なり  
取士小日光月光十二神将等の像を安せり

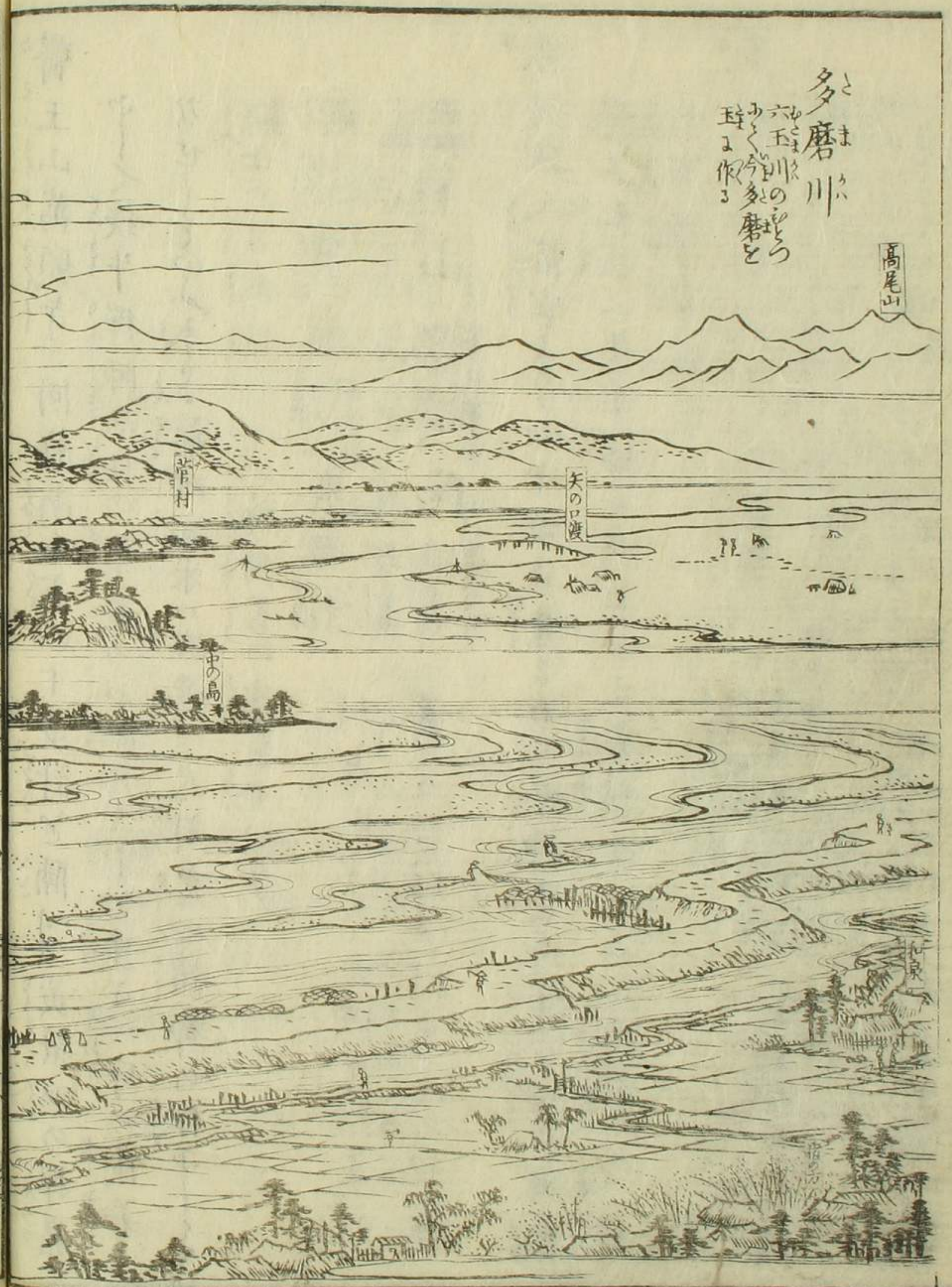
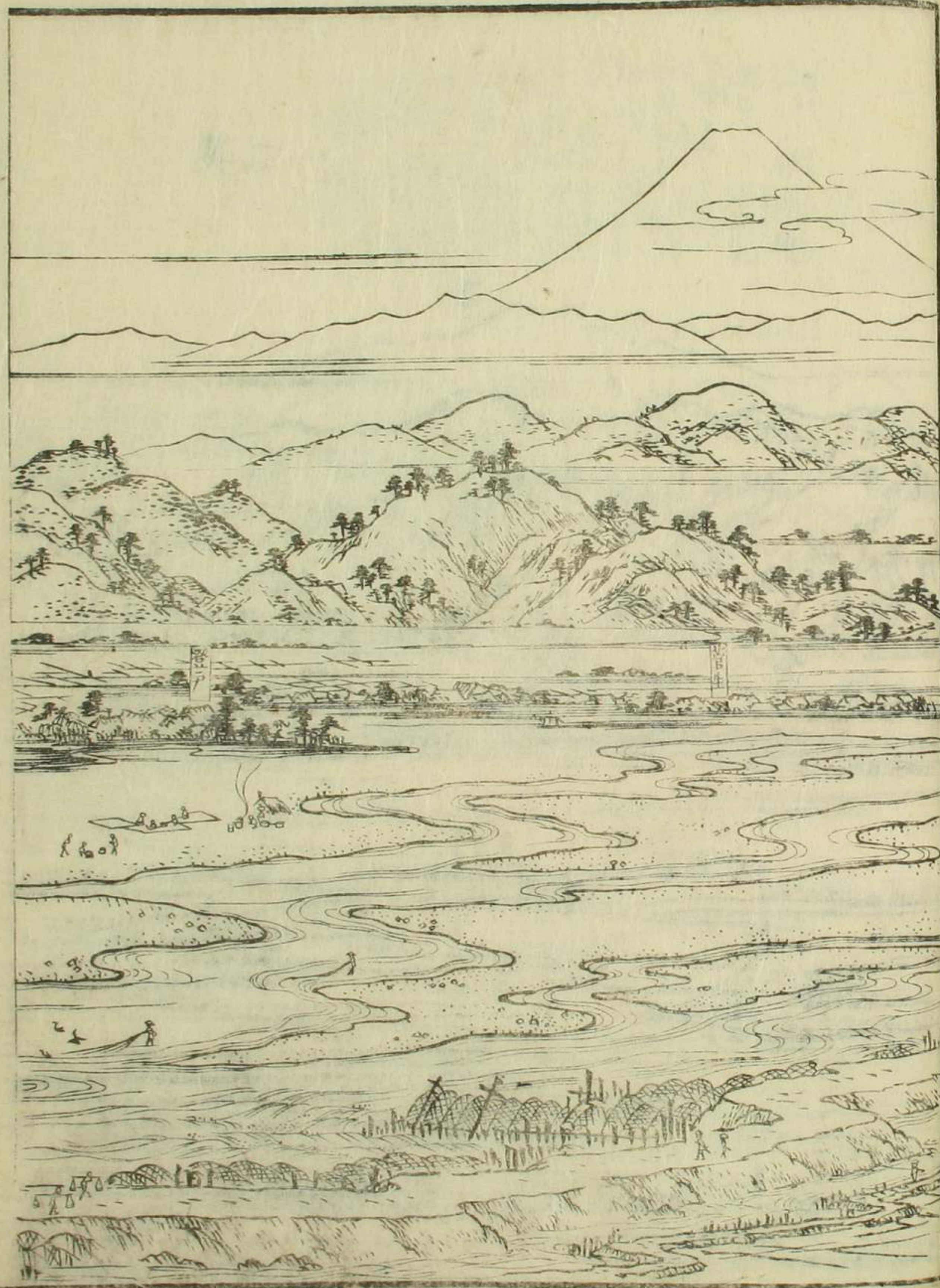
額 本堂 額 堂内  
向拜 額 堂内  
岳悦山筆 山王 院 光 東 院  
待中與別 院 光 東 院  
筆日筆 院 光 東 院  
於度悲涼を大地世に茶州  
茶を垢淨通は界志は瑞瑞

諏訪社 八幡宮より六十歩斗東よりあり祭神建街名方命一座相

傳弘仁二年辛卯七月廿一日は勸請せしといふ當社小宮崎  
氏兼帯奉祀す

多磨川 當國第一の勝槩とを

篇多摩とす後世玉小作るとの山城根津ありひ紀伊近江陸奥等の國よあり  
此の玉川と共にありせし玉川と稱せしより文を流るる武蔵國田波河  
此川ハ武蔵の源丹波の源多摩郡の時池上より流るる武蔵國田波河  
いひゆるなり日蓮上人注画讚大士臨終の時池上より流るる武蔵國田波河



多磨川  
六玉川の  
多磨の  
玉作

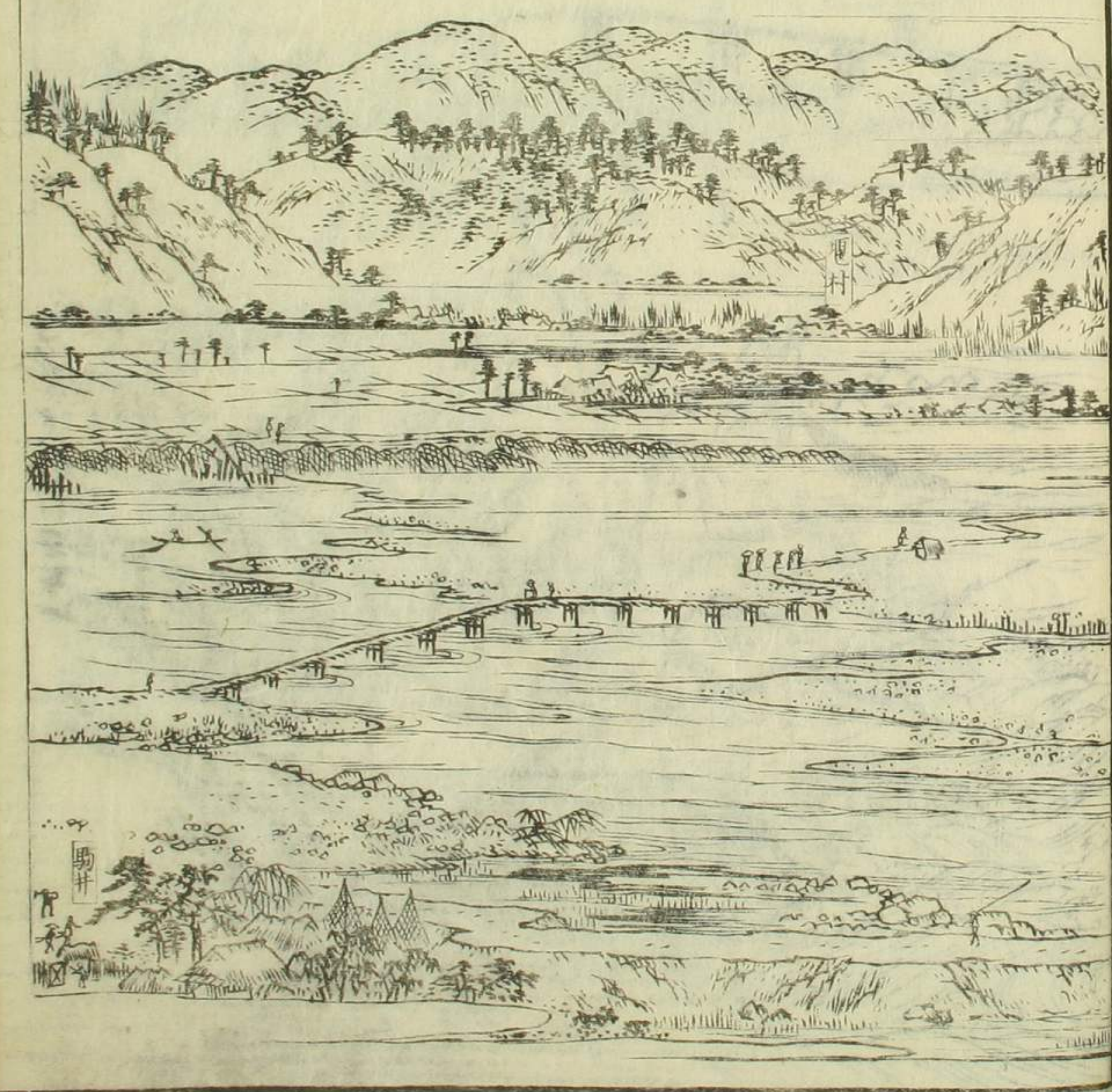
高尾山

高尾山

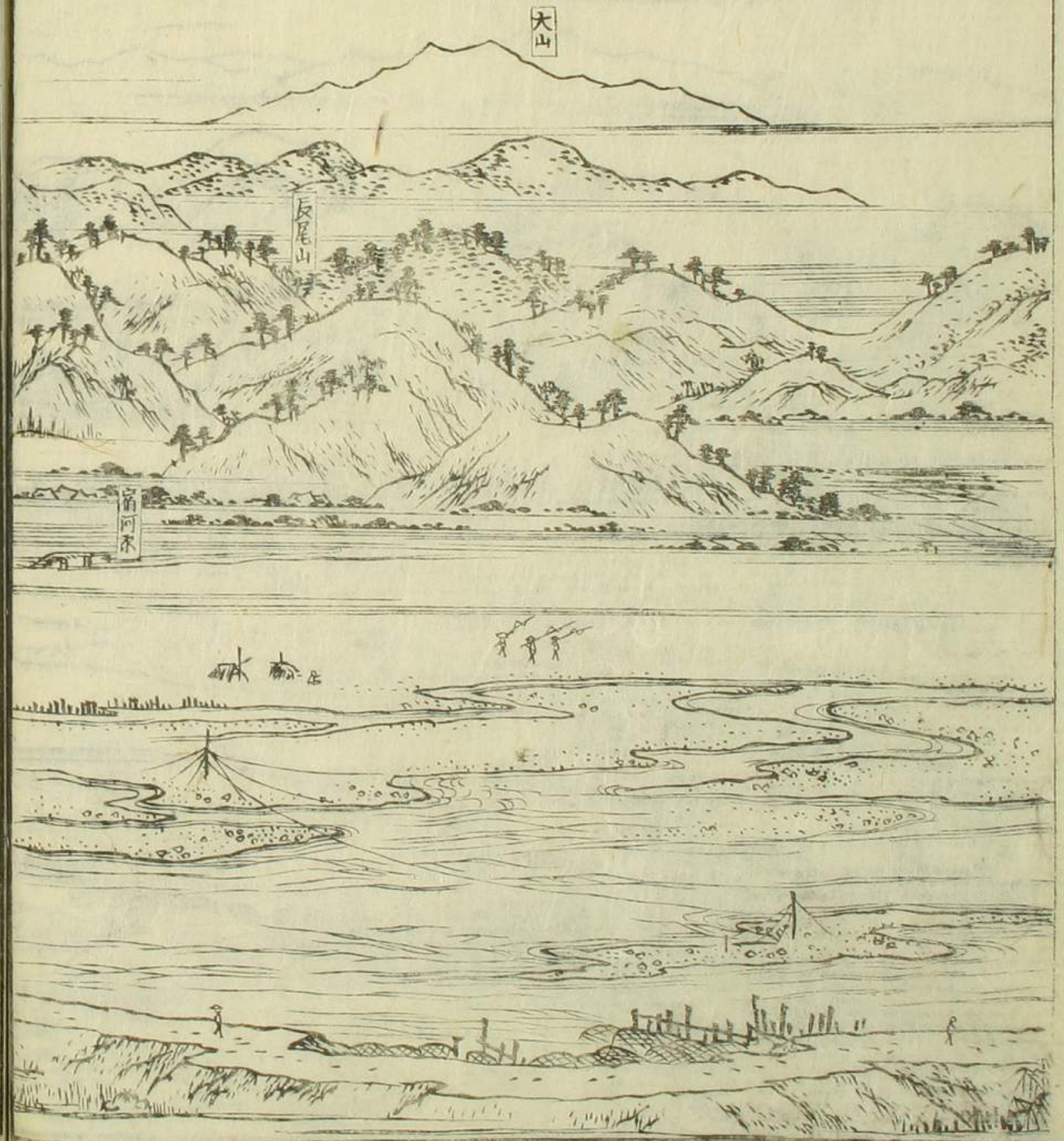
大の口渡

大の口渡

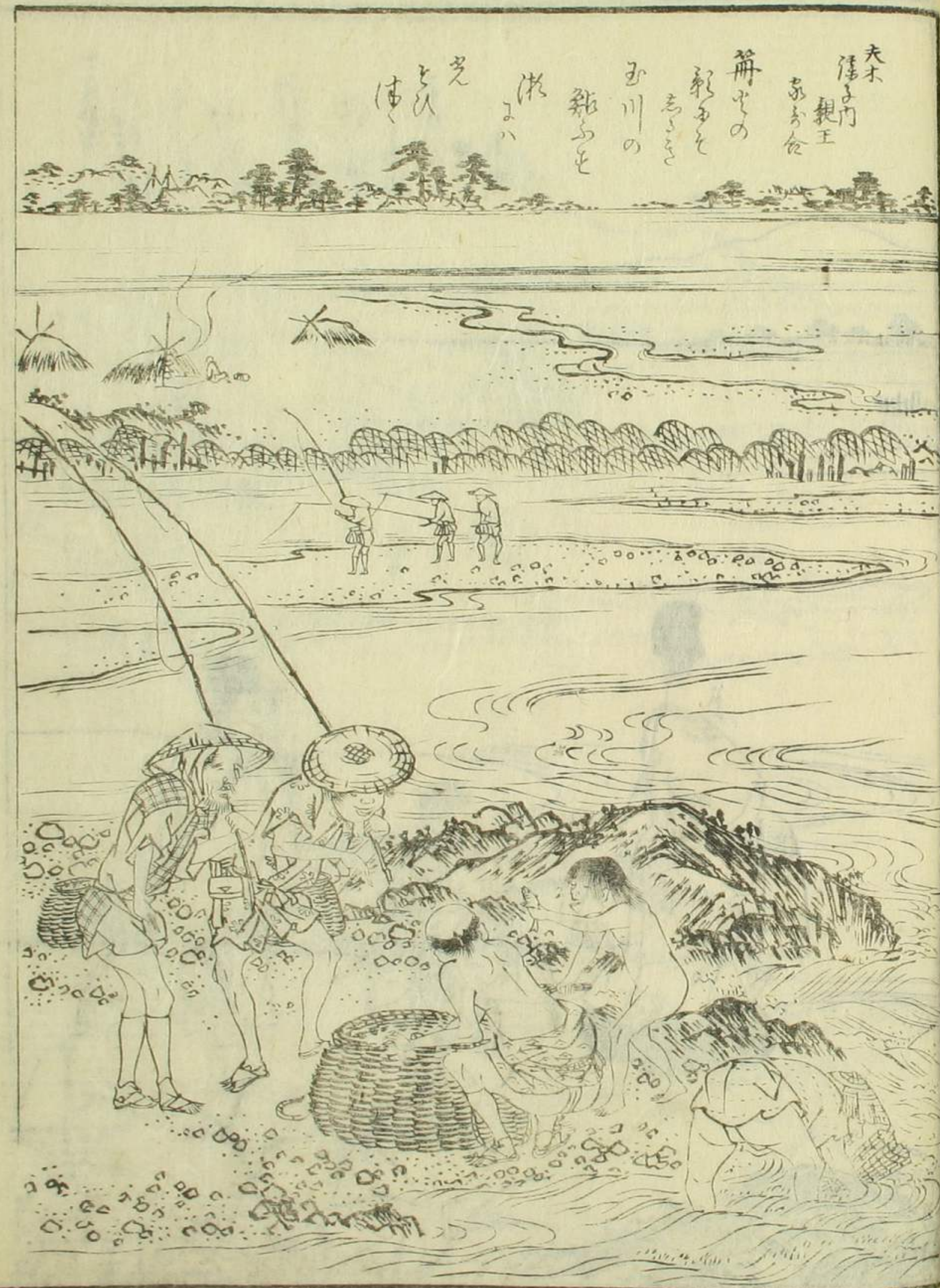
玉川ハ砂場廣  
 豁中々其流れ  
 一帯にあす多く  
 雨後杯ハ渡口  
 移標して定まり  
 西北は秩父  
 山を望み甲州の諸  
 壘塘の斜に連る  
 と見え熱と川  
 の産とす夏秋の  
 間多し秋常  
 小漢入絶也



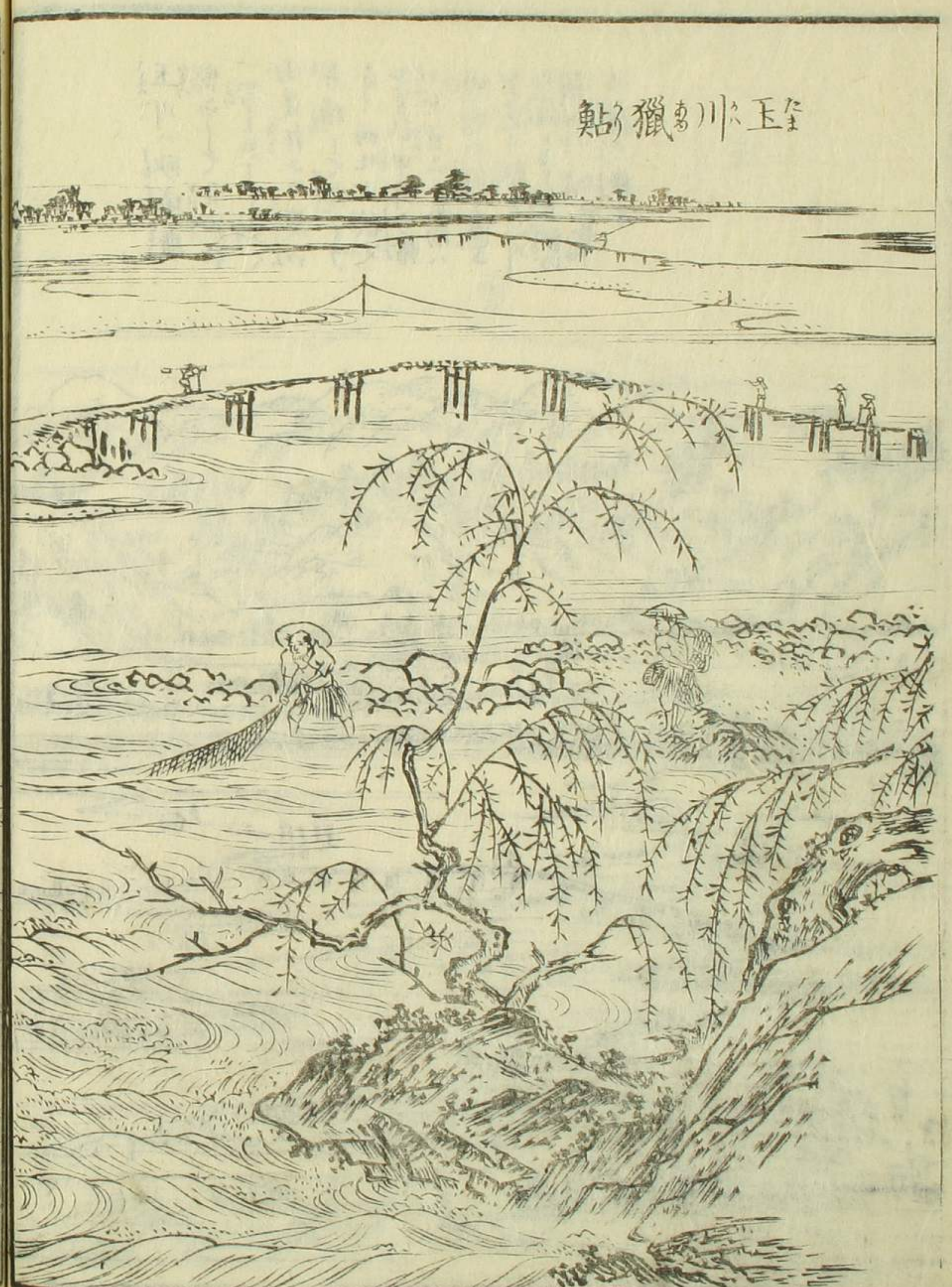
其二



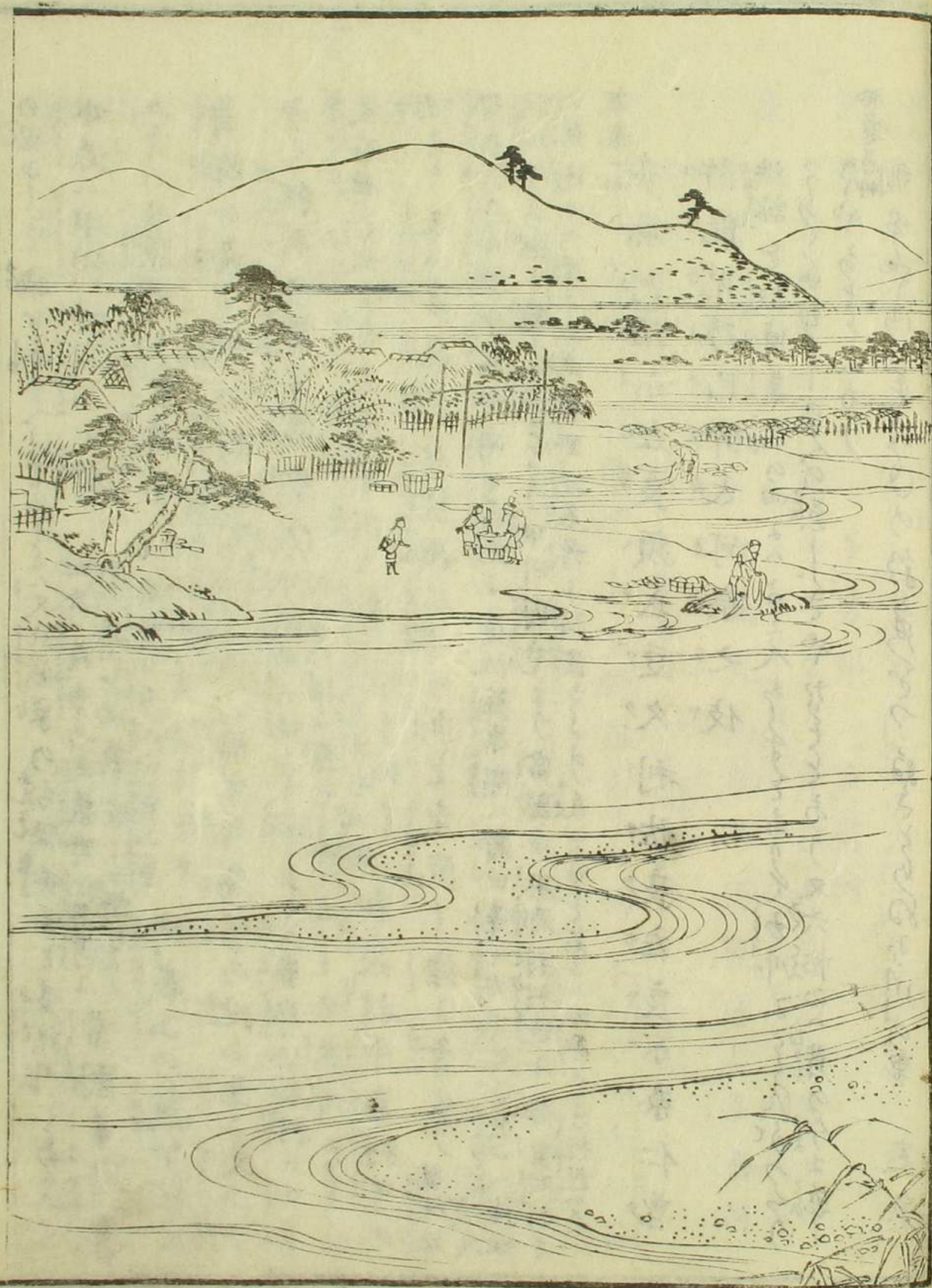
夫木  
 澤門  
 親王  
 赤食  
 舟の  
 船を  
 志  
 玉川の  
 船  
 光  
 浦



玉川獵船







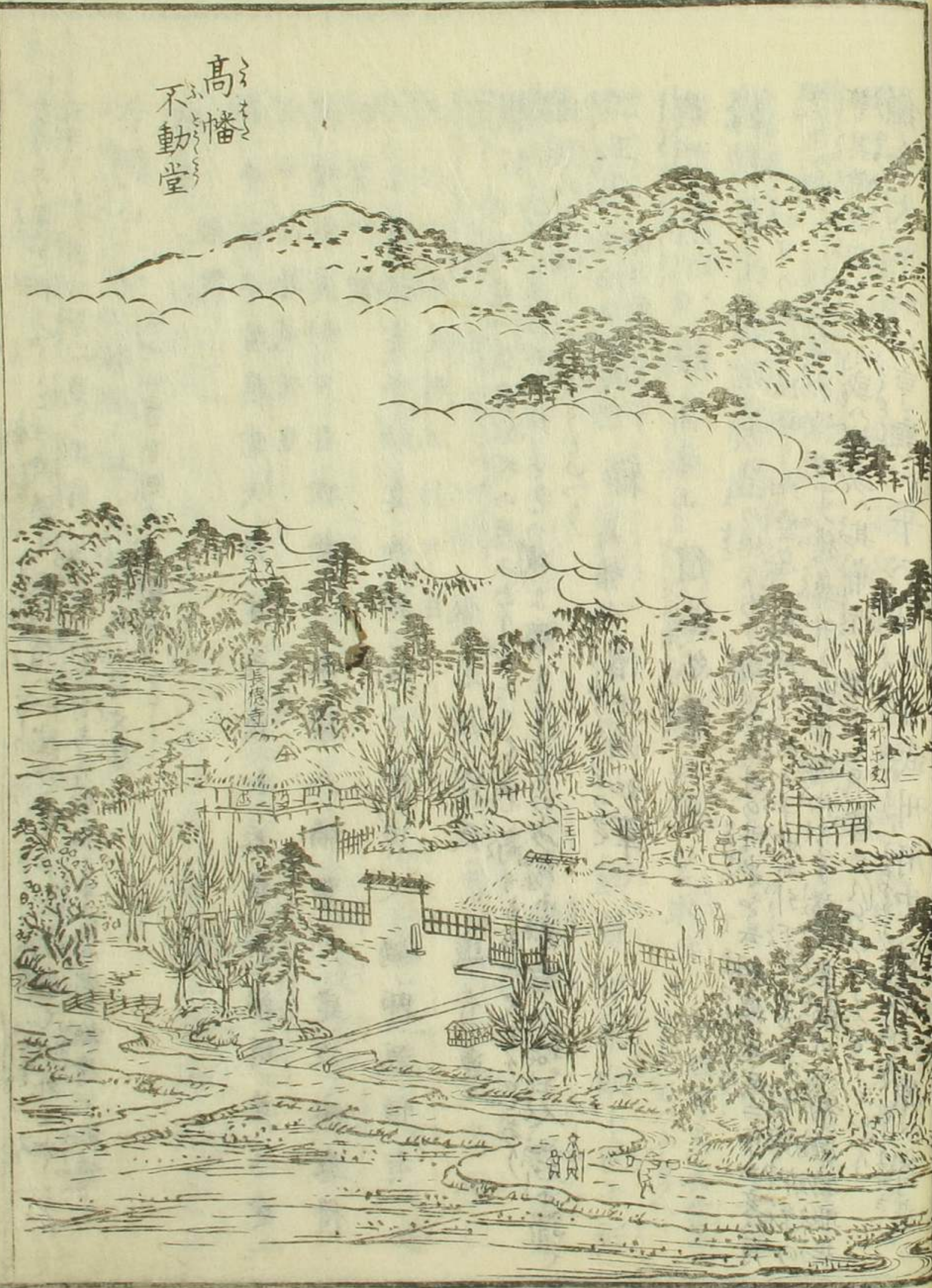
拾遺愚草  
 たけのこ  
 こゝす  
 地孫  
 新嘉  
 けし  
 とめ奴  
 里の  
 足家



の辺中... 滅を... 又北條家の分限帳... 多波川とあり  
水源ハ甲州丹波山田澤義章の武蔵野地名考ニ發シ此丹波山を武蔵野と稱す當國多摩郡  
入マハ日原川も會流ス多摩郡日原川河嶽山の麓を径ク  
青梅の南ニ傍羽村四谷上水の村あり及ヒ福生拜島等の地ニ至ル又此地  
ゆク秋川の流も落會甲州境の地より發シ多摩郡伊奈村五日市  
又石田と云至シ浅井川も合村名の邊に流ル和泉村中島村等の  
地より末ハ多摩荏原橋樹三郡の間を東流シ海ニ會セリ橋樹郡  
登戸二子小杉平間河崎等の地ニ傍ヒ荏原郡ハ瀬田等ニカ下丸子矢口ハ橋塚  
羽田等の地ニ傍ヒ流ル甲州國境より當國多摩郡羽田村迄十餘里羽田村  
六郷迄十六里と云武蔵野地名考ニ周流ス凡四里とありハ水源ありの行程多ク  
万葉多麻河泊ル左良須氏豆久利佐良左良爾奈仁曾  
許能兒乃己許太可奈之伎  
此詠を拾遺集意の四ハハよ人ありすとあり又六帖ハ昔の今ハ  
拾遺集きやあそともあり被常也... 玉川の里 定家

建保名所百首  
武蔵國風土記曰 多磨郡 多磨河  
出諸鱗及鴨鵝等亦里人作調布納内蔵察云云  
東鑑曰 仁治二年辛丑十月二十二日丙子以武蔵  
野可被關水田之由儀定訖就之可被懸上多磨河  
水之間可為犯土之儀云云  
此河ハ武蔵野の勝槩中ニ日野津より以西ハ水石の美奇絶最  
多一以東ハ平地と云々長流の徑ニ往ク觀を改め亦勝景也  
あハ尺點を以テ此川の名産とす故ハ初夏の頃より晩秋の頃迄  
都下の人遠きを厭フを以テくろく未來遊獵せり  
高幡山金剛寺 高幢邑東鑑ハ高幡三郎と云ハ此の  
名あり此所より新義の真言宗  
中々花洛三寶院御門跡ニ屬シ大宝より以前の開創あり  
其後弘法大師再興あり又慈覺大師再興すといハ本寺不動  
明王古佛座像一丈餘あり炎光ハ布字十有九を刻リ利益  
無返自心堅固の相をあらハせり  
脇士二童子化人の作なりといハ詩記云或時忽然二童子ありハ不可

高幡  
不動堂



なり予夏を作し住持諾す依化僧ハ一室ハ入る戸を閉鎖して戸外は地を  
不日わく造功畢ぬ竟ハ異僧ハ去て予必方を多し云く予室の地ハ稻荷を勧請す  
古鐫口一口 不動堂ハ懸り徑一尺九寸文字  
九十四字を刻す野銀左のこ

敬白 奉懸

右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所弟二建  
立斗田陽成天皇  
彼時頼義朝臣自於登山奉崇八幡弟三建立永意得  
行壺兩檀  
大檀那美作助真并記氏一宮田人鍋師源恒有  
文永十年关西五月廿日

銀念西守氏 鐵青蓮

服石 不動堂の後愛宕祠の傍ハあり中六尺を高くも五六尺を高くあり  
後諸の佛神ハ金剛密すとのり  
二王門 左右ハ金剛密額 高幡山 僧正泊如筆

惣門 二王門の額 高幡山 僧浩然筆

鼻井 庫裡の前左の方の山の裾ハあり廣サ七尺斗の井泉を云相傳建武二年乙亥八月  
四日の夜大風吹り庫堂忽ハ顛倒す故ハ平地ハ引下りて諸人寒熱の二病腫物眼疾  
等其餘諸病ともハ或ハ飲或ハ其痛所ハ塗りて平愈せしとのり

鎌倉大草依曰亨德四年正月廿一日武州府中分倍川原へ寄來る

成氏五百餘騎中馳出短兵急より印き火出る程ハ攻戦ひらる

間上杉方の先自の大將右馬助入道憲顯深も負く引かひらる

高旗寺ゆへ自害ハ鎌倉勢も勝軍ハあられと石堂一色以下百五  
十人討死し戦ひはり分倍河原小陣を取云く 高旗寺とのハ當寺  
縁起曰平山武者所季重幼より當寺の不動尊を崇敬し世ハ強

勇の名を顯せり治養の頃平家追討の時ハ鎌倉の右大將家ハ

屬ハ義經ハ隨ひ西國ハ越き一の谷小勇を揮ハ武名世に

明らけハ故ハ平家後當山の頂ハ此ハ昔の御堂を建立を然ハ建

武二年乙亥八月四日暴風の災ハ罹り殿堂破壊を依後平

地よる月世ハ其頃の財主ハ平助綱母ハ大中臣女等ありとのハ

尔來天下風水或ハ疫癘等の諸災あんとする時ハ佛鉢汗を生

しあふとあり其威靈ハ拔萃をへり

水切澤 金剛寺より半所を西の方の谷を云平季重御堂建立

の時此所より堂材を伐出さる日跡なりと云依り

番匠谷 同い、一町を西へ入谷を云是れ李動河堂

別旅明神 金剛寺より三町を東の方別旅邑より此地の産

土神とす別金剛寺奉祀の宮社より傳へ云金剛寺の本尊不動

明王の股士二童子を彫刻せ異僧との像を造る終るの後立去

らんとす近里の道俗喜悅のあり其跡小随ひく此地より来り

るるふ件の異僧ハ忽よみそなりぬ貴賤奇異と一此地一社を

建立し別旅明神と稱す地名も又別旅邑とのやを

平惟盛之墓 金剛寺より一町を西南平村 農民又右傍の

ととる人の構の中あり青き一片の板石より高サ七尺五寸あり

中二尺程厚サ二寸あり上の方よりく字を彫下ふ文永八年辛未

中冬日とあり土人相傳へく平惟盛の碑なりと云往古此地小平助綱

と云武士住居平氏の遠裔なるハ惟盛の菩提を吊るるふ是哉

造るる 年歴を或ハ又助綱の墓なりとの云同南の方二町を山を

平村  
平惟盛  
古墳



登<sup>つ</sup>り中腹<sup>ちゆうぶく</sup>ハ又古碑<sup>こひ</sup>あり剝落<sup>くわくらく</sup>し讀<sup>よ</sup>み只<sup>ただ</sup>平<sup>へい</sup>の一字<sup>いちじ</sup>の  
鮮明<sup>せんめい</sup>なり高<sup>たか</sup>サ六尺<sup>ろくせき</sup>餘<sup>あま</sup>中<sup>ちゆう</sup>二尺<sup>にせき</sup>を<sup>を</sup>下<sup>した</sup>ハ土中<sup>とちゆう</sup>に埋<sup>う</sup>む古<sup>こ</sup>石塔<sup>せきたつ</sup>  
二基<sup>にき</sup>何<sup>なに</sup>も高<sup>たか</sup>サ四尺<sup>しせき</sup>を<sup>を</sup>土人<sup>とじん</sup>平山<sup>へいざん</sup>季重<sup>きじゆう</sup>或<sup>ある</sup>又<sup>また</sup>平氏<sup>へいし</sup>の人の墳墓<sup>ふんぼ</sup>  
と云<sup>い</sup>傳<sup>つた</sup>へ<sup>へ</sup>分明<sup>めいめい</sup>ならず  
此所ハ農民平氏某<sup>なつか</sup>家<sup>け</sup>累世<sup>るいせい</sup>の此地<sup>このち</sup>邑名<sup>いちな</sup>を平<sup>へい</sup>  
堂<sup>どう</sup>域<sup>いき</sup>あり康正<sup>かうせい</sup>年<sup>ねん</sup>号<sup>ごう</sup>の碑<sup>ひ</sup>ホもあり  
と稱<sup>あや</sup>し殊<sup>こと</sup>に平氏<sup>へいし</sup>の人<sup>ひと</sup>多<sup>おほ</sup>し里<sup>さと</sup>正<sup>ただ</sup>平氏<sup>へいし</sup>の家<sup>け</sup>ハ小田原<sup>せうでんげん</sup>北条<sup>きたじょう</sup>氏<sup>し</sup>直<sup>ただ</sup>の下<sup>した</sup>  
文<sup>ぶん</sup>ありと云<sup>い</sup>ふ

慈<sup>じ</sup>岳<sup>がく</sup>山<sup>さん</sup>松蓮<sup>しょうれん</sup>壽昌<sup>じゆうしやう</sup>禪<sup>ぜん</sup>寺<sup>じ</sup> 高<sup>たか</sup>幡<sup>ばん</sup>より十二町<sup>じふにちやう</sup>斗<sup>と</sup>東南<sup>とうなん</sup>の方<sup>かた</sup>百<sup>ひやく</sup>草<sup>そう</sup>邑<sup>い</sup>にあり

昔<sup>むかし</sup>ハ茂草<sup>もうそう</sup>ハ作<sup>つく</sup>る八幡<sup>はつぱん</sup>宮<sup>みや</sup>社<sup>しゃ</sup>地<sup>ち</sup>ハ源頼義<sup>げんらいぎ</sup>家<sup>け</sup>兄弟<sup>けいだい</sup>奥州<sup>おくしゆう</sup>  
征伐<sup>せいばつ</sup>陣<sup>じん</sup>の時<sup>とき</sup>山<sup>さん</sup>号<sup>ごう</sup>井<sup>い</sup>井<sup>い</sup>を改<sup>かへ</sup>増<sup>ま</sup>威<sup>い</sup>とす云<sup>い</sup>ふ 黄<sup>わう</sup>檗<sup>はく</sup>派<sup>はい</sup>の禪<sup>ぜん</sup>林<sup>りん</sup>に

一<sup>いっ</sup>く江<sup>え</sup>戸<sup>こ</sup>白<sup>はく</sup>銀<sup>ぎん</sup>の瑞<sup>ずい</sup>聖<sup>せい</sup>寺<sup>じ</sup>ハ属<sup>ぞく</sup>せり昔<sup>むかし</sup>ハ天台<sup>たいたい</sup>宗<sup>しゆう</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>増<sup>ま</sup>井<sup>い</sup>山<sup>さん</sup>と号<sup>ごう</sup>ハ

天平<sup>てんぺい</sup>年間<sup>ねんかん</sup>道<sup>だう</sup>璿<sup>せん</sup>の高<sup>たか</sup>弟<sup>てい</sup>釋<sup>しやく</sup>道<sup>だう</sup>廣<sup>かう</sup>大<sup>だい</sup>勸<sup>くわん</sup>進<sup>しん</sup>一<sup>いっ</sup>始<sup>はじめ</sup>て七<sup>しち</sup>堂<sup>だう</sup>全<sup>ぜん</sup>備<sup>び</sup>の精<sup>しやう</sup>舎<sup>しゃ</sup>を

創<sup>そう</sup>建<sup>けん</sup>せり後<sup>ご</sup>康<sup>かう</sup>平<sup>へい</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>伊<sup>い</sup>豫<sup>よ</sup>守<sup>しゆう</sup>頼<sup>らい</sup>義<sup>ぎ</sup>奥<sup>おく</sup>州<sup>しゆう</sup>下<sup>かた</sup>向<sup>むかひ</sup>の時<sup>とき</sup>此<sup>この</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>まきり

あ<sup>あ</sup>ひ松<sup>しょう</sup>蓮<sup>れん</sup>寺<sup>じ</sup>ハ投<sup>とう</sup>宿<sup>しゆく</sup>一<sup>いっ</sup>八<sup>はつ</sup>幡<sup>ばん</sup>宮<sup>みや</sup>を再<sup>また</sup>興<sup>かう</sup>あり朝<sup>あさ</sup>敵<sup>てき</sup>追<sup>お</sup>討<sup>うち</sup>の河<sup>か</sup>祈<sup>いの</sup>願<sup>げん</sup>

あり又<sup>また</sup>建<sup>けん</sup>久<sup>きう</sup>年<sup>ねん</sup>間<sup>かん</sup>頼<sup>らい</sup>朝<sup>あさ</sup>卿<sup>けい</sup>以<sup>もつ</sup>来<sup>きた</sup>源<sup>げん</sup>家<sup>け</sup>累<sup>るい</sup>代<sup>だい</sup>の祈<sup>いの</sup>願<sup>げん</sup>所<sup>しよ</sup>ハ定<sup>ただ</sup>ら<sup>ら</sup>れ建<sup>けん</sup>長<sup>ちやう</sup>

七<sup>しち</sup>年<sup>ねん</sup>當<sup>たう</sup>寺<sup>じ</sup>の住<sup>ぢゆう</sup>持<sup>ぢ</sup>祐<sup>ゆう</sup>慶<sup>けい</sup>相<sup>しやう</sup>州<sup>しゆう</sup>あり琳<sup>りん</sup>長<sup>ちやう</sup>師<sup>し</sup>を請<sup>まね</sup>て禪<sup>ぜん</sup>院<sup>いん</sup>ハ改<sup>かへ</sup>むと

の慶<sup>けい</sup>長<sup>ちやう</sup>十<sup>じゆ</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>松<sup>しょう</sup>蓮<sup>れん</sup>寺<sup>じ</sup>方<sup>かた</sup>丈<sup>ぢやう</sup>建<sup>けん</sup>營<sup>えい</sup>の棟<sup>むね</sup>扎<sup>さ</sup>あり本<sup>ほん</sup>尊<sup>そん</sup>釋<sup>しやく</sup>迦<sup>か</sup>佛<sup>ぶつ</sup>座<sup>ざ</sup>

像<sup>ざう</sup>三<sup>さん</sup>尺<sup>せき</sup>斗<sup>と</sup>あり脇<sup>わき</sup>士<sup>し</sup>ハ阿<sup>あ</sup>難<sup>なん</sup>迦<sup>か</sup>葉<sup>えつ</sup>の立<sup>た</sup>像<sup>ざう</sup>三<sup>さん</sup>尺<sup>せき</sup>なり佛<sup>ぶつ</sup>師<sup>し</sup>藤<sup>とう</sup>村<sup>むら</sup>中<sup>ちゆう</sup>圓<sup>えん</sup>

彫<sup>てう</sup>造<sup>ぞう</sup>せり所<sup>しよ</sup>なりと云<sup>い</sup>ふ 中<sup>ちゆう</sup>圓<sup>えん</sup>ハ華<sup>か</sup>人<sup>じん</sup>や<sup>や</sup>肥<sup>ひ</sup>前<sup>ぜん</sup> 長<sup>ちやう</sup>崎<sup>さき</sup>にありとあり 中<sup>ちゆう</sup>興<sup>かう</sup>開<sup>かい</sup>山<sup>さん</sup>ハ慧<sup>えい</sup>極<sup>ごく</sup>和<sup>わ</sup>尚<sup>しやう</sup>と

号<sup>ごう</sup>せり 享<sup>かう</sup>保<sup>ぽ</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>辛<sup>しん</sup>丑<sup>う</sup> 享<sup>かう</sup>保<sup>ぽ</sup>二<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>丁<sup>てい</sup>酉<sup>ゆう</sup>大<sup>だい</sup>久<sup>きう</sup>保<sup>ぽ</sup>加<sup>か</sup>賀<sup>か</sup>守<sup>しゆう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>英<sup>えい</sup>彦<sup>げん</sup>比<sup>ひ</sup>

夫<sup>ふ</sup>人<sup>じん</sup>壽<sup>じゆう</sup>昌<sup>ちやう</sup>院<sup>いん</sup>殿<sup>てん</sup>慈<sup>じ</sup>岳<sup>がく</sup>元<sup>げん</sup>長<sup>ちやう</sup>尼<sup>に</sup>中<sup>ちゆう</sup>興<sup>かう</sup>開<sup>かい</sup>基<sup>き</sup>と<sup>と</sup>り 元<sup>げん</sup>長<sup>ちやう</sup>尼<sup>に</sup>ハ享<sup>かう</sup>保<sup>ぽ</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>薙<sup>あ</sup>髮<sup>はつ</sup>し

三<sup>さん</sup>室<sup>しつ</sup>を奉<sup>ほう</sup>敬<sup>けい</sup>一<sup>いっ</sup>竟<sup>けい</sup>ハ當<sup>たう</sup>寺<sup>じ</sup>を再<sup>また</sup>興<sup>かう</sup> 本<sup>ほん</sup>堂<sup>だう</sup>内<sup>ない</sup>陣<sup>じん</sup>の額<sup>がく</sup>松<sup>しょう</sup>蓮<sup>れん</sup>壽<sup>じゆう</sup>昌<sup>ちやう</sup>禪<sup>ぜん</sup>寺<sup>じ</sup>の六<sup>ろく</sup>

大<sup>だい</sup>字<sup>じ</sup>及<sup>およ</sup>ひ德<sup>とく</sup>門<sup>もん</sup>額<sup>がく</sup>慈<sup>じ</sup>岳<sup>がく</sup>山<sup>さん</sup>等<sup>とう</sup>ハ何<sup>なに</sup>も中<sup>ちゆう</sup>興<sup>かう</sup>開<sup>かい</sup>山<sup>さん</sup>明<sup>めい</sup>慧<sup>えい</sup>極<sup>ごく</sup>の筆<sup>ふで</sup>なり

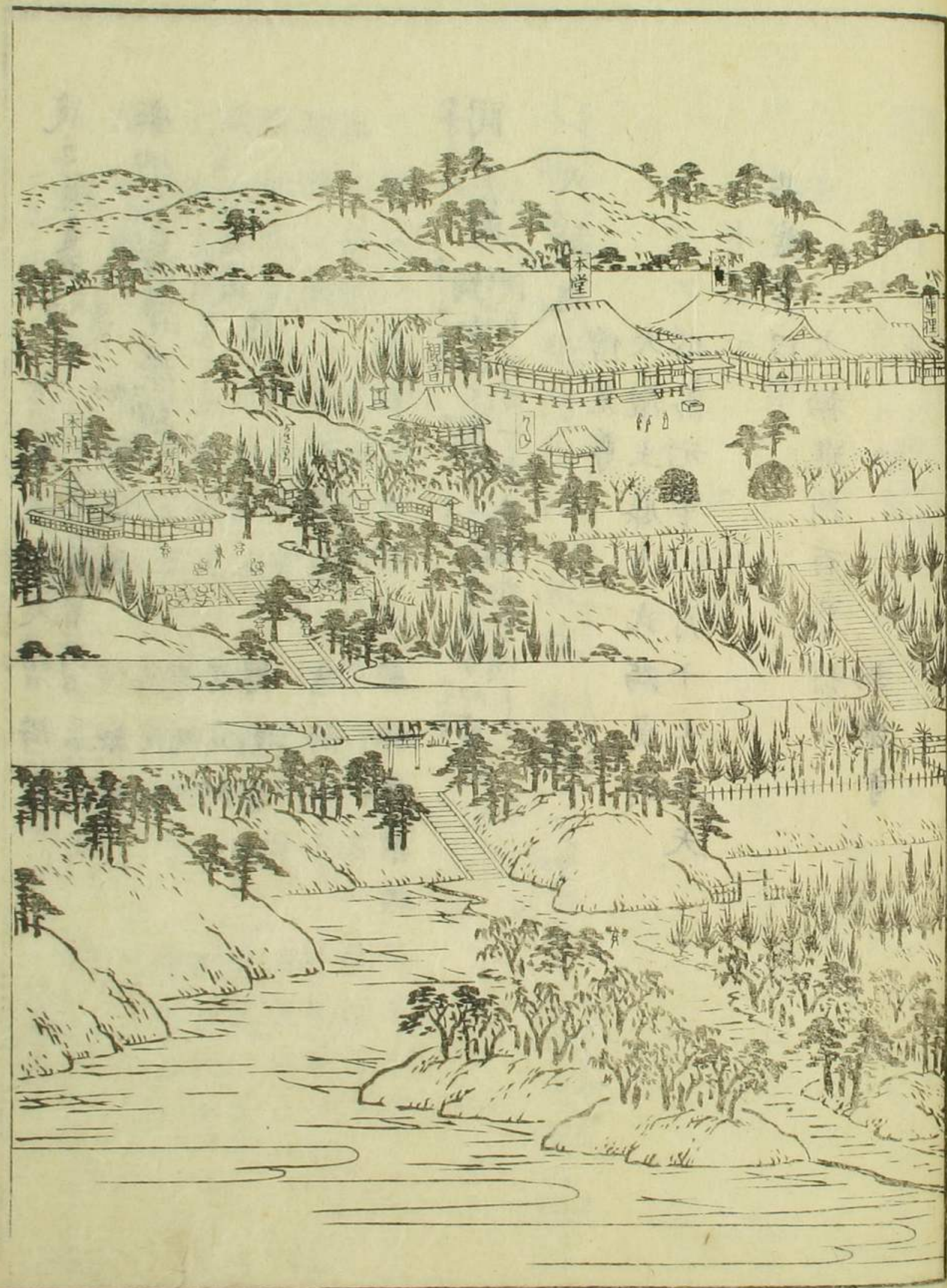
本<sup>ほん</sup>堂<sup>だう</sup>の前<sup>まへ</sup>ハ揚<sup>あひ</sup>る紫<sup>し</sup>金<sup>きん</sup>光<sup>かう</sup>の額<sup>がく</sup>ハ隱<sup>いん</sup>元<sup>げん</sup>禪<sup>ぜん</sup>師<sup>し</sup>の書<sup>かき</sup>なり

經<sup>きやう</sup>筒<sup>とう</sup>三<sup>さん</sup>箇<sup>こ</sup>其<sup>その</sup>銘<sup>めい</sup>文<sup>ぶん</sup>左<sup>さ</sup>のめ<sup>め</sup>一<sup>いっ</sup>ハ銅<sup>どう</sup>を以<sup>もつ</sup>製<sup>せい</sup>す長<sup>ちやう</sup>九<sup>きう</sup>寸<sup>すん</sup>二<sup>に</sup>分<sup>ぶん</sup>口

廣<sup>ひろ</sup>と四<sup>し</sup>寸<sup>すん</sup>五<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup>

長<sup>ちやう</sup>寛<sup>かん</sup>元<sup>げん</sup>年<sup>ねん</sup>癸<sup>みづ</sup>未<sup>づ</sup> 十<sup>じゆ</sup>月<sup>げつ</sup>十<sup>じゆ</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup> 庚<sup>かう</sup>

工<sup>こう</sup>匠<sup>しやう</sup>藤<sup>とう</sup>原<sup>げん</sup>守<sup>しゆう</sup>道<sup>だう</sup>



茂草  
松蓮寺

大勸進聖人僧辨豪  
 如法書寫者僧玄久  
 奉納妙法蓮華經  
 僧觀賢  
 僧定久  
 僧瑞久  
 僧定阿  
 僧亮尊  
 僧辨意  
 不<sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub>

大勸進  
 聖人  
 僧辨  
 豪  
 如法  
 書寫  
 者  
 僧玄  
 久  
 僧觀  
 賢  
 僧定  
 久  
 僧瑞  
 久  
 僧定  
 阿  
 僧亮  
 尊  
 僧辨  
 意  
 駈仕僧樂西

同一箇 銅を以て製す長七寸五分口廣さ  
 渡り四寸一分其文左の如し

大勸進

僧亮尊

大檀主藤原氏滿貞判  
 永萬元年九月十七日天

其蓋裏曰

大勸進所百草村

松連寺

同一箇 金銅を以て製す長五寸口廣さ  
 三寸一分其文左の如し

兼 釣命 祈

日本幕下

一宮別當  
 松連寺 修之

八幡宮本地佛阿彌陀如来像 金銅一尺四寸あり土中出現の物に  
 佛躰の脊に鐫所の銘文あり左の如し

敬白治磨金銅影像法体弥勒座光三尺六寸  
 為皇帝日本主君當國府君地頭名主  
 願同滿安穩泰平信心法主子孫平安  
 悉地成就乃師長父母母二親巨魂助成合力  
 同往生成孟夏之法界平利益南長二年  
 大庚戌多西之敬白 真慈悲寺 施主源氏  
 日本武州慶祐敬白  
 按ふ當寺の條下は武蔵國真慈悲寺の号を注せり東鑑文治  
 二年二月三日の條下は武蔵國真慈悲寺の号を注せり東鑑文治



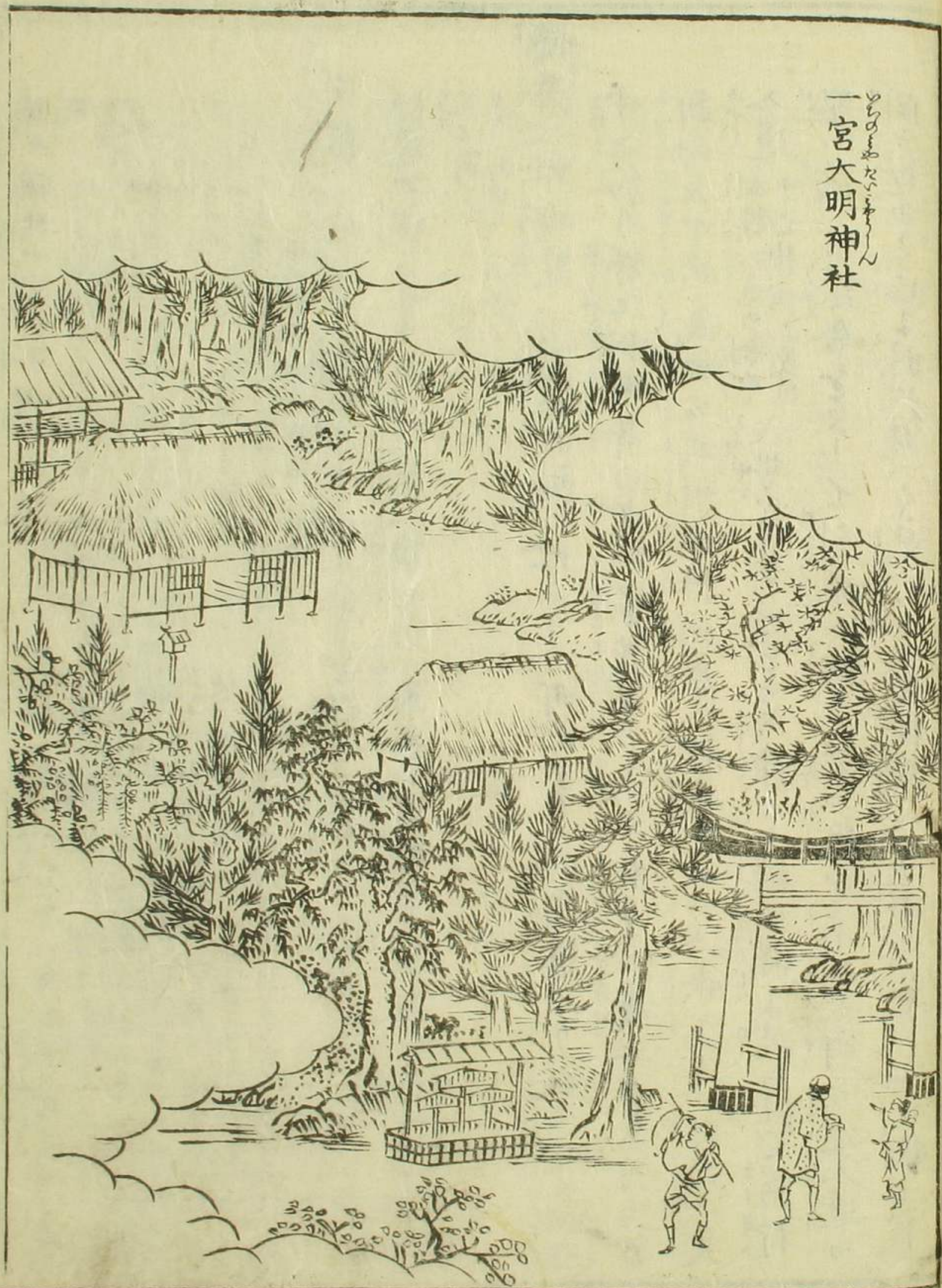
ともいふに神國寺附かたきあり  
後僧あり今日教上りて當寺より  
申請の問院主職は補せらるるあり  
法皇四十九日の神事南無堂あり  
悲寺あり三口あり又同書治承五年四月七日の祭下は小田三郎交茂  
摩那内吉富并宮連光寺等の地を自の所領は  
吉富ハ此辺なりと云ふされしも真慈悲寺の頃廢せしや今其田跡を  
八幡社記曰建久四年鎌倉右大将家法華經を書寫し金壺を入り當社は納  
其書寫せる所の紙法華經の文字多くハ朽敗し金壺は入り當社は納  
升井 常盤と號せし清泉寺中

八國見 本堂の後の山の上あり此所の登れハ八箇國の  
二王塚 松蓮寺より東南五丁を隔て此の下の小高を所ハ松樹十  
のあり古大伽藍あり又寶藏と唱ふる地あり今橋礎石ハ自然銅一寸  
八分の觀音の像なり石瓶折壞の刀劍數十柄華血等のと云ハ此所  
を衆と云ふ

百草八幡宮 松蓮寺より西の方山の中腹あり則松蓮寺奉祀の  
宮と云八月十五日を以て祭辰とす本社向拜の額八幡宮は三  
字ハ梅小路大納言定福卿の筆なり寺僧曰正殿ハ安置せる所の

神躰ハ八幡宮神宮王仁津戸明神武内大臣義家公等の木像  
なりと云相傳康平五年源頼義義家兩公奥州の夷賊征伐の時  
山城國男山正八幡宮の社檀の土を穿ちて石瓶ハ盛來く一字の  
社を造営し此地ハ勸請なりなり願書等を収め其後凶  
徒悉く平け凱哥の時再此地ハ至り金銅の觀世音の像  
をも安置し永く祭祀を不朽傳へんと  
石の祭田を寄附 且兩將軍の隨兵各軍功を祈り帶くる如の  
刀杖を収め神徳を謝し尔來鎌倉頼朝卿當社の神を崇敬し  
あひ建久四年法華經を書寫し金壺入り奉納あり  
星霜を経る件の宝器散失せしと云徳年間二王塚の地を穿て  
再ハ是を得る寺僧云當社境内の樹木枯る後ハ悉く  
奥州の方へ向て倒る昔より今に至るあり是當社は  
一奇吏と云

一宮大明神社



一宮大明神社

百草八幡宮より十五六町北の方多麻川の南岸一宮  
 村あり一里ありを隔つ祠官新田氏大田氏両家より奉祀を祭  
 神ハ天下春命なり後瀬織津比咩及び稻倉魂大神を合祭す  
 三神一社三扉とす祭神今ハ小野舊事本記ニ饒速日命  
 此葦原の中津國ニ降臨し多時輔佐とす隨駕し  
 三十二神の其一神也即三十二國ニ分降あり多時信濃國ハ  
 天表春命武蔵國へ天下春命降臨なり多時國を開き

と云ふ事なり  
 社司相傳神代の昔當社下春命此地止り或ハ又國の祖の神  
 徳小國の神也此を祀りて今ハ多時國の祖の神也  
 命小野宮村小野神社に遷座ありて倉稻魂命を配祀す  
 多時世詳なり然レ成務天皇の御宇國造兄多毛比命武蔵國多麻の地ニ府を  
 開き今ハ一宮ハ前國の祖神小野宮ハ同郡の旧社ありハ國造崇敬ありて倉稻  
 魂命と共に合せり再ハ六所の宮の相殿ニ遷りて今ハ多時國の祖の神也  
 三所の神輿と供奉しありて多時國の祖の神也  
 又供奉し六所宮に至りて神の御旅所ニありて多時國の祖の神也  
 社の内殿に杖茶盛と供し祭奠をなすを同祀とす元ハ直ニ一宮ニ歸りて當

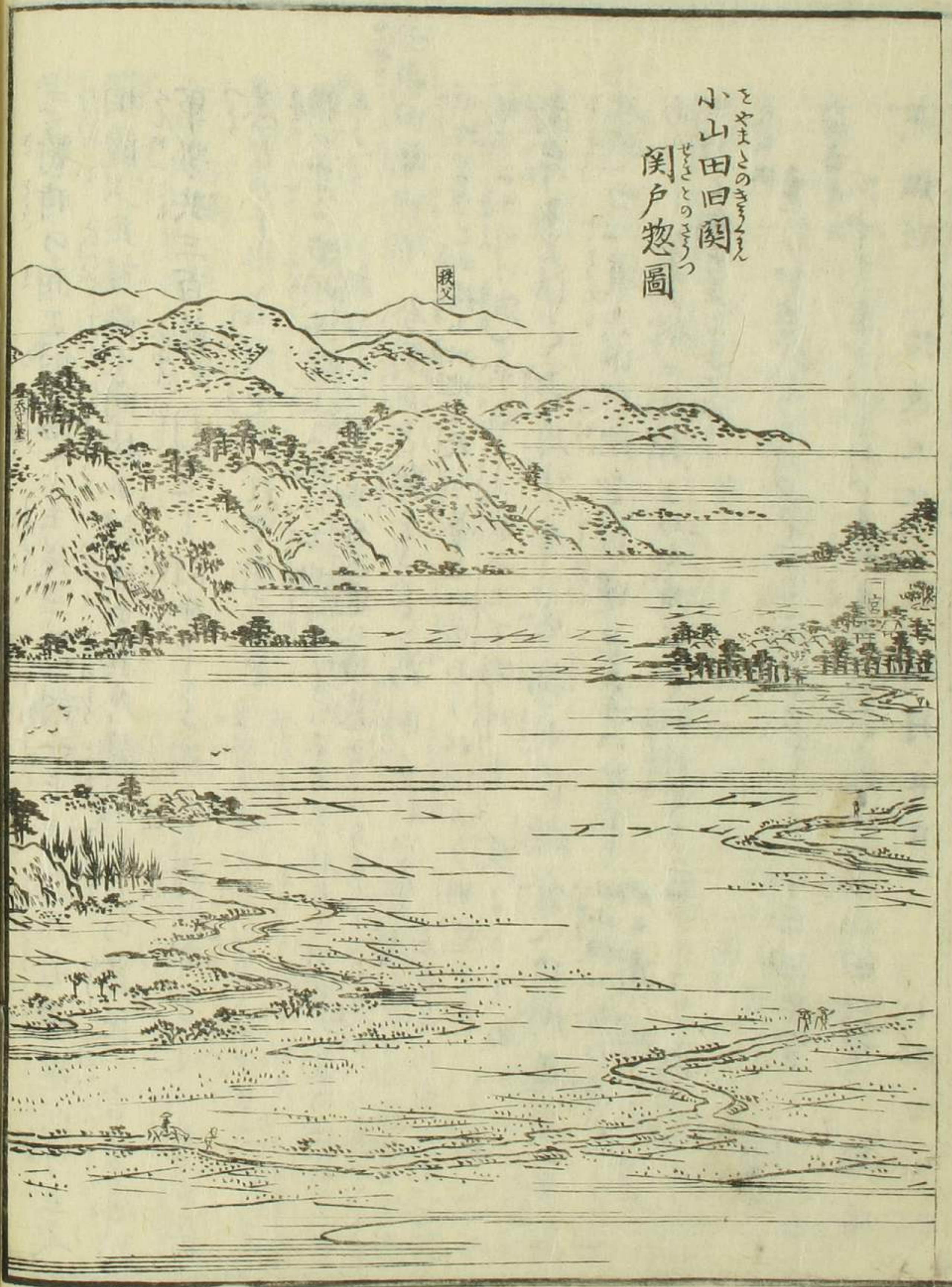
按小當社一宮の事旧史小所見なりとあるも既小地名を一宮と号祠とも一宮と  
稱し一宮の祖神第一鎮座なりとあるも一宮と稱し一宮と一宮と  
山田三郎重成平太公貞の所領を自の所領に注し如く云奈下小多磨郡の内  
吉富乃一宮別當松連寺の地名を載せ石草村松連寺所藏の建久四年の経  
一宮又高幡村金剛寺の銘せりある時八建久のむら松連寺當社の別當  
一本搜一宮より南の方半町をかりを隔て耕田の中より樹の本に  
注連を繞らせり土人百草八幡宮の一鳥居の旧跡なりと云  
八十町と

横溝八郎墳墓 小山田田関の地より一町あり西南道より右の方の畑の  
中より塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記は正慶二年五月十日  
新田左中將義貞公武州分倍河原へ押寄るといふ条下小四郎左近矣  
入道相模入道の舎赤大勢なりといふも三浦一時の謀み破られて落行  
勢ハ散々小鎌倉をとりて引退く討者ハ數を不知大將左近入道也  
関戸辺わく己は討れぬく見えると横溝八郎踏止りて近付敵二ト

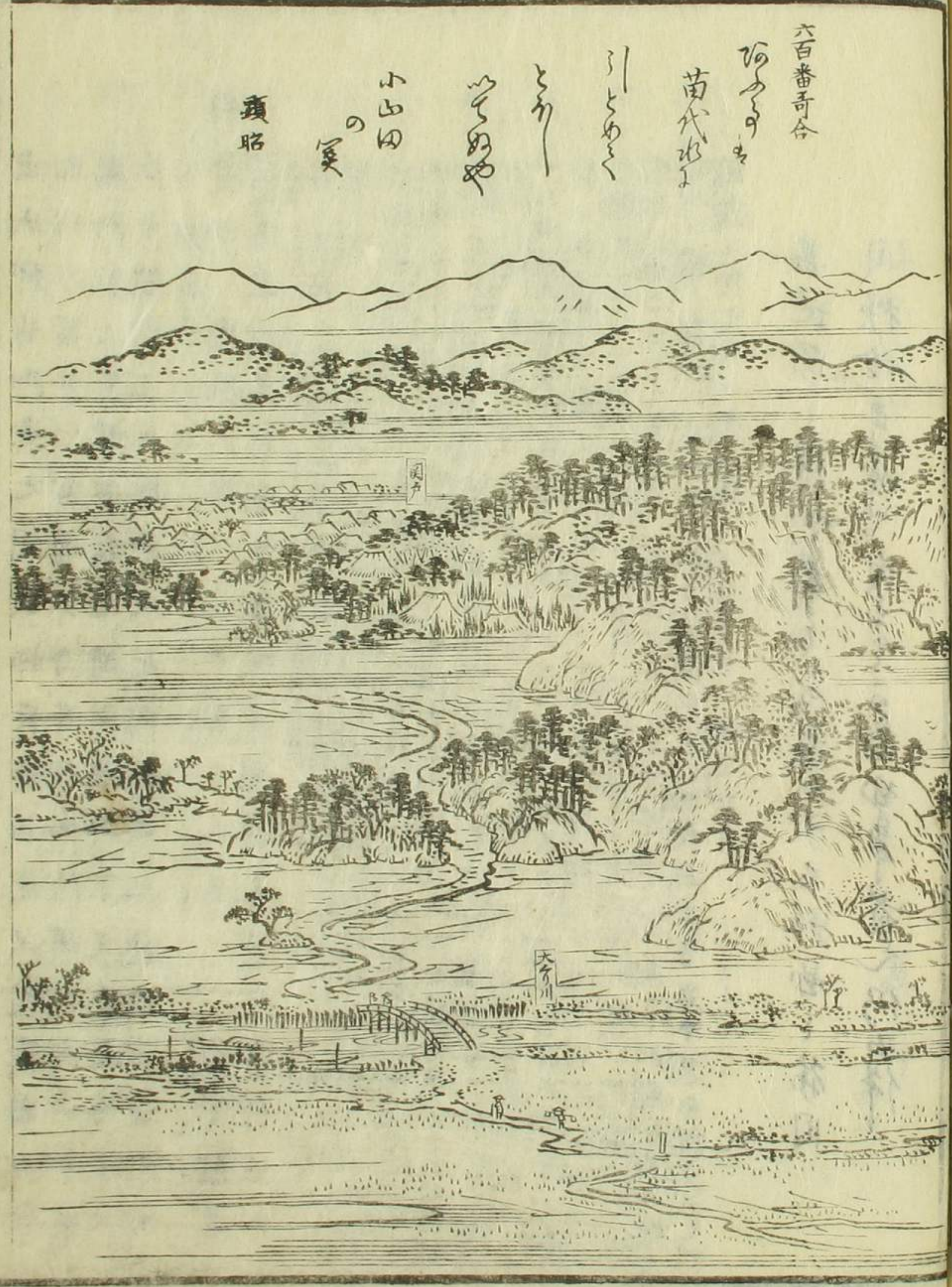
三騎時の間小射落し主後三騎討死を安符入道道堪父子三人  
相隨入兵百餘人同枕小討死を其外譜代奉公の良後一言芳恩に  
軍勢共三百餘人引返り討死する間小大將四郎左近入道ハ身  
恙なく山内迄引れり安符入道父子の墓も此近きあり  
構の中は古墳あり上は樞の古樹茂りありといふも何人の墓の印あり  
小山田田関址 今對戸と稱せり則これなり  
田址なりと云按此地は天守臺と云所あり此頂より眺望せむハ  
眼下玉川の流を平臨し又遙小上下野州一望ハ入江多麻川の  
南岸よそひく古府中あり帝都及び鎌倉への街道あり東奥  
北越の二道共此地を往還せむハ  
あり一かり今ハ邑名よの残る此所より二里を南の方小  
田村と稱せり

夫木抄 色子を苗代ふ小位せとこあむここ小山田の美  
六百番奇合 治兼五年 四月廿日 小山田三郎  
東鑑曰 治兼五年 四月廿日 小山田三郎  
頭昭

こやまのきんぐん  
小山田曰関  
せいのこころつ  
関戸惣圖



六百番奇合  
阿多  
苗代水  
引とめく  
とろ  
そのめ  
小山田  
の  
夏  
類昭



重成聊肯御意之間成怖畏菴居是以武藏國多摩郡内吉富并一宮蓮光寺等注加所領之内去年東國御家人安緒本領之時同賜御下文訖而為平太弘貞領所之旨捧申狀之間亂明之處無相違仍被付弘貞也云云

尚書曰建曆三年十月十八日清定奉行云云

同

按武藏國新關實檢被遺圖書允清定奉行云云

其東鑑載武藏國新關地名注云云

關山田庄の田原比奈家の所領被帳は小山田三郎直功の所領也

成瀬高田河田貞光寺鶴御大谷廣勝小山田三郎直功の所領也

金井大倉の地を領する由注せり又同書は松田左馬助の所領也

善三の田庄内小野地なる由注せり又同書は松田左馬助の所領也

田庄の廣瀬なる由注せり又同書は松田左馬助の所領也

小山田庄の田原比奈家の所領被帳は小山田三郎直功の所領也

家古文書を藏す一、天文二十四年關戸宿高の所領也

の證狀あり二、關戸郷中河原の内正戒塚有山源右衛門新屋元正相澤其の形

芝原田地なる由注せり又同書は松田左馬助の所領也

又三、關戸郷市の定日ありひ濁酒盛お物役救免若本某の證文又を四

關錢五貫文有山源右衛門へ付付る旨の證文なり

其地圖は後加花ののむい少も私物に初目  
自撰各軍屋の付らるゝの爲物事者之仍也件

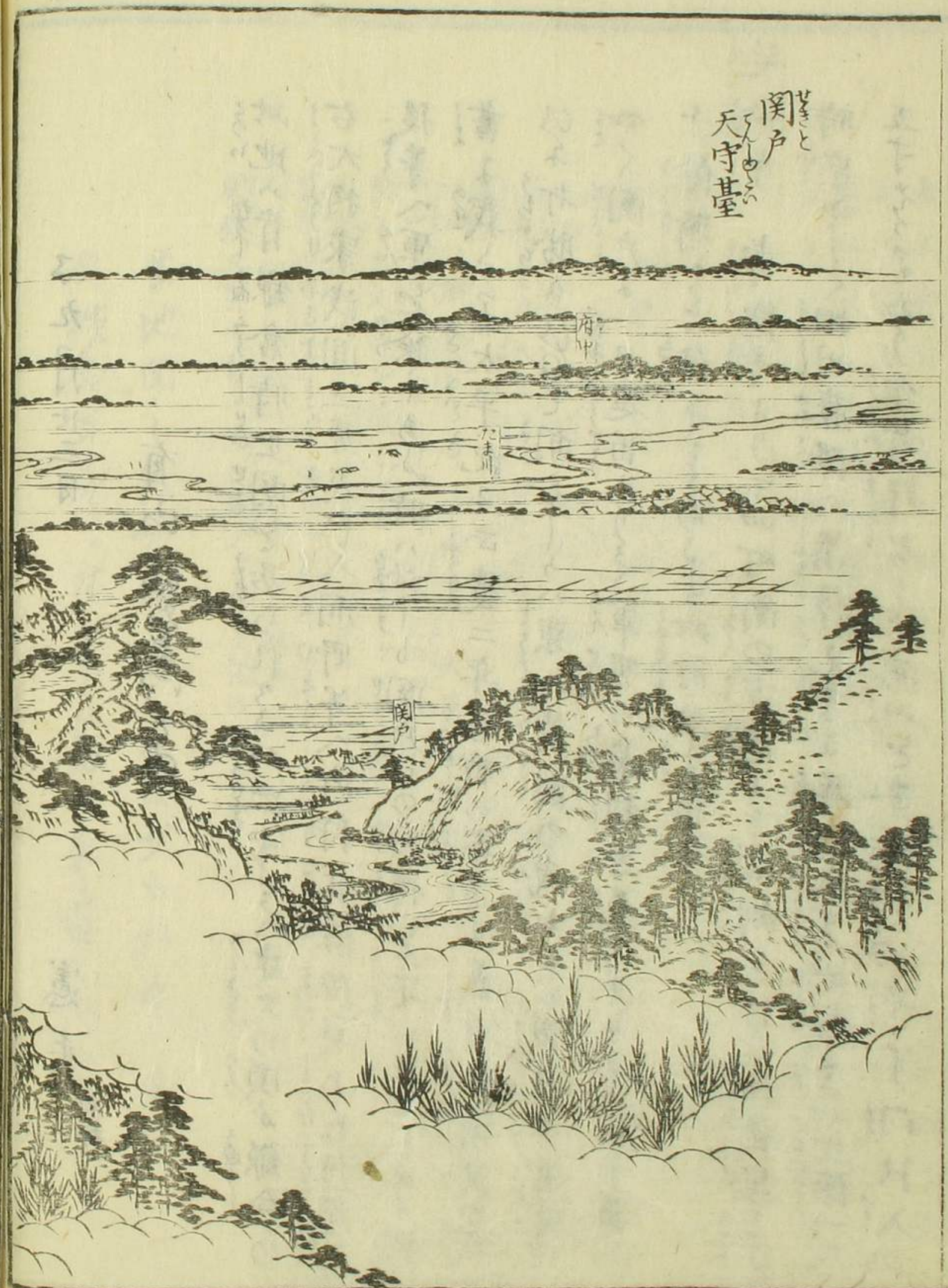
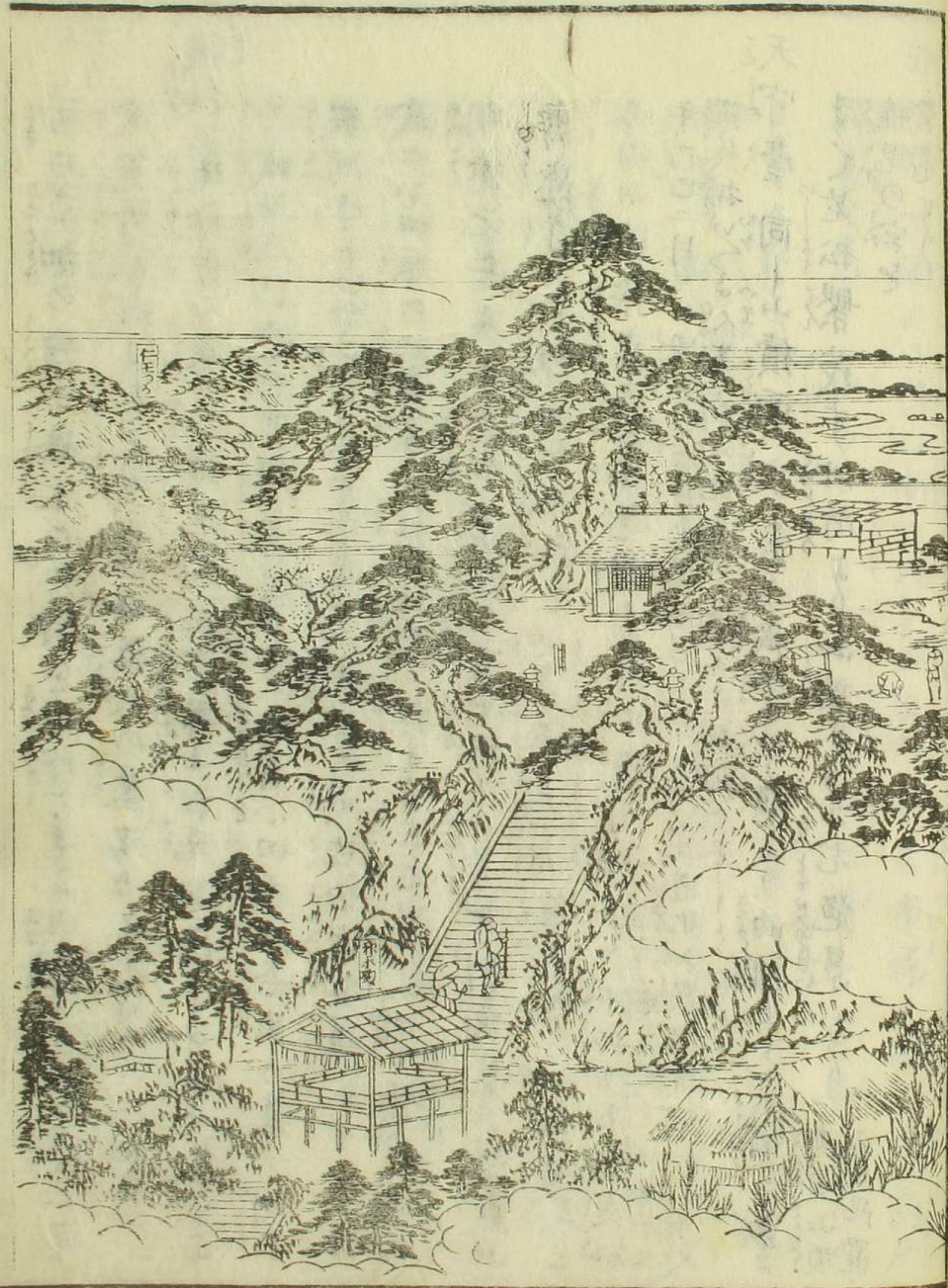
子九月廿三日

有山源右衛門の

憲秀  
花押

此地ハ昔鎌倉時世關を居られれる旧跡やと建久の項が鎌倉の  
右大將家浅間三原及ひ入間野等へ御符其餘陸奥上毛信濃越  
後等へ軍を發しあふ時ハ必しも關戸口の大將を定られしり諸  
書に載しるる太平記ハ正慶二年合戦の条下は義貞教箇度の戦  
ひハ打勝多しぬと聞えりハ東八箇國の武士とも順付り雲霞の  
如く關戸ハ一日逗留ありて軍勢の著到を著らしりハ六十萬七  
十餘騎とを注しるる此所の事なり

延命寺 壽德寺より三四町南の方道より右側より地蔵院と号  
時宗より相州藤澤の清浄光寺ハ属在本寺地蔵ハ立像一尺  
五寸とあり作者詳なりハ開山を普國上人と号す門は入口



関戸  
天守臺

右の方畑の傍は榛木の老樹を以印とする古塚あり正慶二年  
武蔵野合戦は討死せし四百餘人の墓なりといふ

城山 延命寺の後の山積を以て土中稀は古瓦を得るありといふ

其城主及び時世等詳ならず土人云昔小田原北条家の幕下関戸

駿河守といふ人ありといふ又永祿の頃佐伯市助道永といふ侍

武士小田原の北条家よ仕へ此地に住むるといふ

明徳元年庚午念阿護法入道此地に一寺を創建ありて吉祥山

壽徳寺と云禪院を再興も 此寺は関戸入口道 道永自中興潤基と

なり日舜宗惠大和尚を請へて中興潤山といふ 市助法名を道永

年己巳二月三日陸奥小瀬死す道永の子孫三河守道也和泉守道安同縣人

筑後探りて人等皆此地に依り終に民衆に下りていふなり

天守臺 同山積西の方あり城山の半腹より曲折して山頂は砂

ましく老松繁茂す此所より四望するも尤絶景なり 近頃山頂

権現の宮と 雲取せり 近頃山頂は金毘羅

沓切坂 下関戸の宿の南の坂を云坂の上を古市場と唱ふ昔高戸

驛舎ありて地ならし天正己来此地の古道廢して今ハ名のこゝとな

はるとされとも府中より横切り相州矢倉澤大磯等への官用の次

場なり 今も相州大山石尊富士詣杯 相傳正平七年壬二月八日武蔵野

合戦の時新田義貞公脇屋義治公總は二百餘騎討死せし此所方

勢も散るは行方多しなりハ迎も討死せし手余もハ鎌倉へ

打入り足利左馬頭基氏は逢く命を失はせと夜半過り頃関戸を

過りひらき石堂入道三浦介等の五六千騎の勢は出逢りハ神

奈川を徑鎌倉へ打入勝利を得る頃此坂より馬の沓をとる

そなたせやく打あかす依る名とすとのみ

赤坂臺 関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きりて赤坂と号

く坂を登れば赤坂臺なり一里半を徑り河原谷と云地あり

平臺 赤坂臺の東の積を以て此所は三圍よあまねる老松一株あり

土人甚兵衛松と字を此地、矢の口は属す

騰雲山明覚寺 矢の口村街道より南の横よりを渡り場の南拾五町

あまの河と臨済派の禪林、鎌倉建長寺に属す本寺釋迦如来

唐佛や座像八寸をかり河を當寺に往古足利義晴公建立なり

佛刹や其後廢寺となりと慶長年間加藤太郎左衛門再興

一と菩提寺となりと云中興基ハ揚雲和尚中興す

長坂血鎗九郎陣中守護の為鎧の中小籠なりと今依羅の正

觀音を安置せり立像三寸を弘法大師の作と今一尺斗の

正觀音を彫造しと中興中興す

小澤小太郎居宅旧地 當寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと

称す地あり又當寺の前は小高き岡ありと截地下と号く頃

兵糧を収る倉の跡なりと云 次の小澤の城址の条下小澤某の名を

艸原山威光寺 同所明覚寺より道を隔て、一丁斗向山側二丁斗左へ

入るありと新義真言宗中興高勝寺に属す本寺大日如来

座像三尺を河を當寺に穴澤天神の別當なり 天明年間火災に罹りて殿堂僧坊

悉く焼亡せり 舊記を亡せり

東鑑曰 治兼四年庚子十一月十五日 御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺者 依為源家敷代御祈禱所院主僧

僧曰 相兼之僧坊寺領 如元被奉免之云云

武蔵國威光寺 院主長為小山太郎有高被押領寺

亡畢有御感沙汰之主 給御下文所祈申也

領之由捧去元年九月 所給御下文所祈申也

書曰 文治元年九月 所給御下文所祈申也

小止其妨高押妨威光寺領之由 所給御下文所祈申也

令可止其妨高押妨威光寺領之由 所給御下文所祈申也

所可止其妨高押妨威光寺領之由 所給御下文所祈申也

廣藤判官元二邦道等奉行之下 宗考尚橋判官代以

武蔵國威光寺 院主長為小山太郎有高被押領寺

去月廿六日 率五十七餘人 惡黨乱入 寺領及前田狼

籍下 入道増西五十餘人の惡黨を率て當寺の田を劫掠す

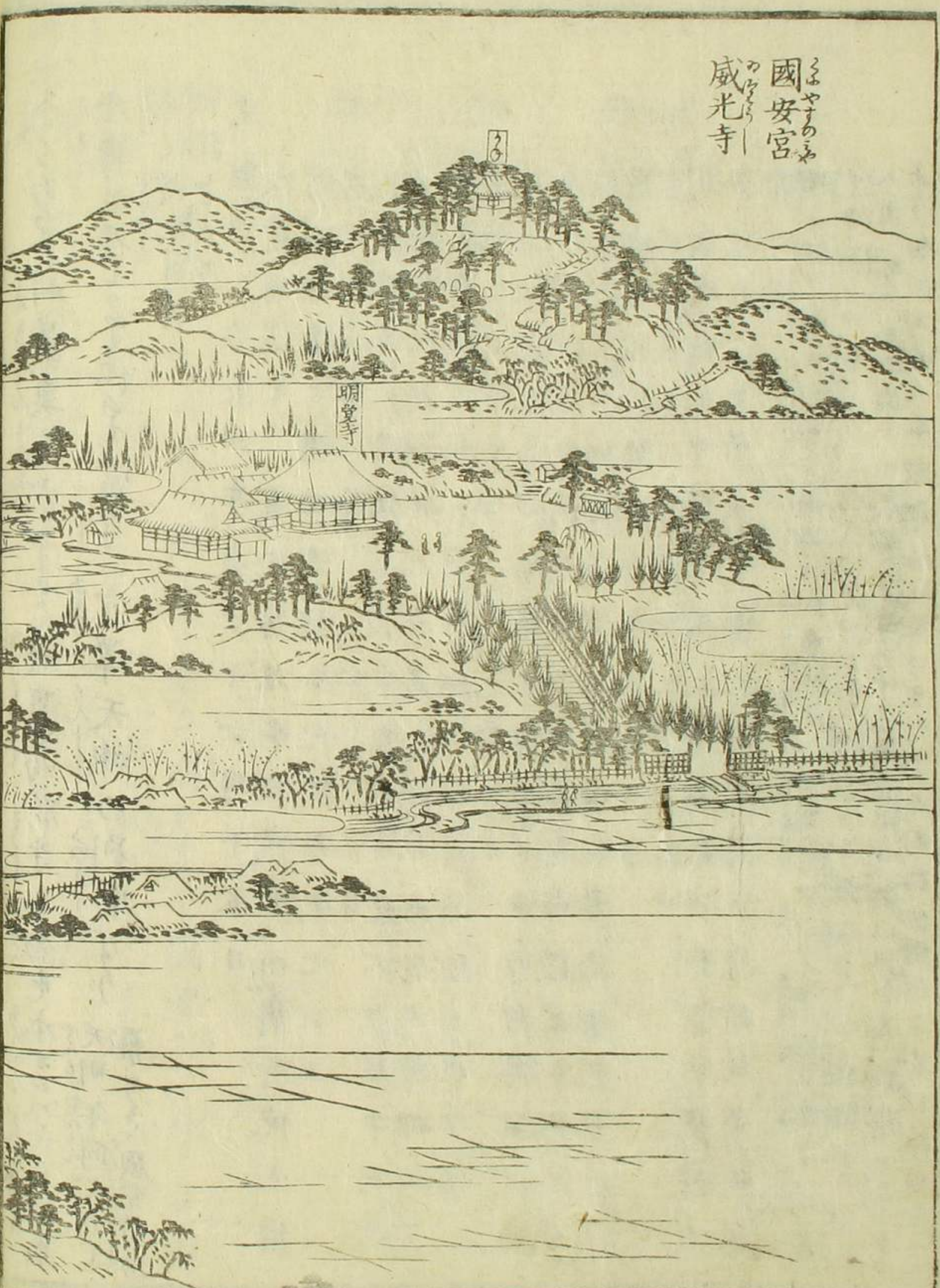
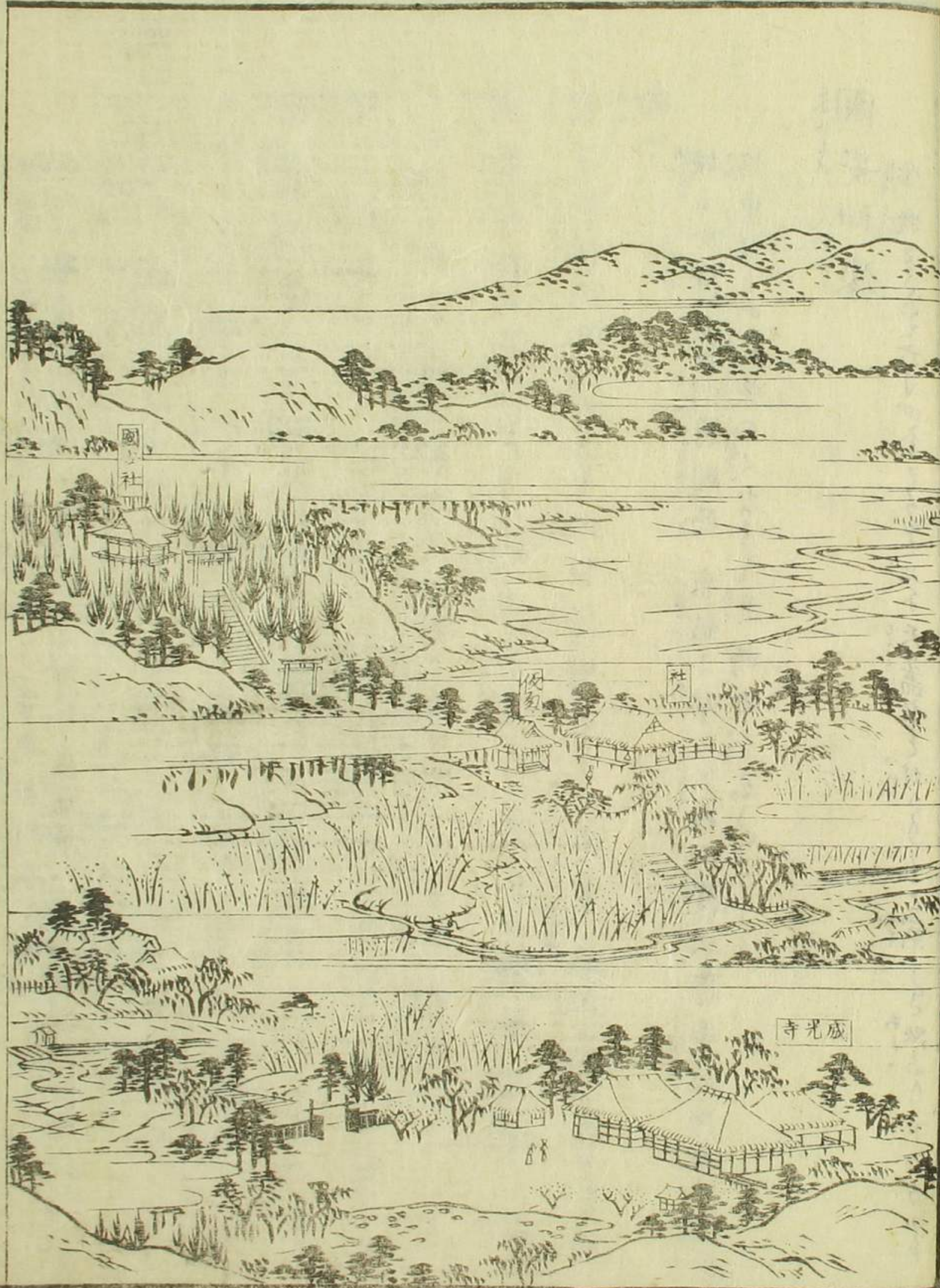
光寺あり 拍江入道ハ多麻郡拍江郷の主なり 今同郡佐須村に其田館の地と

あり 拍江入道ハ多麻郡拍江郷の主なり 今同郡佐須村に其田館の地と

あり 拍江入道ハ多麻郡拍江郷の主なり 今同郡佐須村に其田館の地と

あり 拍江入道ハ多麻郡拍江郷の主なり 今同郡佐須村に其田館の地と





杯まるとのありて此地より程遠くす東鑑州本は拍江は作ら誤なり  
 江戸の雅司谷其間七里隔つへ一されとも當寺ハ天明年間の火災ハ日記七  
 ころとて古を考へ合まるとなりな一猶多日証正まるとの

國安明神祠 威光寺の南五十歩斗を隔て同側左の小道を三十歩  
 斗入るあり 神主山本氏奉祀す神躰ハ左のめきとのふく世云所の  
 鑄形の神像なり 相傳へ往古小澤左衛門尉國高とて人此地を  
 領す國高此地は道遙あり一頃松樹の下は白髮の老翁現し尔  
 して曰く我ハ大國主神なり此地は崇祀らハ万民國安かると云  
 國高奇異の思ひを宮居を営んでたは國安明神と崇め  
 祭社領の地八百五十坪を寄附あり武運長久なるんを祈  
 念すとのふ

國安神像

按は小澤左衛門尉國高ハ東鑑よ奉らるの小澤次郎重政同左近將監  
 信重なるの氏族の人なるん其時世今あくとく

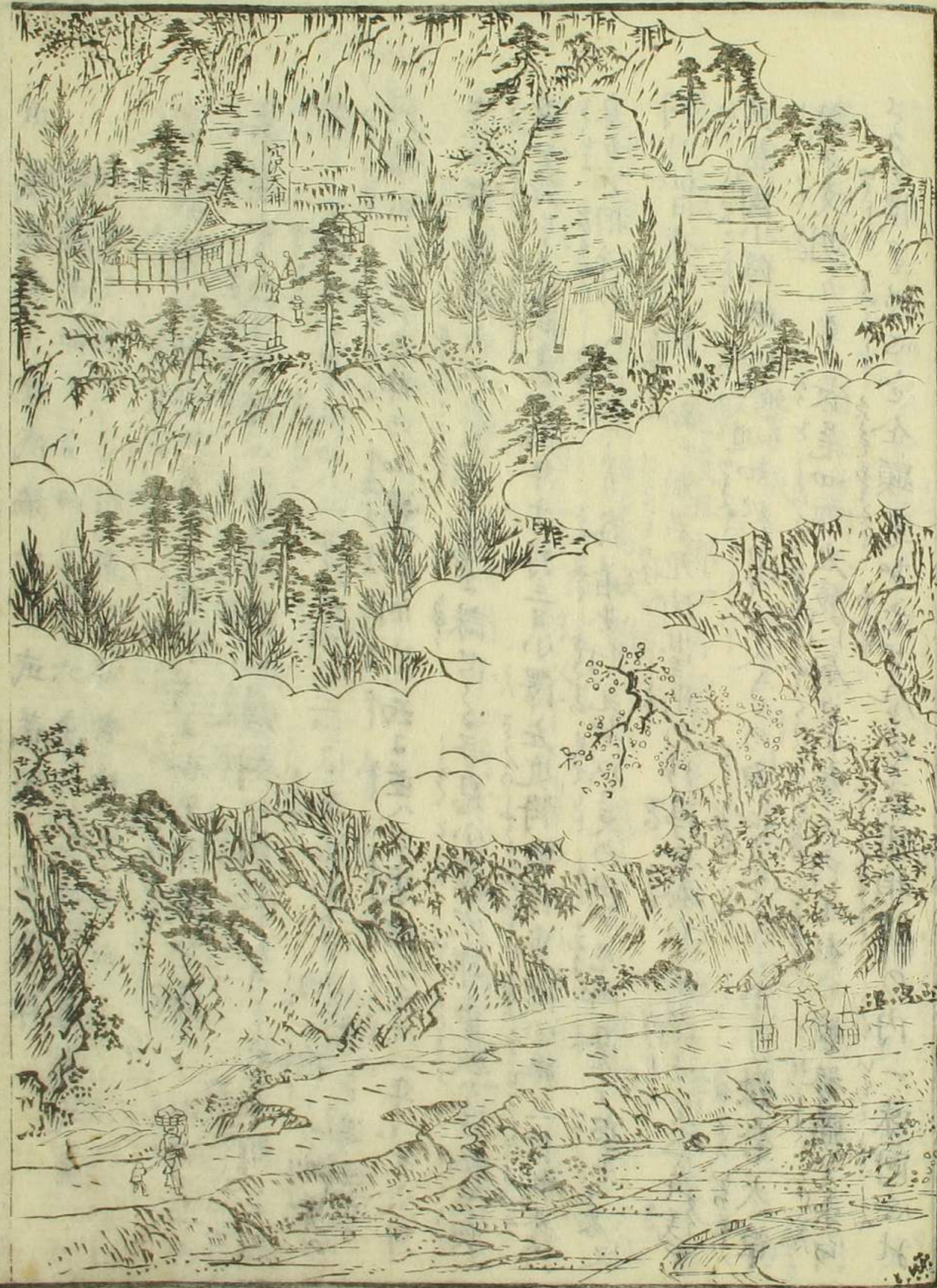
銅物そのと六寸四分そのと六寸天蓋なと付たり一と覺しき跡あり下の方を

花瓶のめきとのありて  
 上の方よりあり神躰を  
 僧形ありて宝珠と  
 劍とを持しあり  
 形なり



穴澤天神社 谷口邑威光寺より東北の方三町斗を隔て同側往還  
 右の方小道を入てあり社ハ山の中腹ありて此邊を小澤ヶ原と唱今  
 祭神詳ならず後世管神を合祭せり祭礼ハ七月廿五日なり又同日  
 神樂を修行し九月廿五日は獅子舞を興行を別當ハ真言宗はて  
 威光寺と号せ

延喜式神名帳曰 武藏國 多磨郡  
 穴澤天神社云



武蔵國風土記殘編曰 武蔵國 多磨郡  
穴澤天神 圭田三十六東三毛田 孝安天皇  
四年壬辰三月所祭少名彦神也 云云

當社の麓を淵水流とく多麻川を合せ其流を隔て山岨一の  
巖窟あり故に穴澤の名あり昔の巖洞は崩れたりして今新堀  
穿てて洞穴あり洞口ハ一中之内ハ二に分てあり

小澤城址 谷口天神の山續浅間山の西に並へ東鑑元久二年己丑六月

廿三日稻毛入道大河戸三郎が為に誅せし子息小澤次郎重政ハ宇佐美與

是を誅せし又同書ハ同年十一月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季ハ

息女を相伴めく京都より泰着を行先を以支の由を尼御臺に啓せ下畧又

同月四日夜ハ入綾小路の姫君尼御臺所の侍亭ハ泰着の御猶子ハ是後

武蔵國小澤郷 郷領ハ道知初せしるへきの由何れとあり鎌倉大草

紙ハ文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家務職を兼ら

ざるを憤り逆心を企頭定を亡さんとて武州相州の内一味同心ハ

兵を催し上杉家を襲ふとて茶下ハ金子掃部助ハ小澤と云

城ハ指籠る間大田左衛門入道下知とく扇谷より勢を遣し同

三月十八日溝呂木の城を攻落せ同日ハ磯の要害を責らる一日防

戦ハ夜ハ入るハ越後五郎四郎ハかきとて城を渡り降参せ夫あり

小澤城へ押寄せ攻めし事ハ城難所あり落くことハ中景春一味の宰相

寺ナシハ吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山より

打出當國府中ハ陣を取畧同年四月十八日金子掃部助ハ籠り

小澤の城も責落せし事

向の岡 今向岡と稱する地ハ多麻川を北に帯て西ハ関戸より發く

東ハ末長ハ終る事ハ是なり連岡の長九六里あり

或ハ云今向の岡と稱する連岡向の岡ハある武蔵國風土記殘編に  
て考ふと多磨郡北の岡ハ限るとある也此地ハあり  
西二十里の連岡なり四共武蔵野ハ何れの方あり岡ハ相對  
故に向の岡の名ありとて今向の岡と稱する地ハ都筑ヶ岳とて佳  
なりんと考ふ否ハあされとも暫く疑をこふ事なる

武蔵國風土記殘編曰  
多磨郡東限草窪岡西限金川南限華田浦北限向  
岡云云

新抄撰

續古今

玉葉

同

夫木

家集

お林名所考

武蔵野の向の岡は多磨郡に在りて其の北は

新抄撰 小町

續古今 知家

玉葉 後一条入道

同 定家

夫木 為家

家集 後鳥羽院

お林名所考 隆源

都筑の岳 小佛の嶺より小山田里迄ハ多磨郡ヲ屬セリ平山或ハ

横山ナリト云フ既ハ古奇也玉の横山ト詠セリ皆此間ニ在リ又官林の

案内山ト云フ神奈川迄の間ハ都筑郡ヲ屬セリ南北ハ高底カク

坂東路凡百里有リ河を續ク奈ノ岳の名ありと云

青沼明神 同所長沼村ハ王子通道の傍ニ在リ祭神大田命孫田彦

大神二神ナリ勸請の初を云々

八月十五日ナリ

按ニ當社ハ延喜式内青沼神社ナリ

然ル時ハ當社を以延喜式内の青沼神社トシテ

仙谷山壽福禪寺 谷の口の東の山積矢の口渡一場ナリ十三町東南の方

管村ニ在リ

創ナシ佛刹ナリ昔ハ天台宗トシ建長寺の大安禪師の時

あり禪林トシ今ハ曹洞派トナリ

本堂本尊十一面觀世音 相傳ハ鳥佛師の雕刻或云和州長谷寺の像と同本

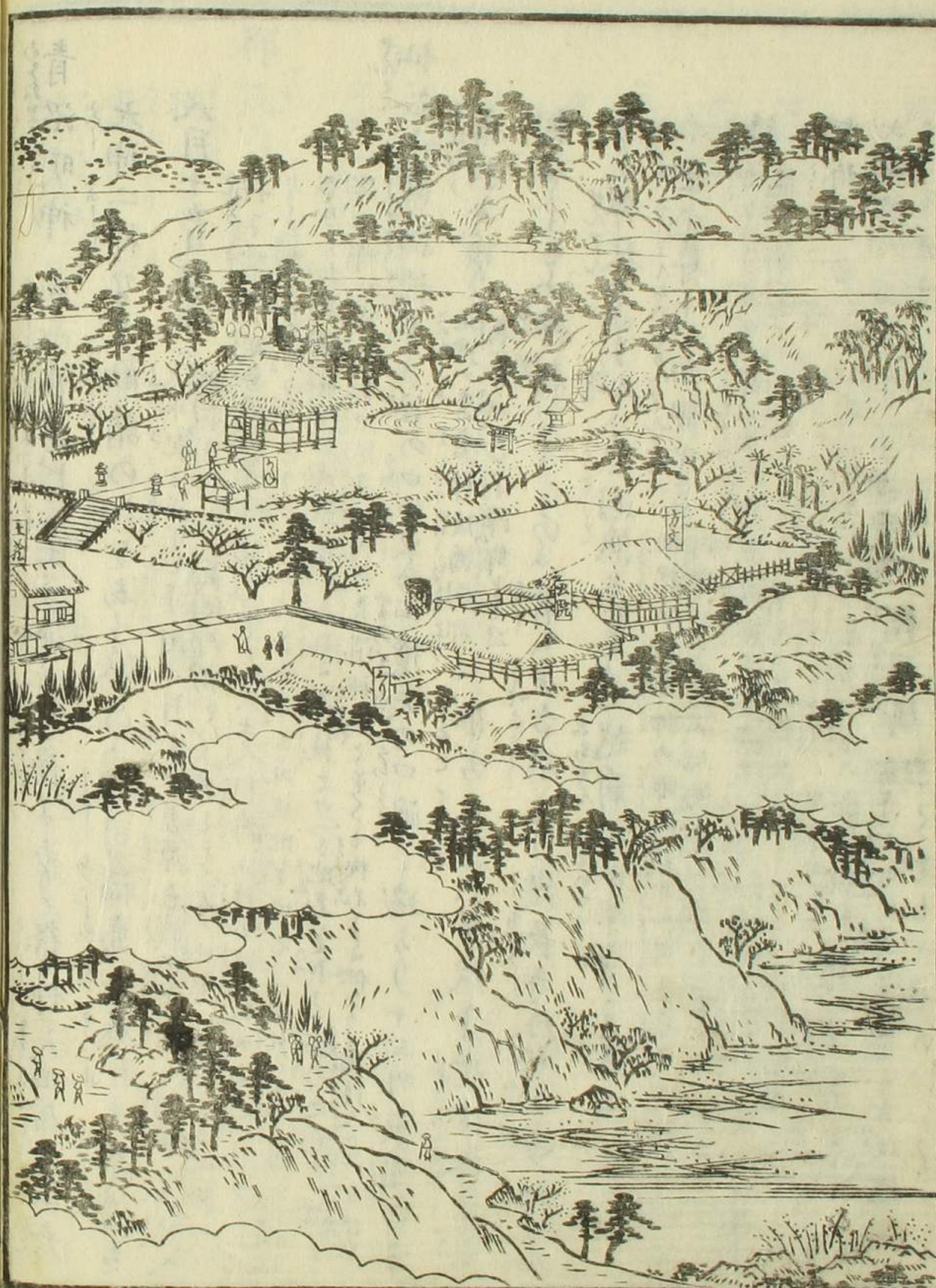
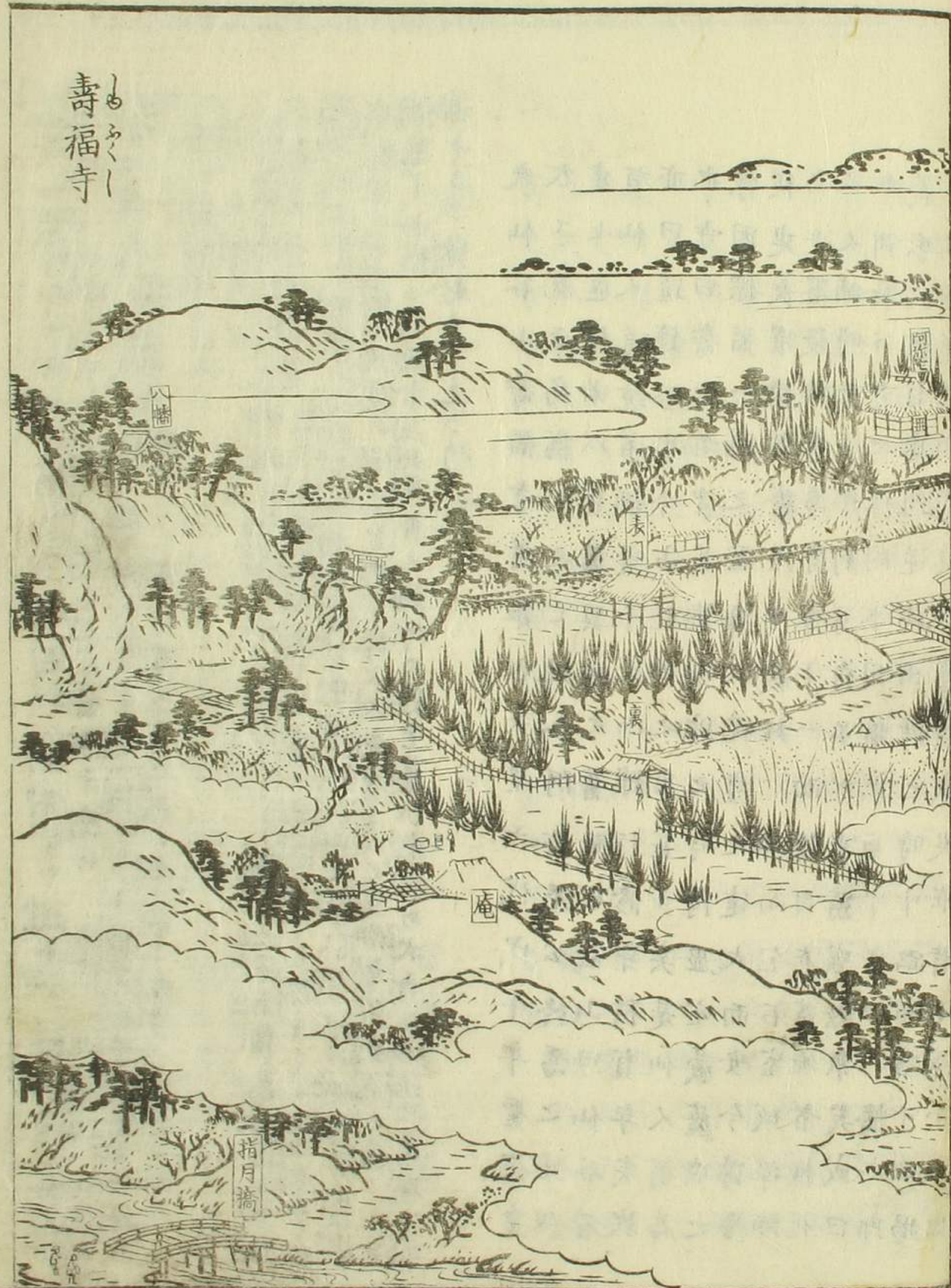
鐘 右ニ在リ井田六郎右衛門尉某應永七年庚辰當寺住持の

阿彌陀堂 同ノ左ニ在リ觀應殿トシテ本堂ハ座像四尺五

大黒辨天の四座をまつる擁護廟 指月橋 當寺門外の流石架も板橋を

と号す當寺十境の一ナリ

もろくし  
壽福寺



餐霞谷 同所の庫裡の後の谷と云道漱の旧跡なり故小今採藥阜泰徐福  
来り仙薬を攫霧松 同所の左はあり今ハ枯れ王俗道祖神神と云一根本五  
方丈 曉成室とのみ 枝中霧を攫うゆと云ふ名とす當寺十境の一なり  
大般若経六百卷 梵函に収めず紙ハ黄色中々古名留高素の真痕  
其名を注せり相傳ふ文治年間源義経と祝慶普此地は憇ハ曾祖の例跡を追ハ當  
寺觀音の尊前ハ恢復の應驗を祈り持ハ大會堂ハ入テ文治年間経卷の瀾を追ハ當  
觀寫す徳士成鎌倉左兵衛普氏満師の徳を慕ハ参詣の次再ハ此徑の靈損を復  
補する由縁起よ

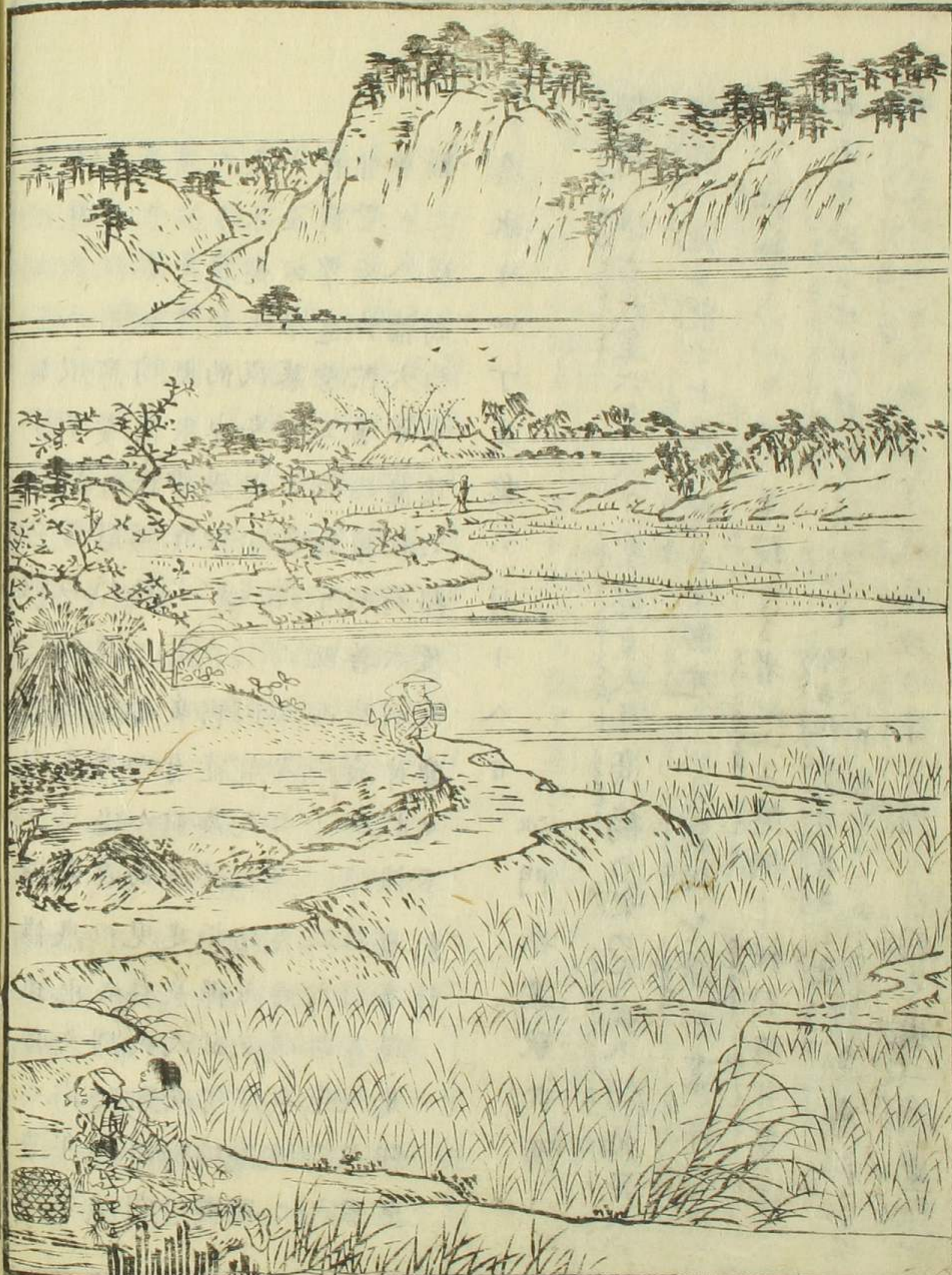
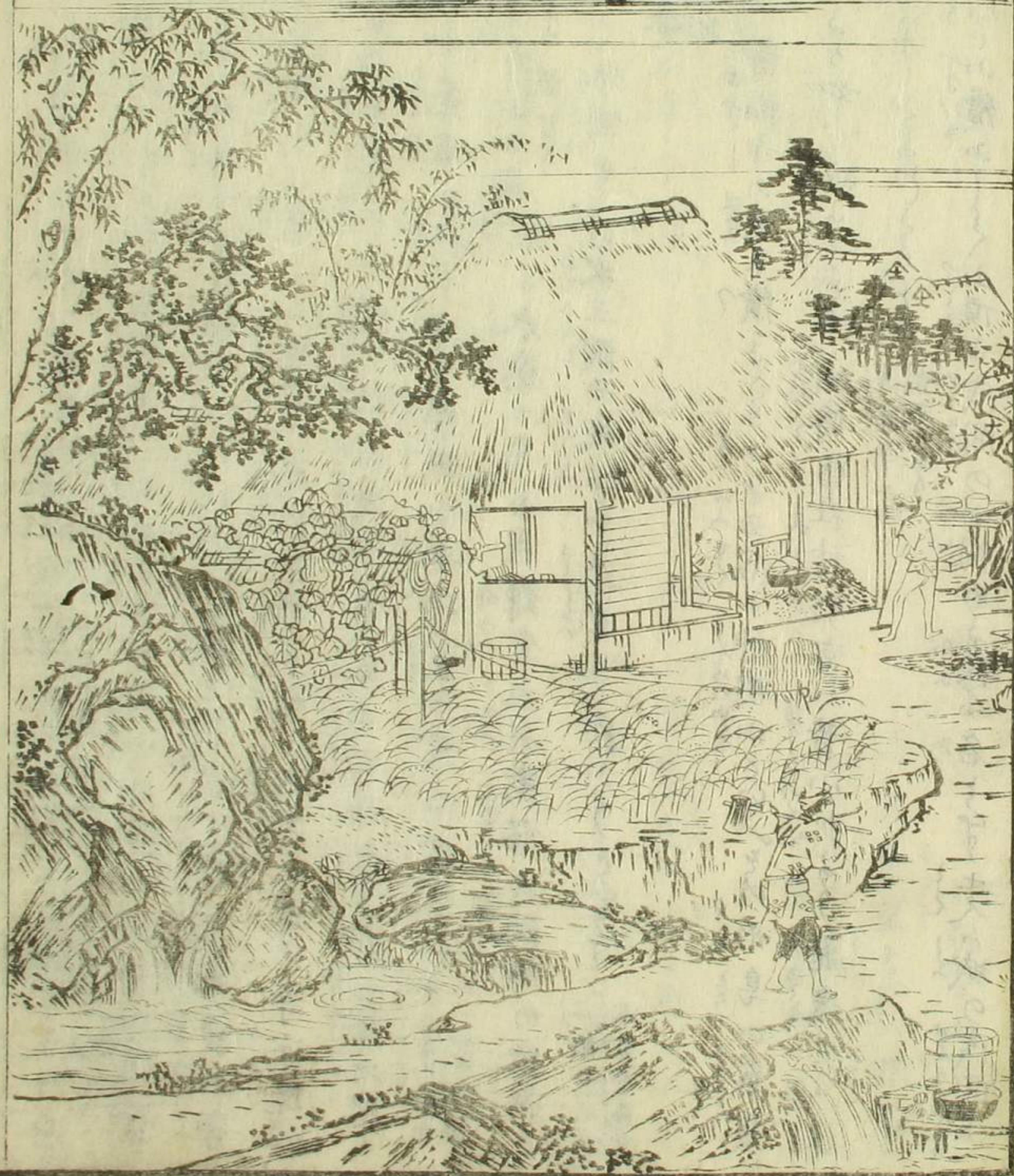
夫仙谷山壽福寺者推古天皇六代戊午年聖德皇  
太子就于高橋妃之亡妣入阿弥尼公終焉之地  
建七區練若以資薦真福之山鍊行修也蓋山曰仙谷者  
有仙人道鏡谷也今古怪異之事甚多矣積有年矣故  
亦曰道鏡福谷也昔聖德太子觀自而大石室今薩  
像因標福一滿之曾艾捺夷地之時得虛空藏薩  
後建長曜侍者騰虛空藏一經軸而薩室者推  
之手墨鏡時來于彫刻焉自爾以來觀自而薩室者  
之州長谷寺之像同也東平年中八幡太  
和州欲排付與州後徒出陣之感矣  
義和州欲排付與州後徒出陣之感矣

重政每晨散步前勉於晨香夕燈修現當之善因  
矣梵函大般若經若經行於地追曾租之例跡祈  
源義經泊辨慶暫憇寫經之闕而今尚存矣雖祈  
彼之應驗特復舊寫經之闕而今尚存矣雖祈  
遭兵災寺既敗壞年久矣與荒廢如振長安禪  
大方慶和尚卓錫此地力與荒廢如振長安禪  
集永德士戊年鎌倉左兵衛普氏滿師之德を慕ハ参詣の次再ハ此徑の靈損を復  
山全公雅慕師之德を慕ハ参詣の次再ハ此徑の靈損を復  
蠱損造營三師之德を慕ハ参詣の次再ハ此徑の靈損を復  
會堂安彌陀善逝像於善應殿奉請辨財尊天大  
尊之八幡大菩薩之紹隆而慶慶慶慶慶慶慶慶慶  
圖之鞏固祈佛運之紹隆而慶慶慶慶慶慶慶慶慶

以門宗圓敬記焉

相傳推古天皇六年戊午聖德皇太子高橋の妃の亡妣入阿弥尼公  
終焉の地に就て七區の練若を勅建し以て眞福を資の舊跡なり  
山を仙谷といふを仙人道鏡なる者此山に隱栖し練行修身事積  
年あり故に亦道鏡谷といふ也  
曾て芟榛夷地の時虚空藏薩埵の像を得り因り福一満の聖跡を

吐玉水





標して以て寺の速大を祝也  
後建長權侍者虚空藏一軸を贈るのみ  
康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時中路茲に宿を其頂當  
寺本より不用運を祈る後果して感遇を獲るも昔小澤小太郎重政毎  
晨歩を像前より旋して現當の善因を修す然も兵災に遭く寺宇既に  
敗壞せり年久し爰に鎌倉建長寺の大安禪師大方慶和尚此地に  
卓錫して荒廢を興し始り禪風を振ふる故に僧俗雲集也  
或云建長寺八十四世法慶和尚是方慶然も永徳二年壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳振を慕ひて参詣せり次三個の殿宇を造営せられりと云り  
三個と所稱大會堂善徳殿

展翼峰 壽福寺の左に續く山を云俗に神明山といふその形鳥の翼展

展如く故に号す相傳當社神明宮ハ昔小机より飛来するに鎮座なりと云

浅間山同一山續く山頂は浅間の小祠あり名とす夫ハ城の浅間山

と云是も壽福寺十境の一なり光照崖と号す荆棘を多き小篠をまけ登る者數十歩絶頂に至り崖は臨みて眺望せれば眼界蒼茫として山水の美筆端は尽しかる

吐玉泉 壽福寺より後の方の谷を隔て西の山際農氏の地あり水源白砂を吹出せたり小号とす昔ハ小澤の白清水といふ是も壽福寺

十境の一なり

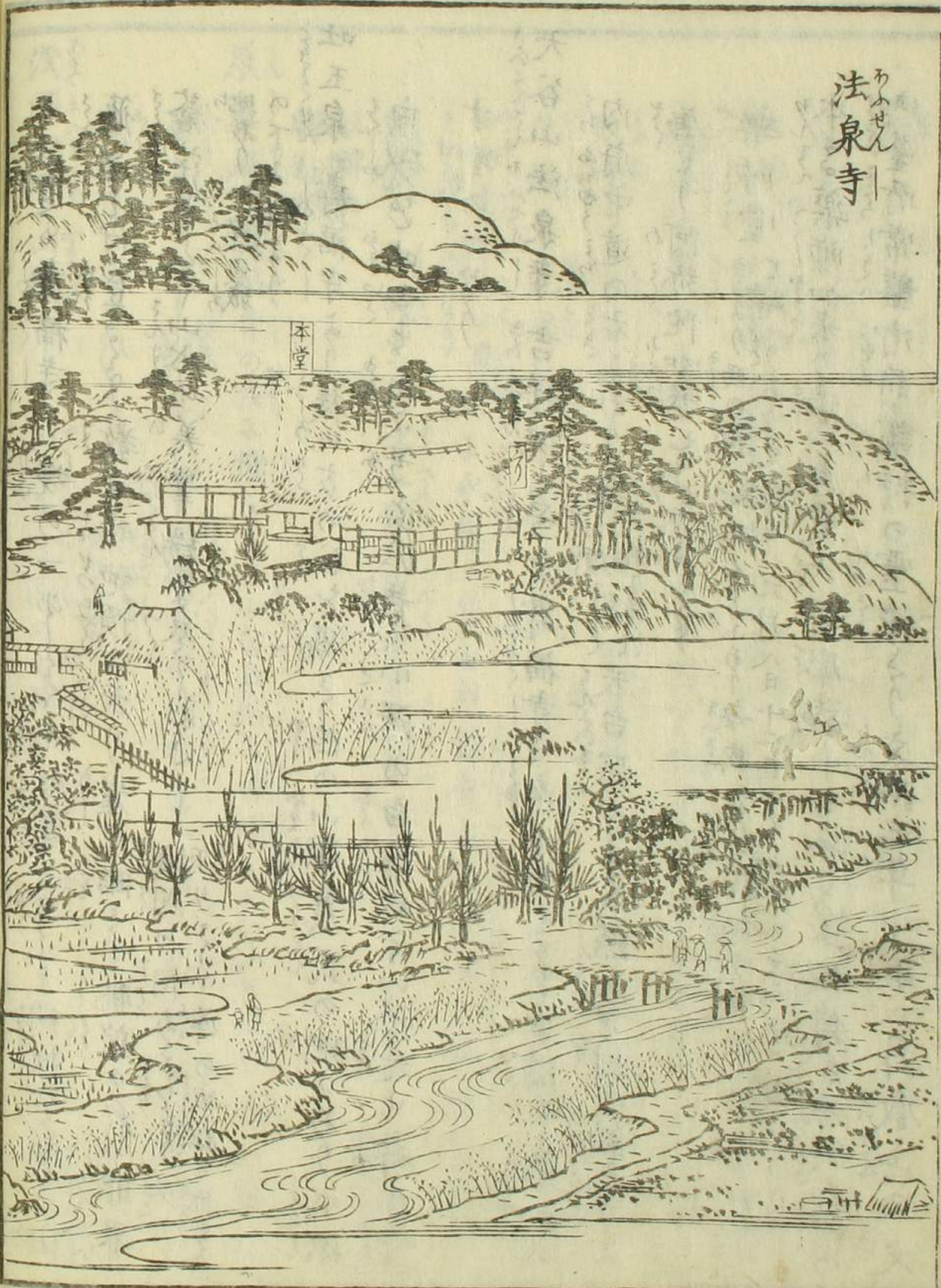
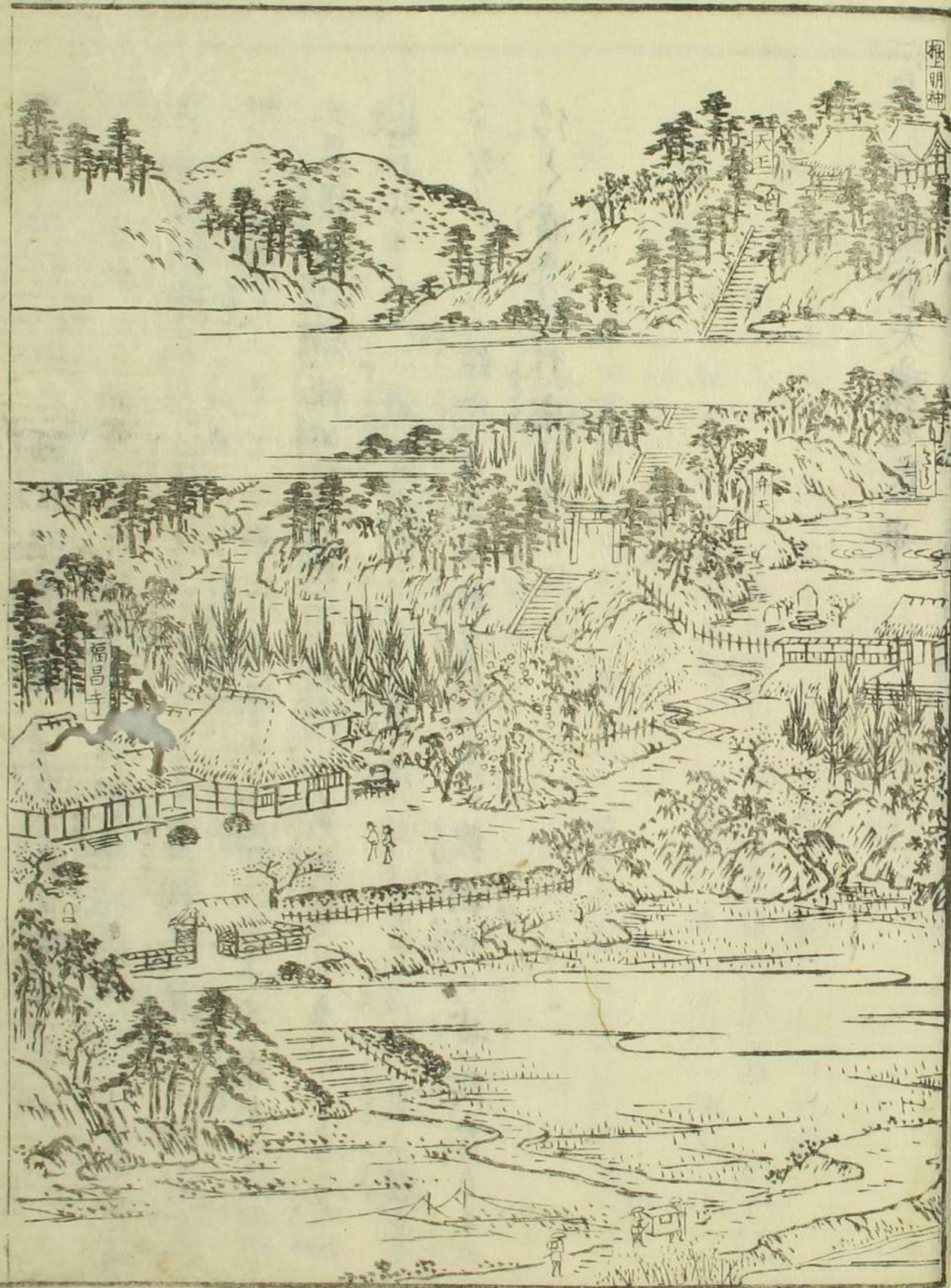
大谷山法泉寺 吉祥院と号す壽福寺の南十町を隔て菅村の内府中道の右にあり

属せり阿弥陀如来を祀るとす

藥師堂 寺あり西の傍一河半あり毎歲八月廿日獅子舞あり

本寺藥師如来の像ハ慈覺大師彫造り多しとの相傳左馬頭義朝の

御臺所常盤御前護持の靈像なり文治三年丁未八月叡山の文



法泉寺

頭阿部梨此地の領主稻毛三郎重成と共に謀り當山を廢き  
 一字の梵刹とて此靈像を安置せしが後平政子御前崇敬を  
 其項賴朝卿よりも香花の資料とて當國高麗郡の地を寄  
 附せしむ建久八年丁巳賴朝卿當寺へ詣り又康元二年丙辰  
 五月賴朝公賴經公の菩提の御堂再興なり又ひより大伽  
 藍となりて正慶建武の兵乱に廢壞せしより後日貫又復せり  
 りなりとて鐘兜唐木小机等共二品ハ賴朝卿の寄附なりと云  
 傳く當寺の什宝とす

江戸名所圖會天璣之卷畢

江戸名所圖繪全部廿卷目次

壹之卷三冊

日本橋本町通神田小川町飯田町兩國靈巖島八町堀築地

出版

二之卷三冊

鐵炮洲芝口愛宕下西久保赤羽根三田魚籃白銀芝浦  
品川驛大井鈴ヶ森池上矢口大森蒲田八幡六郷川崎鶴見  
生麥神奈川本牧程ヶ谷杉田金澤

發行

三之卷四冊

外櫻田霞關永田馬場平川溜池麻布廣尾青山目黒碑文谷北澤  
世田ヶ谷澁谷四谷千駄ヶ谷代々木高井戸武藏野府中玉川向ヶ岡

四之卷三冊

市谷牛込小石川大窪柏木成子堀之内中野小金井築土高  
田大塚雜司ヶ谷巢鴨板橋練馬大宮野火止

五之卷二冊

湯島上野日暮根津谷中三寄駒込王子川口豐島川

未春

六之卷二冊

淺草下谷根岸山谷橋場千住西新井

發行

七之卷三冊

深川本所龜戸押上柳島隅田川木下川松戸行徳國府臺  
八幡船橋

天保五年甲午孟春

日本橋通壹丁目  
淺草茅町二丁目

須原屋茂兵衛  
須原屋伊八

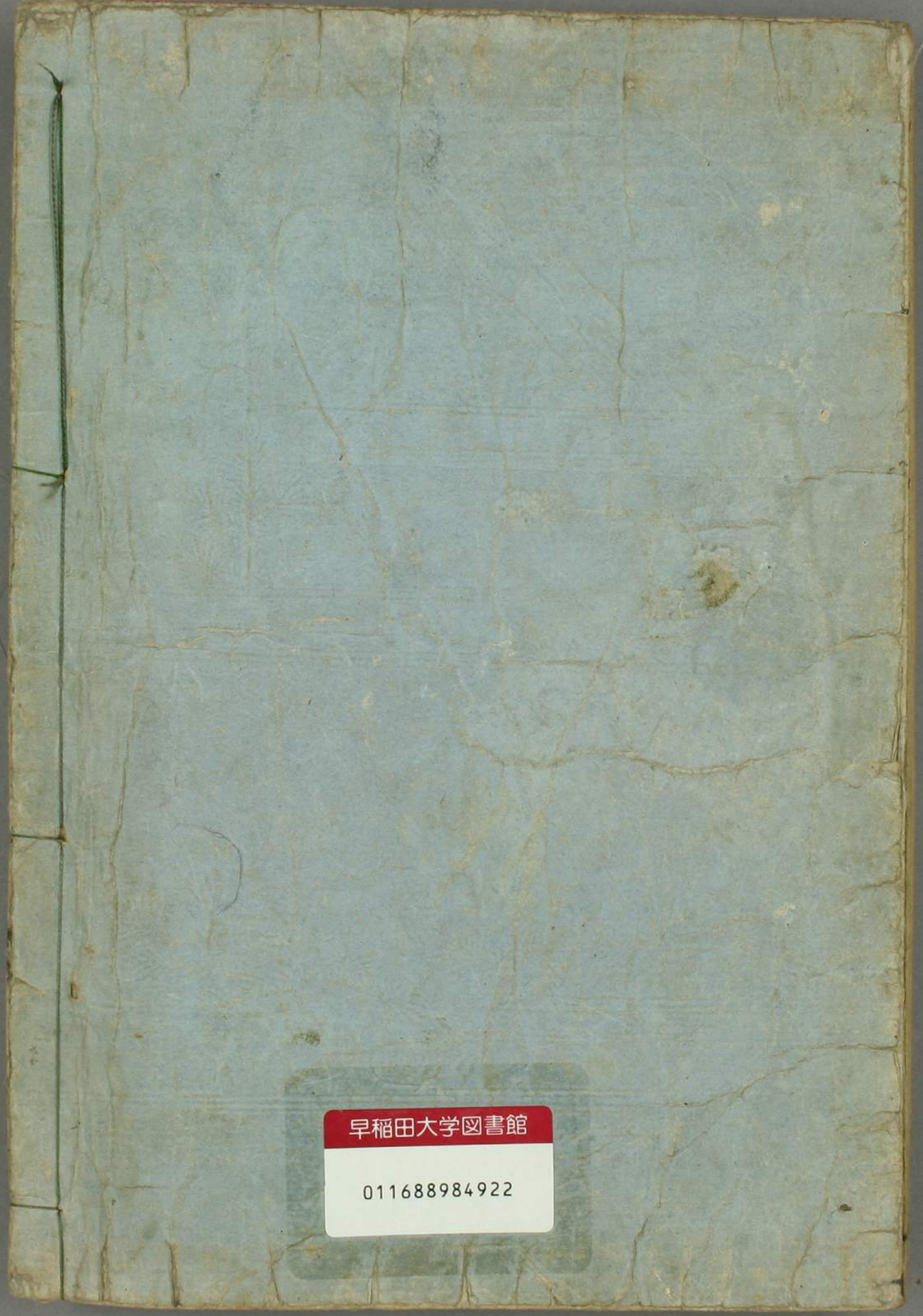


三都發

行書林

京都寺町通松原下  
 勝村治右衛門  
 大坂心齋橋筋唐物町  
 河内屋太助  
 大坂心齋橋筋安堂寺町  
 秋田屋太右衛門  
 江戸兩國吉川町  
 山田佐助  
 江戸神田鍛冶町二丁目  
 北島順四郎  
 江戸淺草新寺町  
 和泉屋庄次郎  
 江戸芝神明前  
 岡田屋嘉七  
 江戸日本橋通三丁目  
 山城屋佐兵衛  
 江戸日本橋通二丁目  
 小林新兵衛  
 江戸日本橋通四丁目  
 須原屋佐助  
 江戸南傳馬町壹丁目  
 須原屋文助  
 江戸神田通新石町  
 須原屋源助





早稲田大学図書館

011688984922